

久米池南遺跡

発掘調査報告書

1989年3月

高松市教育委員会

はじめに

高松市の東部に所在する前方後円墳・高松市茶臼山古墳は、鍬形石の出土で知られる香川県指定の史跡であります。その古墳の立地する山は標高50メートル余りと低い割には眺望が良く、高松平野の東部を手に取るように見渡せます。

そうした丘陵には埋蔵文化財包蔵地が発見されることが多く、この久米池南遺跡も採土工事中に発見されたものであります。

高松市内は近年、各種の開発事業が多くなり埋蔵文化財に関連する問題も飛躍的に増加する傾向にあります。本報告にかかる発掘調査はそうした開発と文化財保護の問題が生じた、高松市での初源的な例であります。調査は精力的に実施したもの、費用の面・期間の面等で幾つかの学習すべきところがありました。

貴重な文化遺産である埋蔵文化財は本市においても極めて多く、本成果を今後の埋蔵文化財の保護に十分役立てていきたいと考えております。

十分とは言えませんが、発掘を担当した機関としての責務を果たすため、本報告書を作成いたしました。御叱正等を賜りたいと存じます。

最後になりましたが、本調査に費用の負担も含めて協力いただいた工事関係者を始め、玉稿を戴いた古瀬先生、調査の御指導を賜りました丹羽先生等の諸先生方並びに関係機関に、厚くお礼申しあげます。

平成元年3月

高松市教育委員会

教育長 三木義夫

例　　言

1. 本書は、高松市教育委員会が、昭和58年から同63年にかけて実施した『久米池南遺跡』の発掘調査報告書である。
2. 『久米池南遺跡』は高松市新田町および東山崎町の二町に跨って所在する。.
3. 調査関係者は次のとおりである。

文化振興課長	三島 勝幸	(～昭和59年)
	河原徳宏	(昭和60～61年)
	三木丸夫	(昭和62年～)
文化振興課長補佐	入江武夫	(昭和59年～)
	大西隆雄	(昭和60～62年)
	亀井俊	(昭和63年～)
主　　事	須和建一	(～昭和57年)
文化振興課主事	藤井雄三	
文化振興課主事	合田勇一	(昭和58～62年)
文化振興課事務員	山本英之	(昭和63年～)
文化振興課嘱託	田村雅彦	(昭和59年～)
文化振興課嘱託	中西克也	(昭和62年～)

4. 調査事業の実施にあたって香川県教育委員会文化行政課の御指導を賜わった。
5. 調査全期間にわたって末光甲正氏の協力を得た。
6. 現地調査は、入江、大西総括のもと、主に藤井、末光、田村があたった。
7. 上記関係者以外の現地調査協力者は次のとおりである。
森下浩行、江木麗子、清水和
8. 整理作業および本報告書編集は亀井総括のもと、藤井が末光、中西、山本の協力を得て行った。
9. 本遺跡出土鉄器の整理保存作業の一連を広島大学助手、古瀬清秀先生にお願いし貴重な玉稿を戴いた。
10. 本遺跡出土の絵画土器は、末光氏の採集によるもので、発見後高松市教育委員会が寄贈を受けた。
11. 香川大学教授、丹羽佑一氏、香川県教育文化財専門員、渡部明夫氏をはじめ、文化財担当諸氏の助言、協力を戴いた。
12. 調査の実施にあたって、福井興業株式会社、シルバー人材センター等関係者各位の御理解と御協力を賜わった。前述協力者諸氏と併せて慎んで謝意を表するものである。

目 次

はじめに

例 言

第1章 調査の経緯	1
第2章 周囲の環境	3
第3章 遺 構	11
1. 弥生時代	11
2. 古墳時代	34
第4章 遺 物	57
1. 土器・土製品	57
2. 石 器	90
3. 鉄 器	119
第5章 調査のまとめ	126
1. 墳墓について	126
2. 絵画土器について	127
3. まとめ	131

挿 図 目 次

第1図	遺跡の位置及び周辺の遺跡	7
第2図	地形図	8
第3図	遺構配置図(1)	9
第4図	遺構配置図(2)	10
第5図	第1号竪穴式住居実測図	12
第6図	第2号竪穴式住居実測図	13
第7図	第3号竪穴式住居実測図	15
第8図	第4号竪穴式住居・第3号掘立柱建物実測図	16
第9図	第5号竪穴式住居実測図	17
第10図	第6・8号竪穴式住居実測図	18
第11図	第7号竪穴式住居実測図	19
第12図	第9号竪穴式住居実測図	21
第13図	第10号竪穴式住居実測図	22
第14図	第11号竪穴式住居実測図	23
第15図	第11号竪穴式住居炉址実測図	24
第16図	第1号掘立柱建物実測図	25
第17図	第2号掘立柱建物実測図	26
第18図	第1号テラス状遺構実測図	28
第19図	第2号テラス状遺構実測図	28
第20図	第3号テラス状遺構実測図	30
第21図	第1・2・3・4号土塙墓実測図	31
第22図	第1・2号土坑実測図	33
第23図	第1号竪穴式石室実測図	37
第24図	第5号土塙墓実測図	37
第25図	第2号竪穴式石室実測図	37
第26図	第3号竪穴式石室実測図	38
第27図	第6号竪穴式石室実測図	39
第28図	第1号箱式石棺実測図	40
第29図	第2号箱式石棺実測図	41
第30図	第3号箱式石棺実測図	42

第31図	第4号箱式石棺実測図	43
第32図	第1号石蓋土塙墓実測図	43
第33図	第2号石蓋土塙墓実測図	44
第34図	茶臼山第8号埴輪実測図	46
第35図	第1号小石室実測図	47
第36図	第2号小石室実測図	48
第37図	第3号小石室実測図	49
第38図	第4号小石室実測図	49
第39図	第5号小石室実測図	50
第40図	第6号小石室実測図	52
第41図	第1号無袖横穴式石室実測図	53
第42図	第2号無袖横穴式石室実測図	54
第43図	第3・4号土坑実測図	56
第44図	第1号竪穴式住居出土遺物実測図	73
第45図	第2号竪穴式住居出土遺物実測図	74
第46図	第3・4号竪穴式住居出土遺物実測図	75
第47図	第5号竪穴式住居出土遺物実測図	76
第48図	第6号竪穴式住居出土遺物実測図(1)	77
第49図	第6号竪穴式住居出土遺物実測図(2) 第7・8・9号竪穴式住居出土遺物実測図	78
第50図	第10・11号竪穴式住居出土遺物実測図	79
第51図	第2号テラス状造構出土遺物実測図(1)	80
第52図	第2号テラス状造構出土遺物実測図(2)	81
第53図	第2号テラス状造構出土遺物実測図(3)	82
第54図	第3号テラス状造構出土遺物実測図	83
第55図	第2号石蓋土塙墓・第1号無袖横穴式石室 第2号無袖横穴式石室・茶臼山第8号埴輪出土遺物実測図	84
第56図	土坑出土遺物実測図(1)	85
第57図	土坑出土遺物実測図(2)	86
第58図	土坑出土遺物実測図(3)	87
第59図	グリッド・トレンチ出土遺物実測図(1)	88
第60図	グリッド・トレンチ出土遺物実測図(2)	89

第61図	第1号竪穴式住居出土石器実測図(1).....	105
第62図	第1号竪穴式住居出土石器実測図(2).....	106
第63図	第2号竪穴式住居出土石器実測図(2).....	107
第64図	第3・4・5号竪穴式住居出土石器実測図.....	108
第65図	第6・7・8号竪穴式住居出土石器実測図.....	109
第66図	第9・10号竪穴式住居出土石器実測図	
	第11号竪穴式住居出土石器実測図(1).....	110
第67図	第11号竪穴式住居出土石器実測図(2).....	111
第68図	第11号竪穴式住居出土石器実測図(3).....	112
第69図	第3号テラス状遺構出土石器実測図(1).....	113
第70図	第3号テラス状遺構出土石器実測図(2).....	114
第71図	第2号テラス状遺構出土石器実測図	
	遺構外表採石器実測図(1).....	115
第72図	遺構外表採石器実測図(2).....	116
第73図	遺構外表採石器実測図(3).....	117
第74図	遺構外表採石器実測図(4).....	118
第75図	出土鉄器実測図(1).....	122
第76図	出土鉄器実測図(2).....	123

図 版 目 次

- 図版1-1) 遺跡遠景(北西より)
-2) 遺跡遠景(東より)
- 図版2-1) 第1号堅穴式住居
-2) 同上 完掘
- 図版3-1) 第2号堅穴式住居
-2) 第3号堅穴式住居・第2号掘立柱建物
- 図版4-1) 第4号堅穴式住居土層
-2) 同上 完掘
- 図版5-1) 第5号堅穴式住居焼失家屋検出状況
-2) 同上 完掘
- 図版6-1) 第6・8号堅穴式住居
-2) 第7号堅穴式住居
- 図版7-1) 第7号堅穴式住居石斧出土状況
-2) 紋画土器出土状況
-3) 第1号掘立柱建物
- 図版8-1) 第9号堅穴式住居
-2) トレンチ完掘
- 図版9-1) 第10号堅穴式住居
-2) 第11号堅穴式住居
- 図版10-1) ピット群
-2) 第1号テラス状遺構
-3) 第2号テラス状遺構土器出土状況
- 図版11-1) 第2号テラス状遺構土層
-2) 第2号テラス状遺構
- 図版12-1) 第3号テラス状遺構(南より)
-2) 第3号テラス状遺構(北より)
- 図版13-1) 第3号テラス状遺構内ピット
-2) 第3号テラス状遺構土器出土状況
- 図版14-1) 第1号土壙墓
-2) 鉄劍出土状況
-3) 第2号土壙墓
- 図版14-4) 第3号土壙墓
- 図版15-1) 第2号箱式石棺
-2) 第4号箱式石棺蓋石検出状況
-3) 第4号箱式石棺
- 図版16-1) 第1号石蓋土壙墓
-2) 第3号箱式石棺
- 図版17-1) 第1号堅穴式石室蓋石検出状況
-2) 同上
- 図版18-1) 第1号堅穴式石室
-2) 同上 噙骨部検出状況
- 図版19-1) 第2号堅穴式石室
-2) 第3号堅穴式石室
- 図版20-1) 第1号無袖横穴式石室
-2) 第1号小石室
- 図版21-1) 第2号小石室
-2) 第3号小石室
-3) 第4号小石室
- 図版22-1) 第4号小石室刀子出土状況
-2) 第2号無袖横穴式石室
- 図版23-1) 第2号無袖横穴式石室内土器出土状況
-2) 同上 完掘
- 図版24-1) 第6号小石室
-2) 第5号小石室
- 図版25-1) 第2号石蓋土壙墓
-2) 同上 完掘
- 図版26-1) 茶臼山第8号墳
-2) 同上 周溝土層
- 図版27-1) 第2号堅穴式住居土器
-2) 第3号堅穴式住居土器
-3) 第6号堅穴式住居土器
-4) 第6号堅穴式住居土器

- 図版28 第6号竪穴式住居土器
図版29-1) 第11号竪穴式住居土器
- 2) 第2号テラス状遺構土器
- 3) 第2号テラス状遺構土器
- 4) 表採(第0号竪穴式住居)
図版30 第2号テラス状遺構土器
図版31-1) グリッド出土土器
- 2) 第2号土坑土器
- 3) 第1号無袖横穴式石室土器
- 4) グリッド出土土器
図版32-1) 第2号無袖横穴式石室土器
- 2) トレンチ出土土器
- 3) 茶臼山第8号墳土器
- 4) トレンチ出土土器
図版33-1) 出土土製品
- 2) 第4号竪穴式住居南側土坑土器
- 3) 第4号竪穴式住居南側土坑土器
図版34-1) 第11号竪穴式住居石器
- 2) 第1号竪穴式住居石器
図版35-1) 第1号竪穴式住居石器
- 2) 第2号竪穴式住居石器
図版36-1) 第2・5号竪穴式住居石器
- 2) 第5号竪穴式住居石器
図版37-1) 第6号竪穴式住居石器
- 2) 第10号竪穴式住居石器
- 3) 第1号竪穴式住居石器
- 4) 第3号竪穴式住居石器
図版38-1) 第11号竪穴式住居石器
- 2) 第3号テラス状遺構石器
図版39-1) 第3号テラス状遺構石器
- 2) 表採石器
図版40-1) 第1号竪穴式住居石器
- 2) 第3号テラス状遺構石器
- 3) 表採石器
図版40-4) 表採石器
図版40-4) 表採石器
図版41-1) 表採石器
- 2) 表採石器
図版42-1) 出土鉄器
- 2) 第1号土壤基鉄劍
図版43-1) 第2号テラス状遺構鐵錐
- 2) 出土鐵斧
図版44-1) 出土埴輪
- 2) 表採石製品
- 3) 第0号竪穴式住居址炭化米

1章 調査の経緯

高松市茶臼山古墳の北方、通称「傍生山」において採土工事が開始されたのは昭和56年頃のことである。当初は、埋蔵文化財の包蔵地として周知されていなかったが、その年の冬頃には竪穴式住居や石棺と思われる遺構が採土工事によって生じた崖面で観察されるに及んで、埋蔵文化財の包蔵は確実視されるに至った。

高松市教育委員会では、香川県教育委員会の指導を得ながら、採土工事を行っている福井工業株式会社にその旨を伝え協議するよう申し入れを行った。しかし、この間連絡が必ずしも十分行えたとはいはず工事区域が拡大した。

発掘調査は、原因者側の費用負担について協議を進める間、緊急の処置として崖面近くで崩壊の危険性が高い石棺群についてまず実施した。その後原因者との負担問題の進展および採土工事の拡大により、傍生山の残る半分に調査区域を拡大していった。

傍生山の調査は、昭和58年3月から翌年の8月までのほぼ18カ月間である。

続いて昭和60年において、福井興業株式会社は傍生山の南において採土工事を実施することになった。同地域には香川県指定史跡高松市茶臼山古墳が含まれていたこと、および傍生山の状況からして埋蔵文化財が包蔵されている可能性が十分考えられたので、その処置について協議を重ねた。その結果、高松市茶臼山古墳の地域および同古墳から西茶臼山古墳に至る尾根筋については採土計画区域から除外すること、その他の地域については高松市教育委員会により試掘調査を実施することで合意に達した。

高松市教育委員会による試掘調査は昭和61年8月から実施された。その結果、高松市茶臼山古墳前方部の北西斜面、傍生山地区の南に続く付近に埋蔵文化財の包蔵が確認された。その後前者をB地区、後者をA地区と呼び、採土工事実施前に発掘調査を実施した。調査の期間は昭和62年7月から翌年3月までである。

従って、調査は両地区において2年間に渡る長期間に及んだ。しかし調査期間の関係から応急的な発掘調査を余儀なくされた部分もあり、採土工事との調整の問題等今後に課題を残す結果となつた。

調査の整理は昭和63年から1年間をかけて実施した。その間玉稿を古瀬先生に戴くなど色々な方々の援助を受けた。しかしながら、十分な報告書としての体裁が整えられたかといえばいさか心もとない限りである。御叱正をお願いしたい。

なお、遺跡の名称については、当該地が高松市新田町と東山崎町の両町にまたがり、字名も各々相違している点から発見当初から久米池南遺跡と仮称することにした。その後この名称が市民権を得るに従って仮称でなくなってきたのが実状である。ところが茶臼山方面も調査区域に包括されるに従って、高松市茶臼山古墳の存在もあって、久米池南遺跡と混同を避けるため、調査の時点では茶臼山古墳群と呼んでいた。しかし、遺跡の同一性等から本報告書では全域を久米池南遺跡と呼び、

狹義の久米池南遺跡を字名の一つを採って傍生山地区（昭和58～59年調査地区）、昭和62年調査の地区を茶臼山地区と呼ぶことにした。

第2章 周囲の環境

地理的環境

本遺跡は、高松のシンボル的存在である「屋島」の南、高松平野の東縁に位置する標高50メートル弱を測るに過ぎない小高い山——丘に所在する。その丘は花崗岩の風化した真砂土から成り、至る所でその採集が行われている。

小高い丘は、西の久米山・東の茶臼山からなり、標高10メートルに満たない鞍部によって結ばれている。さらに茶臼山は、東の前田山々塊とも鞍部で結ばれていたらしい。いずれの鞍部も、道路等によって旧状をとどめないよう改変されているが、本来は前田山から最も長く延びた尾根であったのだろう。

久米山・茶臼山の北側には高松平野北東部では最も大きい溜池・久米池が水を満々と湛え、水面にときおり屋島の姿を逆さまに映すことによって知られる。

久米山の西縁をかすめるように流れる新川は、その西を流れる春日川とともに、一対の河川と考えられる。現に、久米山の北西部辺りから、春日川に向かって北西方向に流れる直線的な旧河道が明瞭に確認でき、比較的新しい時代にも、新川から春日川に向かう流路があったものと思われる。

春日・新川の両河川は比較的水量に乏しく、西側の香東川のように大規模な扇状地は見られない。その流域一帯は、自然堤防地帯と三角洲地帯で、茶臼山・久米山の付近で分けられるようである。

寛文年間に編集された南海通記には戦国時代末期の辺りの状況を、「……春日ノ里ニ至ル、此所ハ屋島山、石清尾山兩受ノ間、入海ニテ山田郡小山ノ下マデ潮サシ来ル、速干潟ナ春日里ト木太郷ノ間、海ノ中道アツチ通用ス。……」と記載している。ここでいう小山とは、現在の高松市新田町小山にあたると考えられ、高松平野の東を限る前田山に起因する土石流扇状地帯の縁辺部の集落である。小山は海岸線から数キロメートル入った地点で、現在は<潮>とは無縁な土地柄である。百年余り後に書かれた点、南海通記の記事には問題がないわけではないが、その点を差し引いてみても、春日・新川の河口流域あたりが、水田化するのはごく新しいと言えよう。

春日・新川の西には、香東川による扇状地性の平野が広がり、積石塚古墳群で著名な石清尾山塊にいたる。また、南の春日・新川の上流地帯にも、かなりの広がりを持つ平野が見られる。春日川は高松平野南部の山間部に源流を持つが、新川は久米山・茶臼山の南付近で流路を折り、南東部から流れ出してくる。この新川上流域は東方に、あたかも回廊状に高松平野が延びている。

久米池南遺跡の所在地は、行政上、高松市新田町と東山崎町に分けられ、さらに、前田西町との境界地帯もある。さかのばれば、新田町は和名抄に言う「高松郷」に、東山崎町は「本山郷」に、前田西町は「宮処郷」に各々属する。従って、遺跡の所在する一帯は、高松・本山・宮処の三郷の焦点をしめる重要な箇所であると理解できる。

歴史的環境

本遺跡の立地する高松平野東部の辺りは、遺跡の多い地域として、早くから認識されていた。なかでも、昭和29年発見の、弥生時代後期の大空遺跡、昭和44年調査の、前期古墳高松市茶臼山古墳、昭和50年調査の巨石墳久本古墳は、高松平野ばかりではなく、香川県を代表する遺跡として知られた存在である。

周辺に立地する遺跡の中で、旧石器時代の本格的な遺跡は知られていない。本稿で紹介するように、本遺跡の発掘調査に際して、ナイフ形石器が発見されていることから、今後、付近で実施される調査は慎重になされなければならない。

縄文時代の遺跡は、旧石器時代よりさらに希薄となる。というより、現在確認されていない。しかし、今後平野部における発掘調査が進行するにつれ、それに属する遺跡が発見される期待は十分である。

弥生時代前期になると、香川大学農学部内で前期末の土器が発見されている。さらに、昭和63年度香川県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施している前田東中村遺跡でも同時期に属する遺物が発見されている。

弥生時代中期から後期にかけては、前述した大空遺跡が重要である。さらに付近には大空遺跡と同時期の遺跡として、大空南遺跡、南谷遺跡等が知られている。大空遺跡は香川県の弥生時代後期前半の標識遺跡で、1平方メートルにも満たない極めて限られた範囲から、器台を中心に壺・壺・高杯・鉢・把手付コップ形土器・製塙土器等64点の資料が出土した特異な遺跡である。南谷遺跡は比較的大規模な遺跡と考えられ、大雨によって崩壊した土砂の中から、大量の遺物が発見されて話題をよんだ。1度目は昭和51年で大量的後期に属する土器が採集された。2度目は昭和62年で前回と地点を違え、大量の製塙土器片が出土している。未発掘ではあるが南谷遺跡は、比較的高位に位置する集落遺跡として重要である。

ところで、新川や春日川の河床から、サヌカイト製の石鏸を中心に多量の石器が出土している。しかし、出土時から過去に逆のぼるために、出土位置が今一つ明確でない。ただし、その出土状態からして、遺跡もしくは包含層の流失後の二次堆積と解釈できそうである。

前述した香川県埋蔵文化財センターが発掘調査している遺跡についても、この時期の遺跡は大量に出土しているらしい。今後の調査報告を待ちたい。

古墳時代になると、集落遺跡は発見されていないが、川添浄水場の建設のおり弥生時代終末もしくは古式土師器が出土していることからしても、付近に集落が存在することは、ほぼ間違いないところである。

古墳としては、第1に高松市茶臼山古墳があげられる。茶臼山の頂上に位置する古墳で、全長60メートル余りを測る謹岐では中規模の前方後円墳である。その後円部には、竪穴式石室が2箇所設けられている。第1主体と名付けられた竪穴式石室からは、鏡形石が2個出土している。県内唯一の出土例で、その石室の構造とともに畿内的な特徴を持った古墳との評価を受ける要素の一つとなっている。

高松市茶臼山古墳の周辺には古墳が多い。第1には高松市茶臼山古墳から北西に延びる尾根上に位置する西茶臼山古墳である。この尾根の先端および東斜面が、本報告書の久米池南遺跡にあたる。西茶臼山古墳は、径20メートル余りの円墳で中心付近に竪穴式石室の天井石と思われる石材を確認できる。ただし墳丘は非常に低く、墳裾が判然としない。いずれにしても高松市茶臼山古墳を継ぐ首長墓に違いないが、その規模の相異に注目したい。

高松市茶臼山古墳と西茶臼山古墳の中間鞍部の位置に10数メートルの円墳が、高松市茶臼山古墳の西方10数メートルの斜面に円墳が造られているのが確認できる。さらに、高松市茶臼山古墳から、南と北東に延びる尾根、それぞれに古墳が確認されているが、詳細は不明である。

久米山にも幾つかの、古墳が知られている。なかでも山の西方に鎮座する諏訪神社のあたりに数基の古墳が確認されている。いずれも小規模な円墳である。おそらく古墳時代中期に属する古墳群であろう。

高松市茶臼山古墳の東方、前田山の一尾根に位置した古墳が北山古墳である。径20数メートルの小形の円墳で、調査者は高松市茶臼山古墳に先行する古墳としてとらえている。古墳の中央部に平行して、粘土構（船形木棺）2基が確認された。

その他前田山西麓の尾根上には、幾つかの古墳が知られているがその実態は明らかではない。

高松市茶臼山古墳から北北東約1キロメートルに位置するのが久本古墳である。巨大な横穴式石室で著名なこの古墳は、石棚が見られることでも知られている。石棚を設けた横穴式石室は讃岐唯一の事例で、さらに入土品の承台付銅椀や石釧直下に置かれていた亀甲型陶棺等、古墳時代後期における首長墓の格式を持つ古墳としてよいであろう。

久本古墳の北方には、それ以外に二基の大形の横穴式石室の存在が知られている。一基は小山古墳と呼ばれ、もう一基は山下古墳と呼ばれている。前者は複室構造の横穴式石室墳であったが、残念なことに土砂採集で消滅してしまっている。山下古墳は遺物等が知られていないが、玄室を覆う巨大な一枚の天井石は、市民に良く知られている。

久本・小山・山下の三基の横穴式石室は、連続的に築かれた首長墓と考えられ、巨大な首長権の存在が考えられる。前田山の西麓には、長尾古墳群の三基を最高として、単独もしくは二基程度の古墳群が存在する。そのなかで特徴的なのが岡山古墳群で、小規模な古墳の群集が知られている。工事等で大部分が失われ、内容を把握するには非常に困難であるが、古墳時代終末期の古墳群と考えられよう。

一方、前田地区にも有力な横穴式石室が知られている。玄室は殆ど埋没しているが、それでもなお、成人が立てるほどの空間を有しており、巨大な横穴式石室が想定できる。潮満塚古墳と呼ばれるこの古墳は、周間に中型から小型の横穴式石室墳を從えている。なかでも、先述した岡山古墳群と同様な小規模な横穴式石室墳からなる平尾小古墳群は注目される存在である。

極めて特色のある横穴式石室墳が前田西町に見られる。滝本神社古墳がそれで、南に開く谷奥に営まれ、T字状の横穴式石室を持つことで著名である。石室からは小型の石棺が出土したと伝えられている。石棺を納骨器とする説もあり、古墳時代前期から中期初頭にかけて讃岐で流行した朝抜

式石棺とは、軌を異にするものである。

本山・高松・宮処の各郷は、早くから開けてきた土地柄で、本山を除く各郷には古代寺院が知られている。高松郷に属する寺院が、先述の山下古墳に接して位置する山下廃寺で、相当古式な瓦を出土していることで知られるが、発掘調査等が実施されておらず、詳細は不明である。

宮処郷に属するのが、潮満塚古墳からやや離れるものの近隣に所在する前田廃寺（宝寿寺とも呼ばれる）である。堂床と呼ばれる場所にはやや小振りな礎石が見られ、地元では鐘楼跡と伝えられているようである。

高松郷の北部に位置する屋島には、日本書紀の記載で著名な屋島城跡の存在が知られている。遺構の存在が今一つ明確ではないが、現在の屋島西町浦生東側の谷を遮断する全長100メートル余りの土堀が古代城郭と関係のある遺構でないかと考えられる。日本書紀に見える屋島築城の記事は、その後背地である高松・本山・宮処の各郷の経済力を象徴しているといえよう。

本山郷の西隣が、弘福寺領讃岐国山田郡田岡の存在で著名な林郷である。林郷には田岡の他にも、六条町等、明らかに条里起源の地名が残り、一帯に条里プランが施工されたことが判明する。ところで、林郷の一部に弘福寺領が所在したことは田岡を始めとした文献で明らかであるが、同様に宮処郷にも東大寺の寺領が存在していたことが確認されている。

古代の終焉と中世の開幕を告げる源平合戦が、屋島で行なわれたことが、吾妻鏡の文治元年2月19日の条に見られる。さらに詳しくは平家物語に記載されていることはいうまでもない。このとき、高松郷も民家が源氏軍に焼かれたことが見える。本遺跡の周辺は、戦火に巻き込まれたことであろう。

- 本遺跡
- 高松茶臼山古墳
- 高松市茶臼山古墳
- 萬松茶臼山古墳
- 西茶臼山1号墳
- 西茶臼山2号墳
- 高松茶臼山南古墳
- 久米山1号墳
- 久米山5号墳
- 久米山2号墳
- 久米山4号墳
- 久米山3号墳
- 久米山6号墳
- 久本古墳
- 丸山古墳
- 山下麻寺
- 山下古墳
- 小山古墳
- 石塚古墳
- 長尾1号墳
- 長尾2号墳
- 長尾3号墳
- 奥ノ坊古墳
- 大空遺跡
- スベリ山南遺跡
- 南谷古墳
- 南谷遺跡
- 岡山小古墳群
- 岡山1号墳
- 岡山2号墳
- 岡山3号墳
- 大谷山古墳
- 古 墳
- 久本山東峯古墳
- 古 墳
- 古 墳
- 浦本古墳
- 北山古墳
- 散布池
- 古 墳
- 田峯古墳
- 金石山1号墳
- 金石山2号墳
- 古墳群
- 平尾1号墳
- 平尾2号墳
- 平尾3号墳
- 平尾4号墳
- 平尾小古墳群
- 山本古墳
- 一字一石經塚
- 宝寿寺廐寺
- 散布池
- 前田城跡
- 散布池



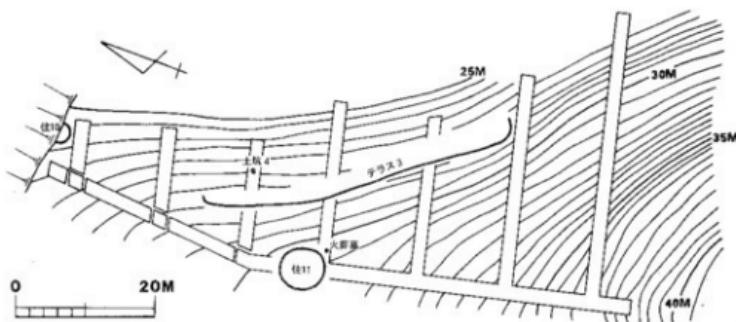
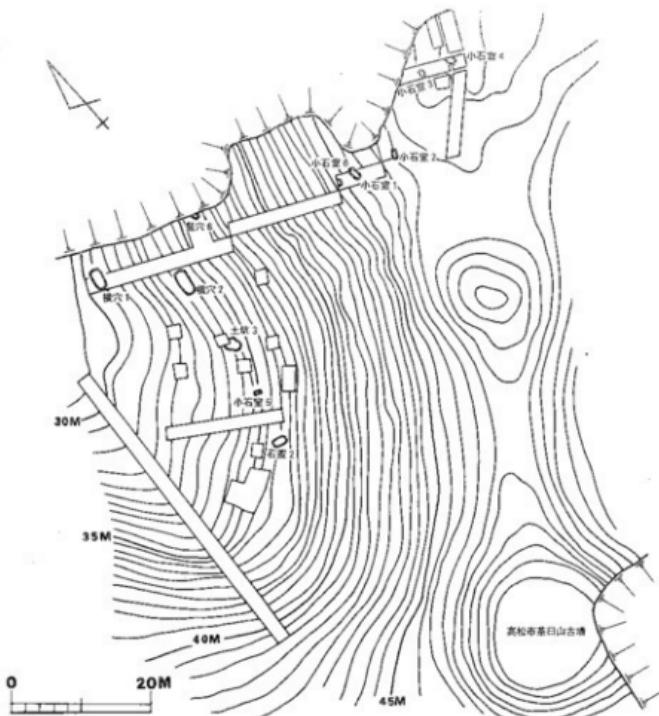
第1図 遺跡の位置及び周辺の遺跡



第2図 地形図



第3図 造構配置図(1)



第4図 遺構配置図(2)

第3章 遺構について

久米池南遺跡茶臼山遺跡で検出された遺構には、堅穴式住居跡、掘立柱建物跡、テラス状遺構、土壇墓、土壙、ピット、堅穴式石室、小石室、箱式石棺、石蓋土壇墓、古墳、横穴式石室、火葬墓等がある。

これらの遺構は属する時代で、弥生時代と弥生時代以降に大きく分割できる。

1. 弥生時代

出土遺物から、弥生時代中期後半に位置付けられる遺構群である。堅穴式住居跡、掘立柱建物、テラス状遺構、土壇墓、土坑、ピット群がこれに属する。

堅穴式住居跡

11棟が調査され、未調査のまま崩壊した1棟を合わせると、合計12棟が確認された。そのうち1棟だけが出土品から後出性を持つ以外は、11棟総て中期後半に属する。

<第1号堅穴式住居>（第5図）

久米池南遺跡の最も頂上部に位置する。上半部がかなり削平を受けていたが、床面はほぼ完全な状態で発掘できた。

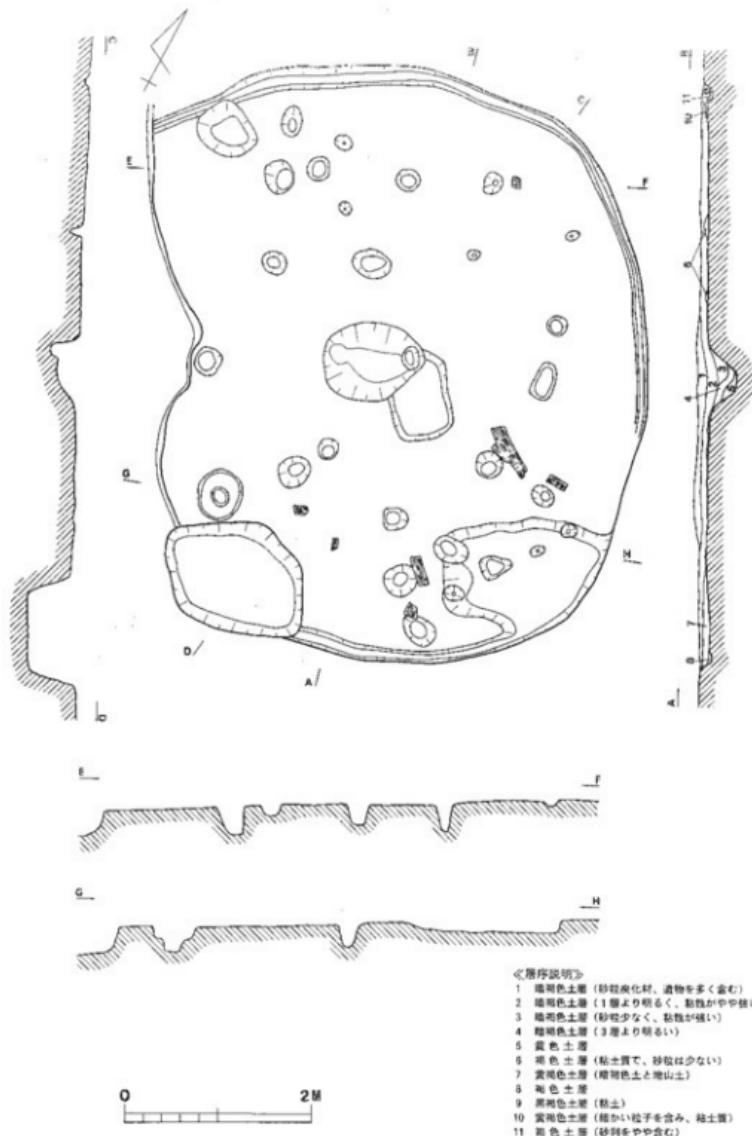
平面プランはほぼ円形を呈し、東西径5m、南北径6.35mを測る。周溝の他に、中央に炉跡と考えられるピットが、南よりには貯蔵穴と考えられるピットがそれぞれ検出された。

この堅穴式住居跡で特徴的なことは、多数の柱穴状のピットを伴うことである。全部で28個を数えるこれらのピットは、第1号堅穴式住居跡の平面プラン内に分布し、その外側に分布しないことからも1号堅穴式住居に伴うものと判断できる。それらの形態は様々であるが、比較的深く掘られたものが多く、他の堅穴式住居跡の例から柱穴と考えてよい。おそらく同位置・同規模もしくは規模縮小の建替えが、何度となく行なわれたためであろう。炭火材が多く検出されたところから、火災にあった可能性を指摘できる。遺物は土器片をはじめ石鎌、打製石庖丁、磨製石斧片、鉄器片等である。なお、炉穴直上から、ミニチュア壺蓋が出土している。単なる偶然か、意図的なものか明らかではない。

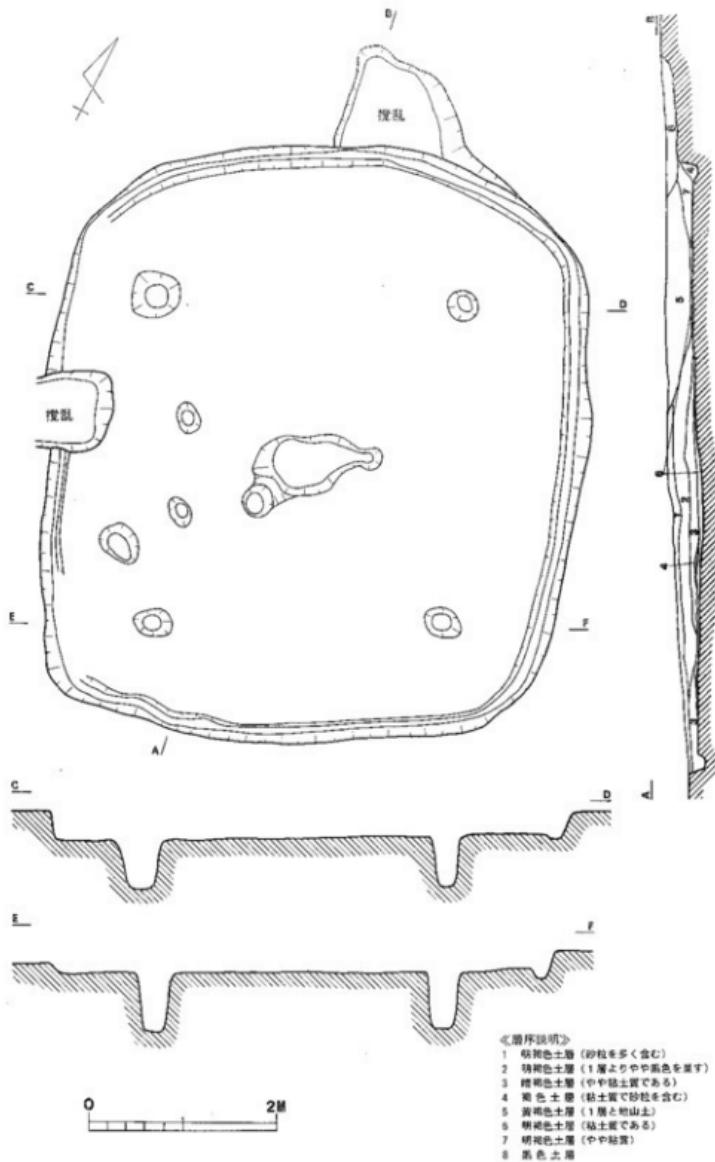
<第2号堅穴式住居>（第6図）

前記1号堅穴式住居の南に近接して検出された。久米池南遺跡では11号堅穴式住居とともに、最も良好な状態で発掘された堅穴式住居跡である。

平面プランはほぼ円形を呈する。細かく観察すれば胴張の隅丸方形プランとすることもできる。規模は最大径6.35m、最小径5.61mである。



第5図 第1号竪穴式住居実測図



第6図 第2号竖穴式住居実測図

周溝と、6箇所の柱穴を有し、中央には炉跡が確認された。

周溝は幅15~20cm、深さ5~10cmで全周を回る。

柱穴6箇所のうち4箇所は、ほぼ正方形に配置され残りの2箇所よりもやや大きく径30~50cmを測る。なお、深さは1号竪穴式住居跡のそれとほぼ同程度である。残りの2箇所の柱穴は、4箇所の柱穴に比べやや小振りである。南西の大きな柱穴を加えて等間隔で一直線に並ぶ。間仕切りとしての役目を果たす支柱穴と考えられる。

出土遺物は、土器片を始めとして、打製石砲丁・石鎌・鉄器片等が出土しているが、殆どが埋土中である。本遺跡唯一の漁労用具と考えられる土錘が1点出土している点が、注目される。

〈第3号竪穴式住居〉(第7図)

1・2号竪穴式住居の東側斜面に営まれている。1・2号竪穴式住居との間には後述する1号掘立柱建物が確認された。この3号竪穴式住居地点では、2号掘立柱建物や1号箱式石棺が重複している。

1・2号竪穴式住居そして10・11号竪穴式住居以外の竪穴式住居に共通する事柄であるが、斜面に造られているため、全体の半分程度が既に流失している。おそらく盛土部分が竪穴式住居放棄後、流失したものと考えられる。

従って、本来は円形プランであったと思われる遺構の遺存部分は、半円形もしくは弧形を呈する。その規模は弦の長さ（以下「長軸」という）4.60m以上、または弦の垂直2等分線の長さ（以下「短軸」という）1.50m以上である。

3号竪穴式住居周囲には幾つかのピットが確認されている。大型のものは、重複している2号掘立柱建物の柱穴である。竪穴式住居に伴うピットは7箇所考えられる。

また中央付近と竪穴式住居の南西縁にやや大型の土壤が見られる。後者は1号竪穴式住居と同様な位置にあり、貯蔵穴が考えられる。

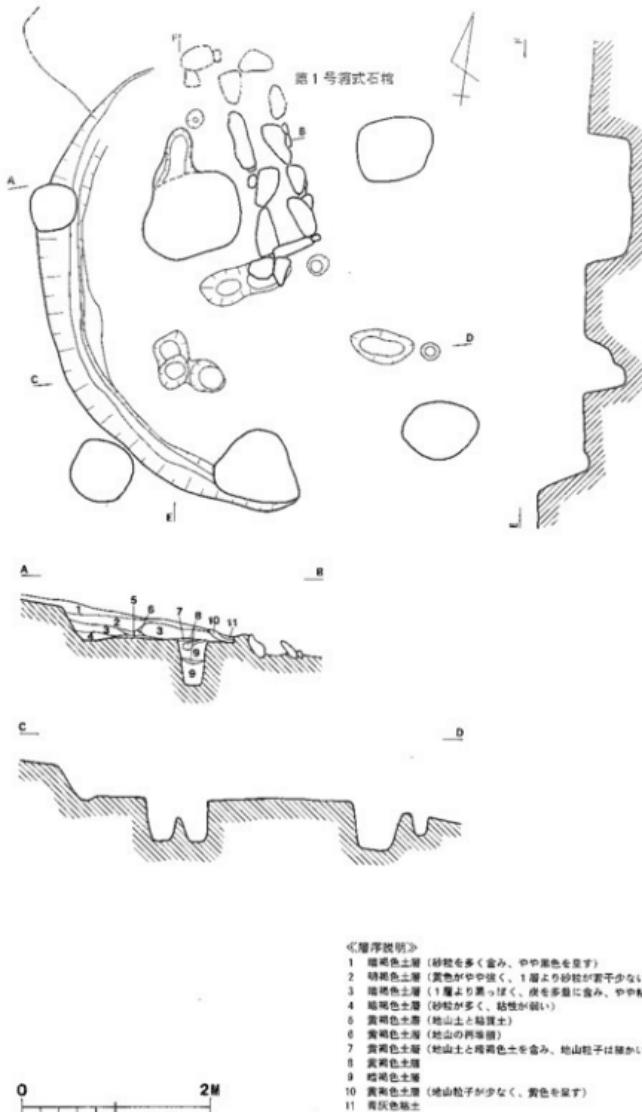
遺物には、埋土中から土器片と数点の石鎌等が出土したに過ぎない。なお、この3号竪穴式住居に伴うと見られる土器片と、後述する1号テラス状遺構から出土した土器片とが接合した。

3号竪穴式住居周囲には、その外周斜面より1段下がった孤状の遺構（？）が確認されている。竪穴式住居建設時の盛土用土砂の採取跡か。

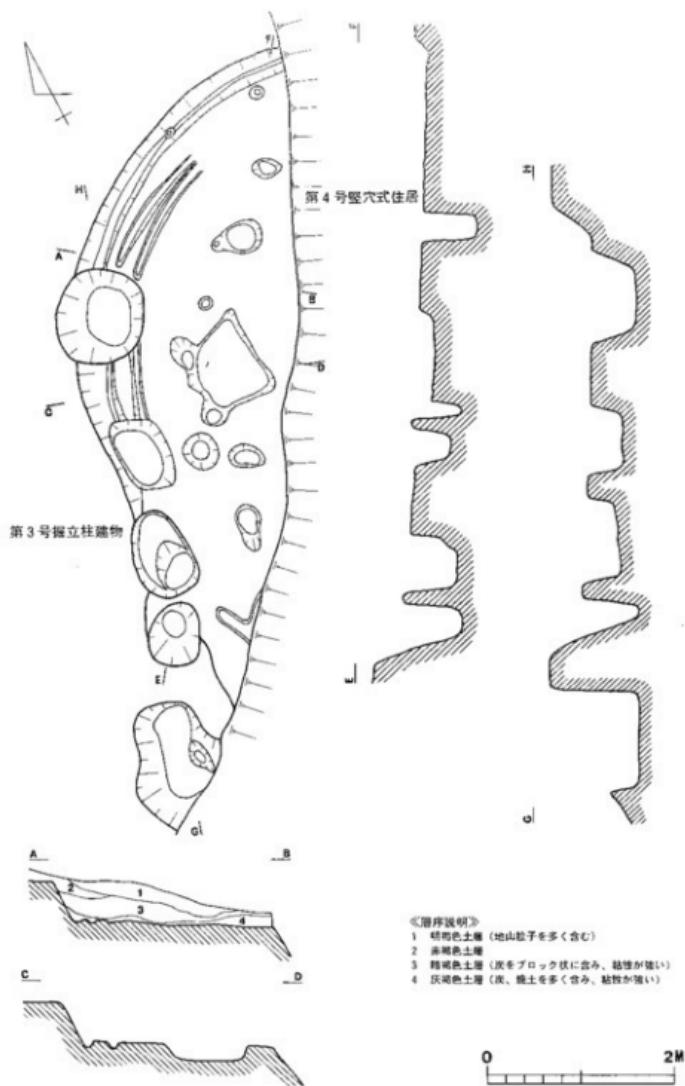
〈第4号竪穴式住居〉(第8図)

発掘された竪穴式住居跡では最も低所に位置する。採土工事に伴う重機の走行によって、遺構の一部は欠損していた。

遺存部分は、半円形を呈する。平面形はほぼ円形を呈し、その規模は長軸7m以上、短軸1.95m以上である。柱穴および周溝を伴う。出土遺物には土器片のほか、鉄器片、石鎌等があるが、他の竪穴式住居跡と比べ多くはない。



第7図 第3号竪穴式住居実測図



第8図 第4号竪穴式住居・第3号掘立柱建物実測図

絵画土器を出土した土塗が、本竪穴式住居跡に切られて存在する。また一直線に並ぶ4箇所の柱穴の存在から、樋立柱建物が存在した可能性がある。

〈第5号竪穴式住居〉(第9図)

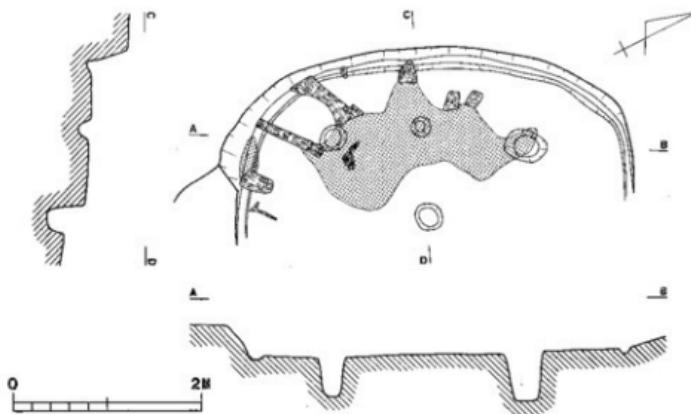
6号竪穴式住居・8号竪穴式住居の南西、ほぼ同一レベルの斜面に営まれた竪穴式住居跡である。長軸4.50m、短軸1.78mの比較的小形の竪穴式住居で、炭化した木材が何点か確認された。いずれも、竪穴式住居の中心から放射状に遺存しており、焼失時に崩落したものと考えられる。

遺物は殆どなく、少量の土器片と石庖丁が1点出土したのみである。

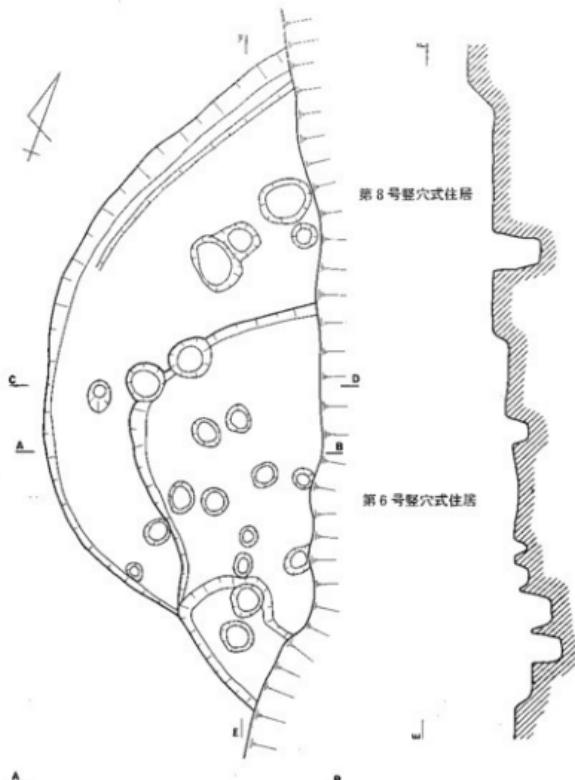
〈第6号竪穴式住居・第8号竪穴式住居〉(第10図)

7号竪穴式住居とほぼ同一レベルの斜面に営まれた切り合い関係のある2棟の竪穴式住居である。北東の下方に所在する4号竪穴式住居と同様、重機の走行によってかなりの部分を失っていた。

6号竪穴式住居(長軸4.40m以上、短軸1.50m以上)は8号竪穴式住居(長軸6.15m以上、短軸1.90m以上)を切り込む。平面プランは8号竪穴式住居が円形、6号竪穴式住居については方形のプランを呈する可能性が高い。

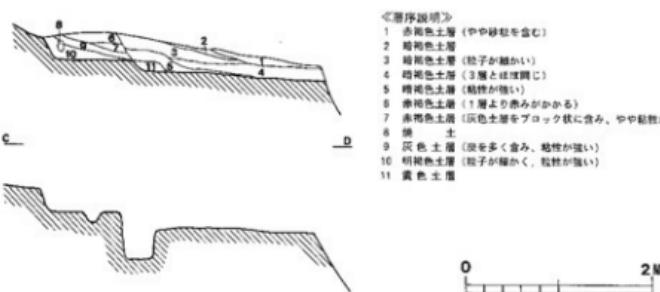


第9図 第5号竪穴式住居実測図



『層序説明』

- 1 赤褐色土層（やや砂粒を含む）
- 2 前褐色土層
- 3 前褐色土層（粒子が細かい）
- 4 時褐色土層（3層がほぼ同じ）
- 5 球褐色土層（粘性が強い）
- 6 赤褐色土層（1層より赤みがかかる）
- 7 細褐色土層（灰色土層をブロック状に含み、やや粘性が強い）
- 8 黄土
- 9 黄色土層（灰を多く含み、粘性が強い）
- 10 明褐色土層（粒子が細かく、粘性が強い）
- 11 黒色土層

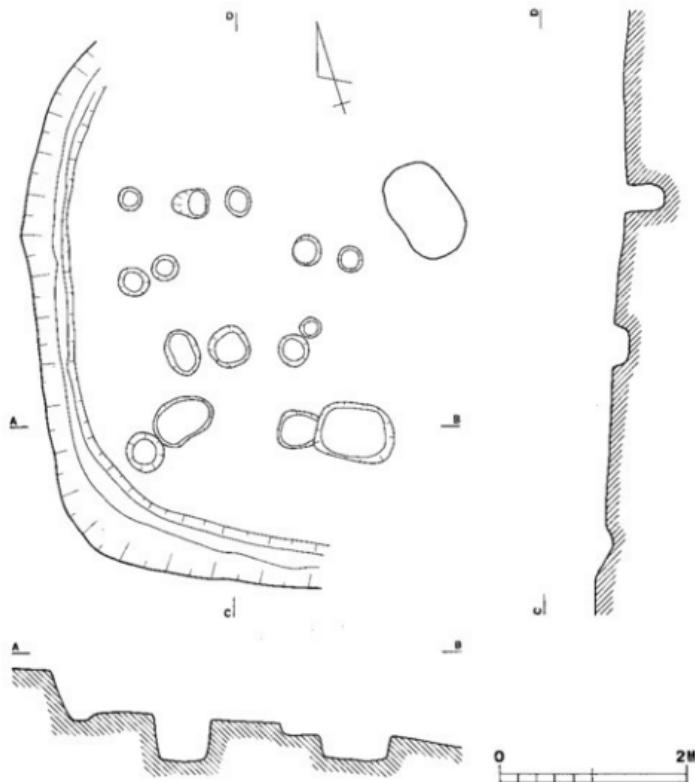


第10図 第6・8号竪穴式住居実測図

柱穴は17箇所を数え、その大部分は、8号竪穴式住居にともなうものであろう。従って、1号竪穴式住居・7号竪穴式住居と同じく同地点・同規模もしくは規模縮小の建て替えを、考慮しなければならない。

6号竪穴式住居からは、何点かの完形土器（壺）が出土している。6号竪穴式住居の埋土は炭化物を多量に含んでいた。突然の火災を受けたものと解釈できる。

8号竪穴式住居に伴う遺物は検出されなかった。



第11図 第7号竪穴式住居実測図

<第7号竪穴式住居>（第11図）

3号竪穴式住居の南、やや下った斜面に位置する。やはり斜面に造られているため、谷側が遺存していない。検出部分のみの測定値で述べれば、長軸4.40m短軸1.50m以上の隅丸方形のプランを呈する。伴う遺溝としては周溝と幾つかの柱穴が確認されている。この竪穴式住居跡でも柱穴の数が比較的多く、1号竪穴式住居と同様なことが想定できそうである。

出土遺物には、土器片の他、石鎌等の石器類が埋土中から出土しているが、床面から、結晶片石製の打製石庖丁の出土が注目される。

この竪穴式住居の南西に隣接して、形態および規模が様々な13個のピットが群集する。

なお、本竪穴式住居破棄後、幼児・嬰兒棺と考えられる8号箱式石棺が造られている。

<第9号竪穴式住居>（第12図）

6・8号竪穴式住居の西側に位置し、本遺跡で検出された唯一の西の斜面に営まれた竪穴式住居である。南北3.90m、東西3.50mを測り、今回の調査で発見された最も小形の竪穴式住居でもある。

隅丸方形プランを呈し、周溝と4個の柱穴が確認できた。床面のほぼ中央付近には、風化直前の花崗岩がやや露出していた。

遺物としては、少量の土器片が得られたのみである。

<第10号竪穴式住居>（第13図）

茶臼山8号墳の南方約30mの位置において検出された。北側半分は採土工事によって既に破壊されており、現存床面は東西で3.15m、南北1.75mを測る。平面プランは円形である。

柱穴は2個検出され、いずれも径25~30cm、深さ35~40cm、平面形は橢円形を呈する。床面は貼り床を施し、貼り床の下にはもうひとまわり大きな掘方が確認できた。また、双方とも北隣に古い柱穴が存在し、住居の建て替えのあったことがわかる。

床面中央部には橢円形の炉址があり、覆土中に焼土粒が含まれているが床面は全く焼けていない。

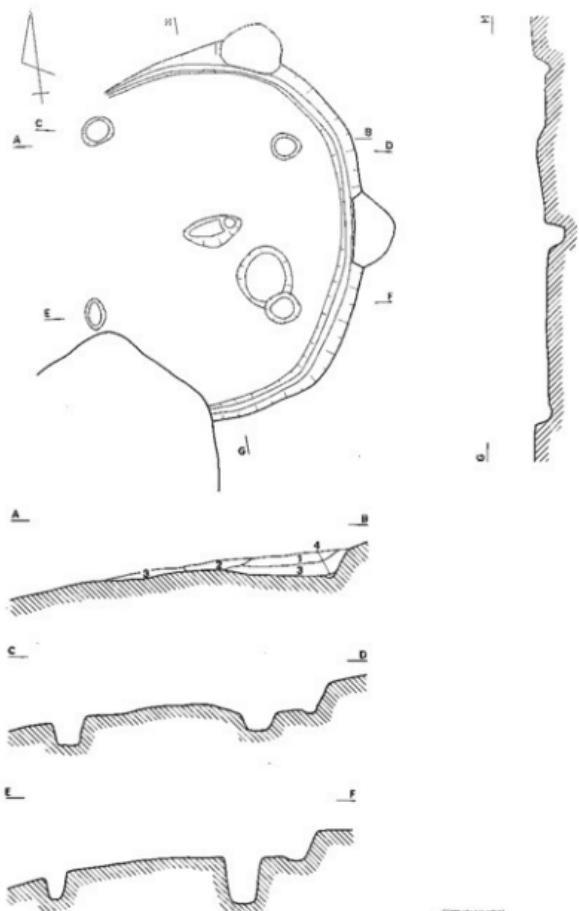
出土遺物は土器片、石等で大部分が炉址の南東側より出土している。

<第11号竪穴式住居>（第14・15図）

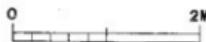
第10号竪穴式住居の40mばかり南方の平坦部に位置し、第3号テラス状遺構の西側にあたる。平面形は円形を呈し、床面の直径は5.95mを測る。本遺跡において完全な形で検出された数少ない住居跡の一つである。

周溝は幅15cm、深さ5cmを測り、床面を全周している。住居址北側から南西側にかけては旧の周溝が検出されている。幅は15cm、深さ3cm程である。

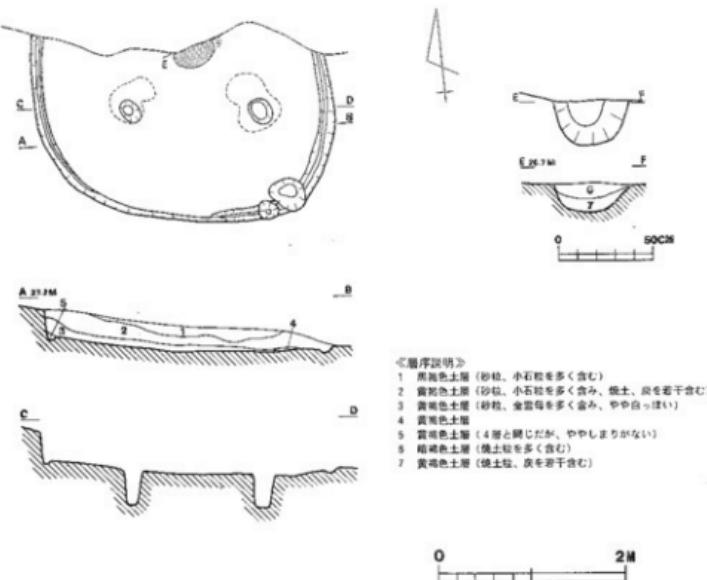
床面掘込のピットのうち柱穴として認定できるものは8個で、その規模は径20~60cm、深さ40~



〔層序説明〕
 1 赤褐色土層（若干紫色を呈す）
 2 青色土層（地山の再堆積）
 3 赤褐色土層
 4 灰褐色土層（粘土質で、やや黑色を呈す）



第12図 第9号竖穴式住居実測図



第13図 第10号竪穴式住居実測図

60cmである。柱穴の配置は、南側と北側にやや大きなものが各1個、東側と西側には各3個が南北列に並んでおり、双方とも南端の柱穴は建て替えの痕跡がある。

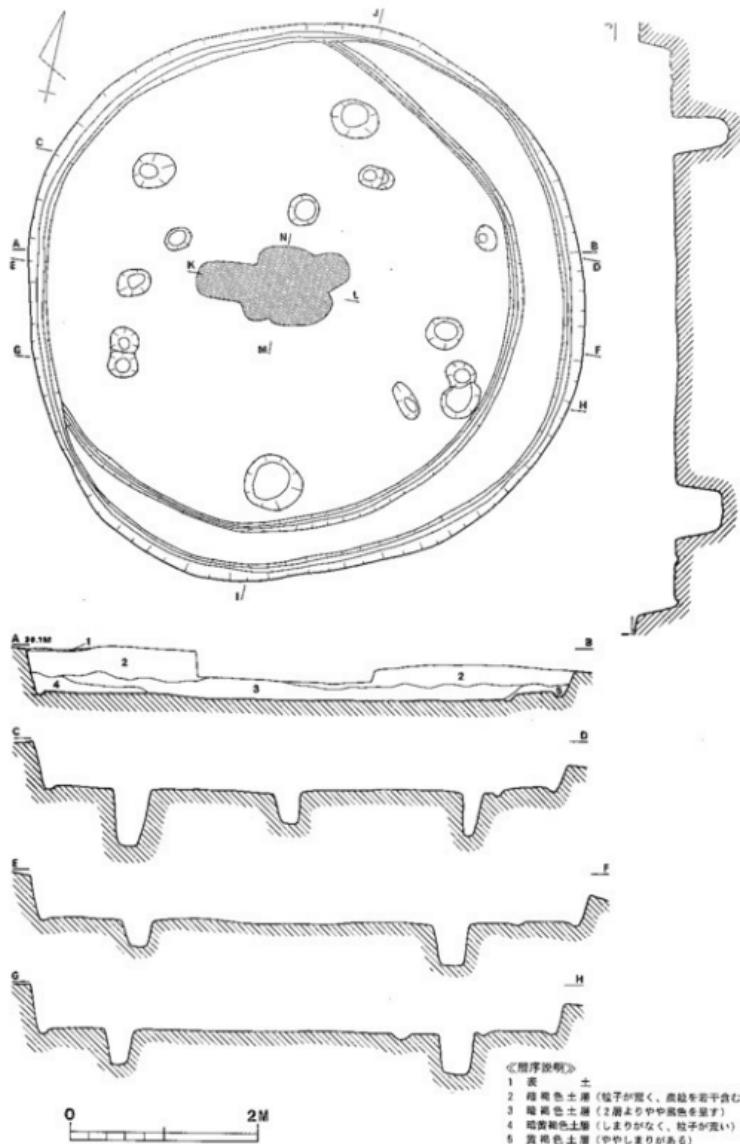
床面中央部には不整椭円形を呈する炉址があり、覆土中に焼土粒を含むが床面は焼けた痕跡がない。

出土遺物は土器、石製品、サヌカイト片、土製品等である。サヌカイト片は炉址南東側の床面を中心で確認されており、石器、石製品製作のためのスペースであったかとも考えられる。

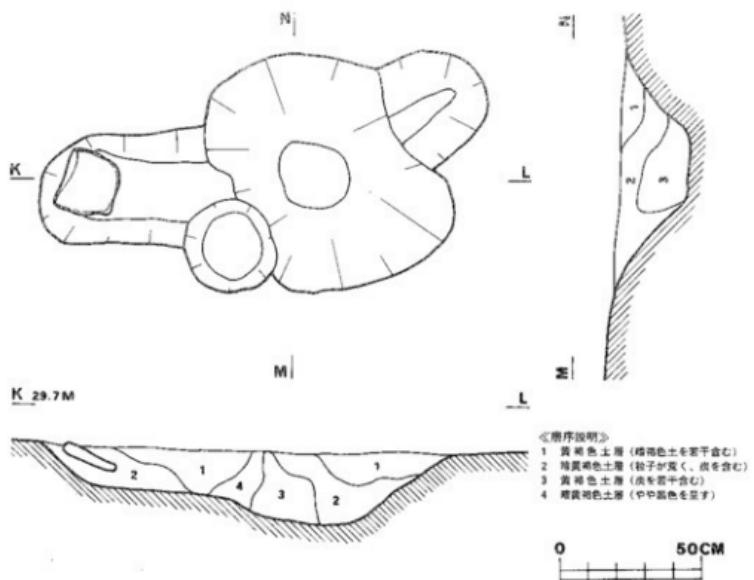
<第0号竪穴式住居>（第3図）

本遺跡の発見の経緯となった竪穴式住居である。採土工事によって生じた断面で確認され、調査前に崩壊した。1号竪穴式住居の北方向に位置した。

崩壊した土砂の中から土器片と、多量の炭化米を採取している。



第14図 第11号竪穴式住居実測図



第15図 第11号竪穴式住居跡実測図

掘立柱建物

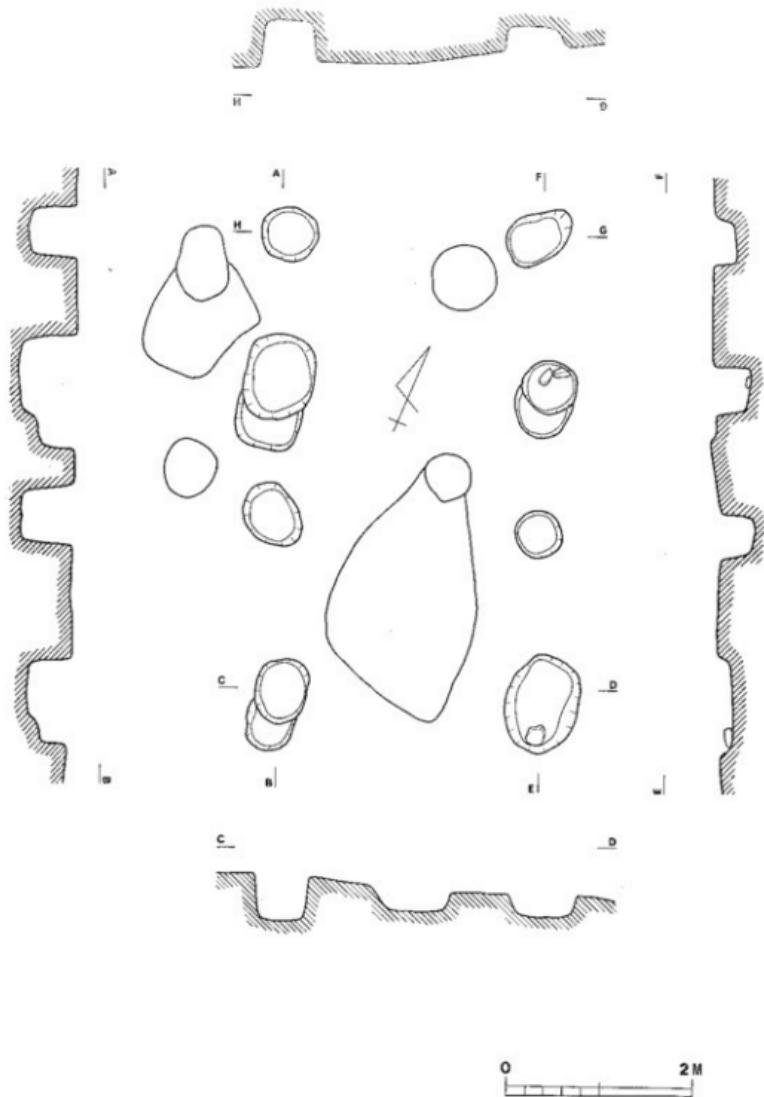
本遺跡では、確実と考えられる掘立柱建物が2棟、その可能性が考えられる1例を加え、最大3棟が確認された。

<第1号掘立柱建物>（第16図）

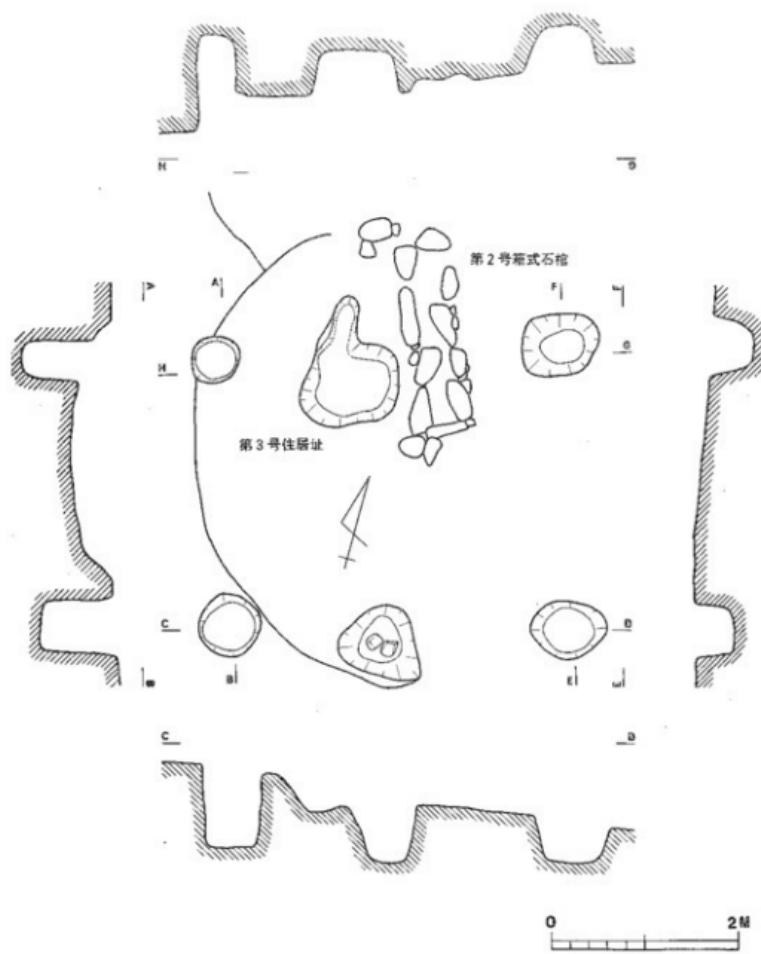
1・2号竪穴式住居と3号竪穴式住居のほぼ中間点、丘陵の最も高所の一隅に位置する掘立柱建物である。周辺は幾つかの土坑およびピットが確認されるが、そのうち8個の柱穴と思われるピットから、桁行3間・梁行1間、（縦…長軸5.80m・横…短軸3.45m）の掘立柱建物が復元できた。

8個のピットは、直径は似かうが、深さは不揃いである。ただし、深いものでは、竪穴式住居のそれとほぼ同様な深さを保ち、ほぼ同一レベルから根石と考えられる川原石が検出されている。

西側ピット列の中央2本を底辺とする二等辺三角形の頂点の位置に、8個のピットと類似したピットが検出されている。これらのピットからは遺物は殆ど出土していない。



第16図 第1号木柱建物実測図



第17図 第2号据立柱建物実測図

<第2号掘立柱建物>（第17図）

3号竪穴式住居と重なる掘立柱建物である。桁行2間、梁行1間（横…長軸4.40m・横…短軸3.40～3.70m）で平面形はほぼ方形である。柱穴は大形で特に上方に位置する2個は、深さもかなりある。

北西の柱穴が竪穴式住居完掘後確認されたことから、本掘立柱建物は3号竪穴式住居に先行すると解釈できる。

<第3号掘立柱建物>（第8図）

4号竪穴式住居完掘後、それに重複して4個からなるピット列（延長6m）が検出された。ピットの規模・間隔等は、1号掘立柱建物に極めて類似する。掘立柱建物の可能性が考えられる。

テラス状遺構

斜面を矩形にカットし、等高線に沿った平坦地を造りだした後、そこにピットを配した遺構である。本遺跡では3箇所確認された。

<第1号テラス状遺構>（第18図）

7号竪穴式住居の直下（東）あたりから、4号竪穴式住居の上方（南）に向かって延びる遺構である。位置的には、両竪穴式住居のはば中間的な座標を占める。

遺構の延長10.30m、幅2m前後でカット部分の最大は1.60m余りである。

遺構に伴うピットは全部で9個確認された。これらのうち南端の1個を除いて、残りはほぼ1mの等間隔で規則正しく並ぶ。その総延長は10.30mとなる。

出土遺物は土器片とともに磁石等の石器が出土している。さらに注目されるのは、遺構のはば中央部の平坦面直上もしくはそれに近い位置から出土した鉄器である。

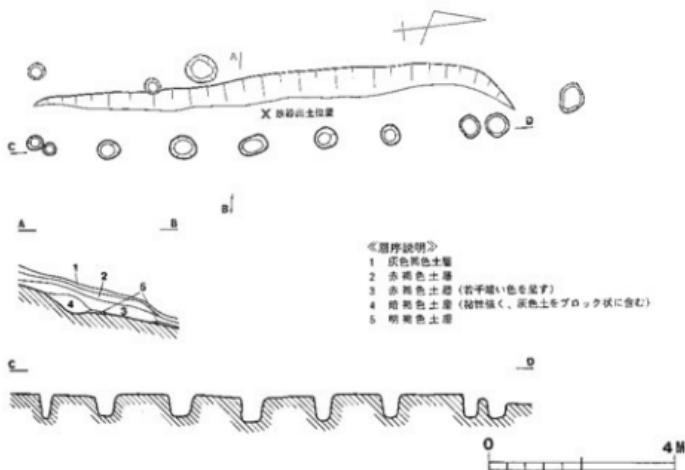
このテラス状遺構の周辺には2基の箱式石棺および石蓋土壙墓（？）1基が造られていた。

<第2号テラス状遺構>（第19図）

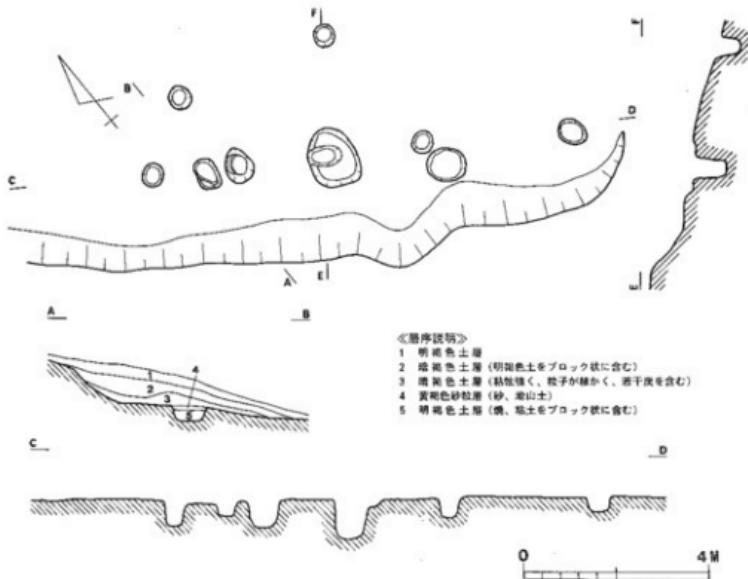
1号テラス状遺構とはほぼ同一レベルで、その北に所在するテラス状遺構である。3号竪穴式住居の北東方向——遺跡の北東斜面に位置する。遺構の延長12.80m、幅3.50m前後でカット部分の最大は2.60m余りで、1号テラス状遺構と比べ、カットは顕著であり、延長はやや長い。

ピットは9個検出されたが、1号テラス状遺構のそれと比べてやや大振りである。ピット間の距離も1号テラス状遺構と比して、ややばらつきがある。

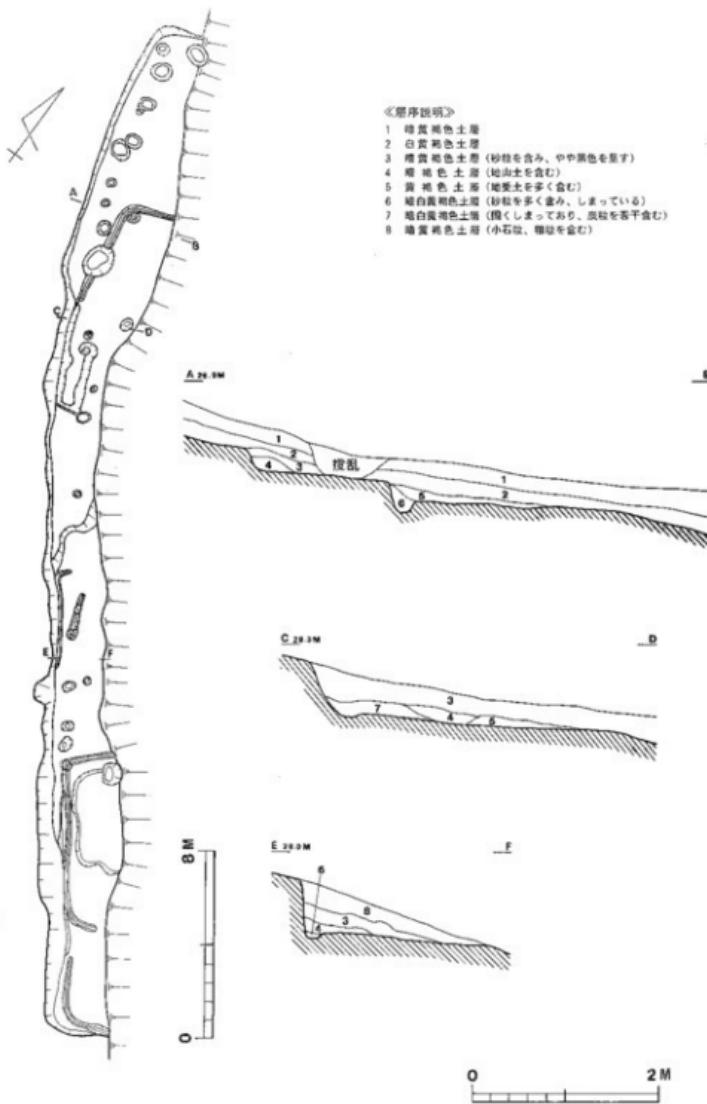
遺物としては、土器片が多量に出土した。いずれも破片ではあるが認められる器種としては、各種壺の他に、壺、高杯、鉢、ミニチュア土器等がある。このなかには3号竪穴式住居から出土した土器片と接合できたものが含まれていた。石器類では石鎚の数点をはじめとして、打製石庖丁の数



第18図 第1号テラス状遺構実測図



第19図 第2号テラス状遺構実測図



第20図 第3号テラス状遺構実測図

点がある。

特別な遺物として、焼粘土塊がある。本遺構で確認されたピットのうち2個に、詰め込まれていた。充分の硬度を持っている点から、根石の代わりを果たしているものか。とすればピットは、柱穴と考えられ、テラス状遺構は柱列を持った特異な施設と考えられる。

＜第3号テラス状遺構＞（第20図）

11号竪穴式住居の東から南にかけて伸び、他のテラス状遺構ともほぼ同一レベルを測る。遺構の延長は43.2m、最大幅3.5m、カット部分の最大幅は2.6mであり、本遺跡中最大規模の遺構である。平面形は遺構北端より14m程の部分で若干屈曲しており、ゆるやかな「L」字形を呈する。

床面は北から南へ向かって3段のなだらかな階段状を呈して下がっており、1段の段差は約25cmである。各段床面はほぼ平坦であり、北端部を除く段には山側—西壁沿いに幅10~15cm、深さ5~10cmの周溝が設けられている。

ピットは26個検出され、北端の10個は規則的にはほぼ一直線に並んでいるが、他のものは配置、規模ともに不統一ではらつきがある。

出土遺物は壺。甕を中心とした土器、石鐵・打製石磨丁等の石器、鐵鐵等である。出土地点は遺構南端部の中央やや北寄りの地点が中心で、床面直上の出土が多い。

土壤墓

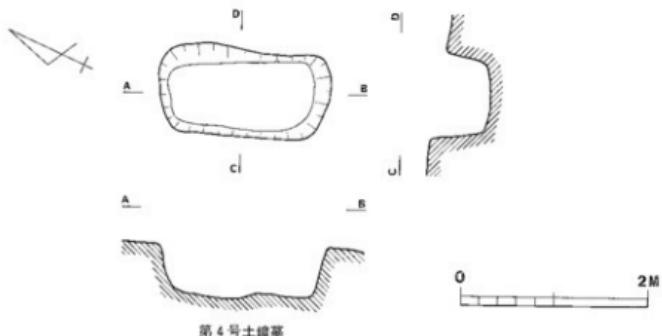
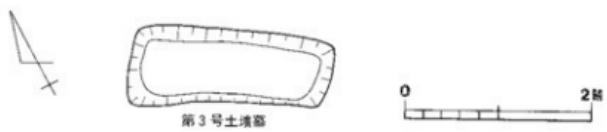
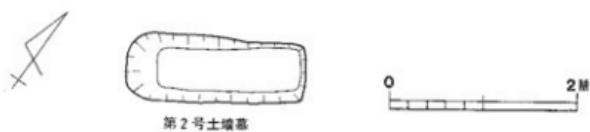
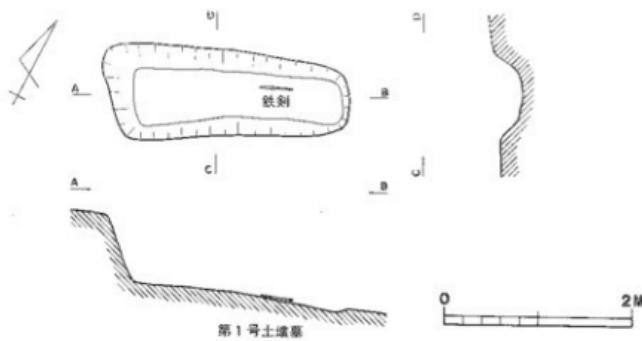
本遺跡では箱式石棺もしくはその類似した埋葬施設と、別な埋葬施設の一群（いずれも土塚墓）が検出された。前者は主軸が等高線にはほぼ平行するのに対し、後者の主軸は直交する。また、前者が竪穴式住居・テラス状遺構に近接してもしくは重複して営まれているところから、それらの遺構群の後の時代といえる。それに対して、後者はテラス状遺構とはほぼ同一レベルで、それと等間隔に並ぶことを考慮すれば、竪穴式住居（6号竪穴式住居は除く）・テラス状遺構等の示す年代とはほぼ同一としてよかろう。

＜第1号土塚墓＞（第21図）

1号テラス状遺構と2号テラス状遺構と同レベルで、両者のほぼ中間あたりに、2基の土塚墓が見られる。本遺構はその中の上方に位置する。土塚墓の中で最も大きなものである。

土塚墓の平面形は本来長方形であるはずだが、斜面に直交して造られているため、下方が流出し検出プランは逆台形（長さ2.57m・上部幅1m・下部幅0.58m）を呈していた。また上部は大きく開き、上部では深さ0.78mで、下部では0に近い数値が得られたに過ぎない。一方下場は、主軸長2.22m、幅0.50mである。

遺物としては、鉄剣が一振出土した。土塚墓の下方左側に、切先を下方に向け、主軸に平行に置かれていた。その整然とした出土状態から副葬品と考えられ、土塚の形態とともに、本遺構を墳墓



第21図 第1・2・3・4号土塘墓実測図

とするための有力な証拠である。

本遺構を土塙墓とした場合、下方の流出土を補い考えても、少なからずの盛土の存在を考慮せざるを得ない。

＜第2号土塙墓＞（第21図）

1号土塙墓の北東下方に位置する。検出面で長さ1.90m、幅0.70mで1号土塙墓より小型であるが、形状は相似する。出土遺物はない。

＜第3号土塙墓＞（第21図）

1号テラス状造構の北西斜面・5号竪穴式住居跡の下方に位置する。検出面での長さ2.17m、幅0.77mを計測した。その形状は1・2号土塙墓と何等変わることはない。遺物については、2号土塙墓と同様である。

＜第4号土塙墓＞（第21図）

第1号掘立柱建物の北方には、長軸0.92m、短軸0.46m、深さ0.45～0.50mの直方体に近い形状を呈す土塙墓が検出された。1～3号土塙墓の形態が上方に開くのに対し、本遺構にはそれがない。

土 坑

土坑およびピットは何箇所かにおいて検出された。その形態は一様のものではなく、変化に富んでいる。その主要なものについては、次のとおりである。

＜第1号土坑＞（第22図）

5号竪穴式住居と茶臼山8号墳との間に検出された。平面形は長方形を呈すが、1辺がややみだれしている。規模は長軸0.73m、短軸0.42mを測る。掘り込みは浅く、0.1mであり、底面はほぼ平坦である。

遺物は土器片が主であり、高杯・甕が出土する。

＜第2号土坑＞（第22図）

1号土坑の北側に検出され、若干高いレベルにある。平面形は1辺が張った直角形を呈し、その規模は1辺0.7mを測る。斜面にあるため山側一北壁の掘り込みが深く、0.25mであるが、その他は浅い掘り込みである。底面は平坦である。

遺物は土器が多数出土し、器種としては壺・高杯・甕がある。

<第7号堅穴式住居周辺の土坑群>

7号堅穴式住居の南西部分、長さ5.2m×幅1mの帯状の範囲に上坑もしくはピットの集中している部分がある。その数は13個で、大型のピットもまじる。大きなもので、径0.56m、深さ0.6mである。1・2・3号堅穴式住居が住居内に貯蔵穴と考えられる比較的大きなピットを有する事から、本例も貯蔵穴の可能性が考えられる。

遺物には土器片と数点の石鏃が得られた。

<第1号掘立柱建物周辺の土坑>

1号掘立柱建物と重なる位置にある。長軸1.2m、短軸0.8mの規模を測る。深さは浅い。平面形は不整梢円形を呈す。遺物は、石庖丁以外にはほとんどない。

<第4号堅穴式住居隣接の土坑>

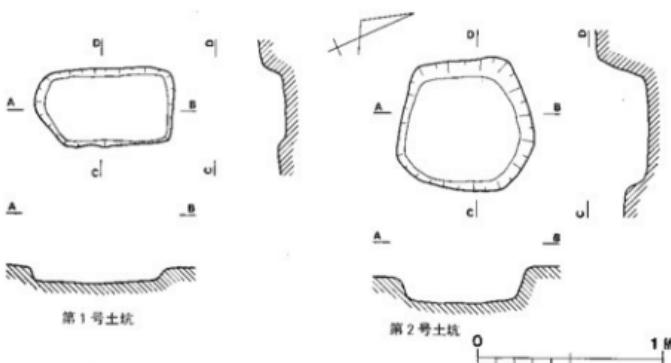
絵画土器を出土した土坑である。遺構は円形を呈し、構造は単純である。絵画土器片が大型の壺の破片とともに土坑の中深部に重なって出土した。

<第3号土壙墓隣接の土坑>

3号土壙墓と隣接した土坑で、ほぼ方形の平面プランを呈する。土器細片以外に遺物の出土は認められなかった。

<第9号堅穴式住居周辺のピット群>

9号堅穴式住居の周辺には幾つかの小ピットが、幾つかのグループに分かれて存在する。すべてのピットは規模が小さく、何等かの構造物によるものではないと考えられる。



第22図 第1・2号土坑実測図

2. 古墳時代

弥生時代中期に属する造構以外に、箱式石棺等の埋葬施設が幾つか確認された。ただし、4・5号堅穴式石室、6号箱式石棺は存在を確認するのみである。

＜第1号堅穴式石室＞（第23図）

3号堅穴式住居の南西に検出された。堅穴式石室のなかでは最も遺存状態が良く、内部では一部分の人骨が残されていた。

小口部分に比較的大形の石材を置き、側壁部分には小形の石材が2段ないし3段積まれていた。さらに天井石は数個架けられており、その隙間に粘土によって充填されている。石室の規模は、全長1.7m、幅0.42m、深さ0.3mを測る。

なおこの石棺に平行して、粘土塚の土塚墓が検出されている。

＜第5号土塚墓＞（第24図）

規模は全長1.9m、幅0.7m、深さ0.55mを各々計測した。1号堅穴式石室と主軸を平行にしたもので深い関係にあるものと推察できる。

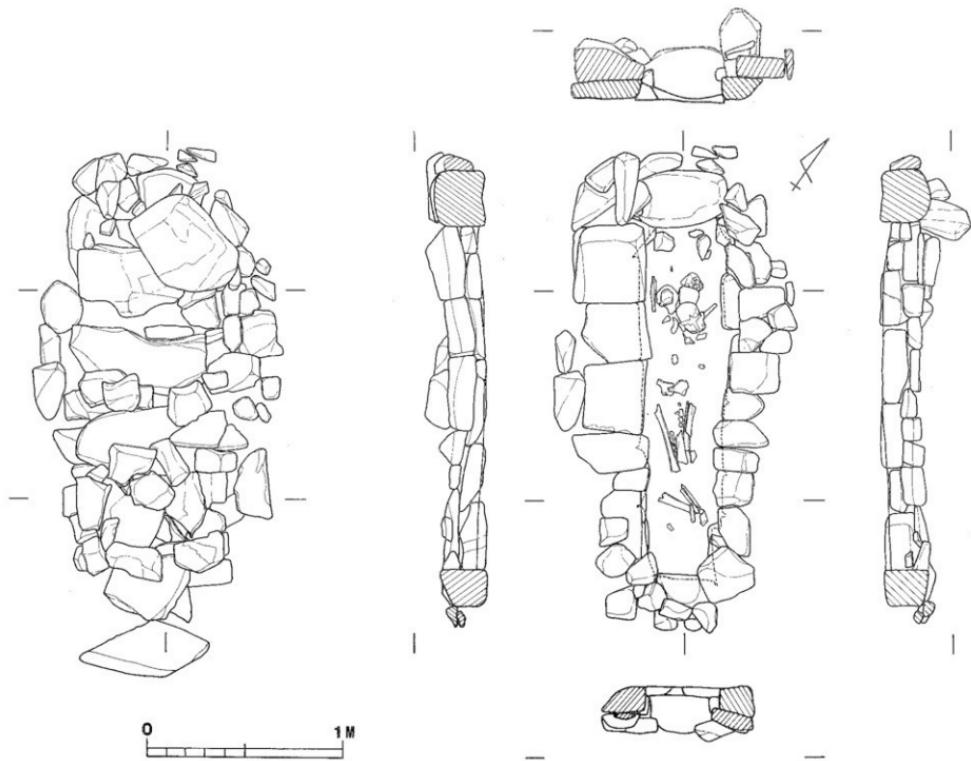
＜第2・3号堅穴式石室＞（第25・26図）

いずれの形態としては、1号と同様である。断崖状で検出されたため十分な調査を加えることができなかった。規模としても、1号と同様もしくは小規模なものである。ただし、主軸をランダムにとっている。

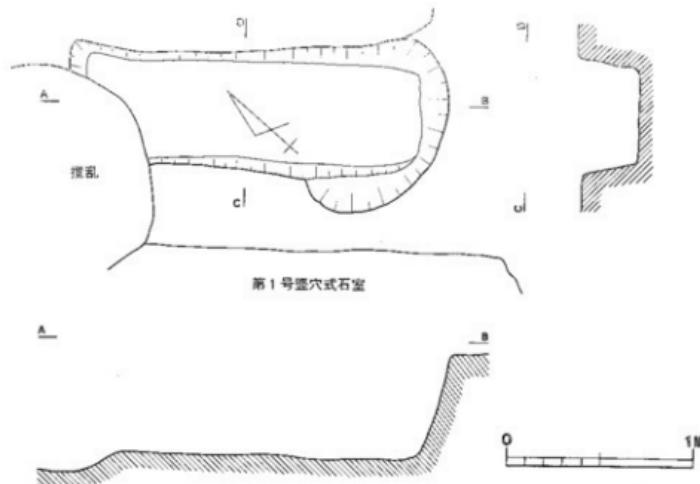
＜第6号堅穴式石室＞（第27図）

1号横穴式石室より5m程高い位置にあり、等高線沿いに構築されている。石室の北半分は採土工事によって破壊されており、残存する南半分も左側壁の基底石の一部は重機によって原位置より若干動かされている。

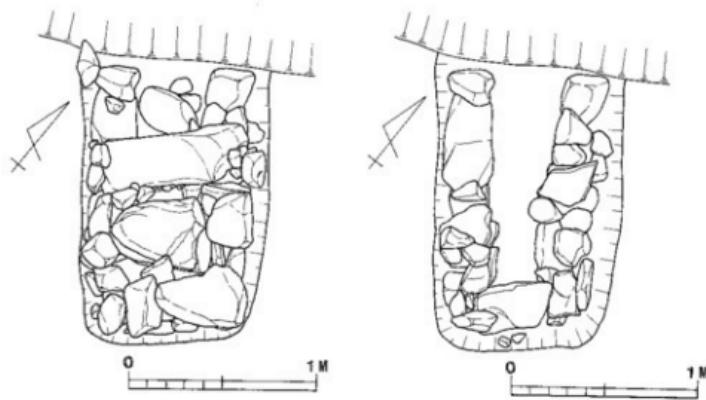
現存する石室の内法は全長0.98m、南小口幅0.33m、現存最大高0.28mを測る。主軸方向はほぼ磁北を示している。天井石は長さ40cm、幅30cmの板状の石を置き、その隙間を小石で充填している。南小口には36×32×12cmのほぼ正方形の板石を立て、側壁も同規模の石材を左右各3個づつ立て並べている。このことから、既に消失している北側半分も同様の構造であったと推定できる。石室床面はほぼ平坦であった。石室掘方の調査は不十分であるが、石室埋土には黄褐色土が堆積していた。石室内からは遺物は全く出土していない。



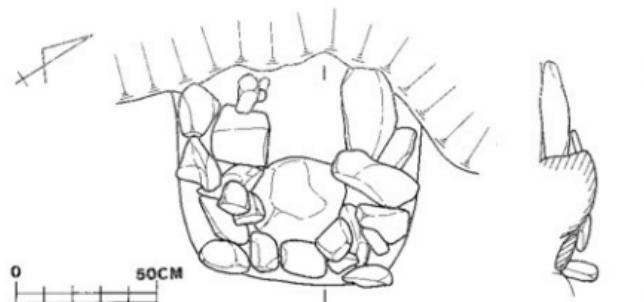
第23図 第1号堅穴式石室実測図



第24図 第5号土塚墓実測図



第25図 第2号竖穴式石室実測図



第26図 第3号竪穴式石室実測図

〈第1号箱式石棺〉(第28図)

3号竪穴式住居のほぼ中央付近に造られていた。天井石は既に失われていた。やや石材の移動が認められたが、規模は全長1.85m、幅0.3m、深さ0.2m以上を測る。外側を粘土で被覆しており、その粘土につつまれて1個の鉄器が出土した。

〈第2号箱式石棺〉(第29図)

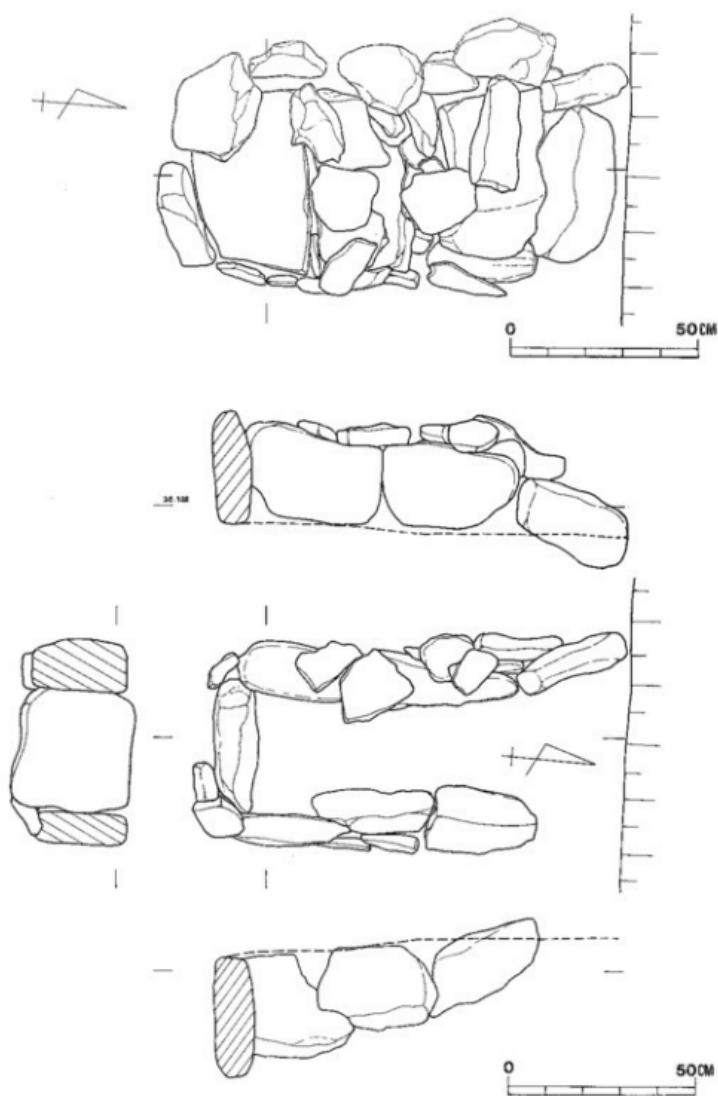
7号竪穴式住居の中央付近に造られていた。小児棺である。花崗岩の直方体を4個組み合わせてごく狭い空間を造り、やや不定形な花崗岩を天井石として架けている。さらに隙間にごく小さい石を詰め、最後に全体を粘土で包みこんでいる。全体として丁寧な造りである。規模は全長0.42m、幅0.15m、深さ0.28mで伴出遺物はない。

〈第3号箱式石棺〉(第30図)

1号テラス状遺構の北端付近に、検出された。平板的な石材を組み合わせて石棺としたもので、発見時には天井石は既に失われていた。規模は全長1.15m、幅0.38m、高さ0.35mで伴出遺物はない。

〈第4号箱式石棺〉(第31図)

1号テラス状遺構の西側に位置する。板状の大形石材を組み合わせ、天井石にも同様な石材を架けていた。検出された箱式石棺のなかでは、最も丁寧な作りの箱式石棺である。規模は全長1.7m、幅0.34m、高さ0.29mで伴出遺物はない。



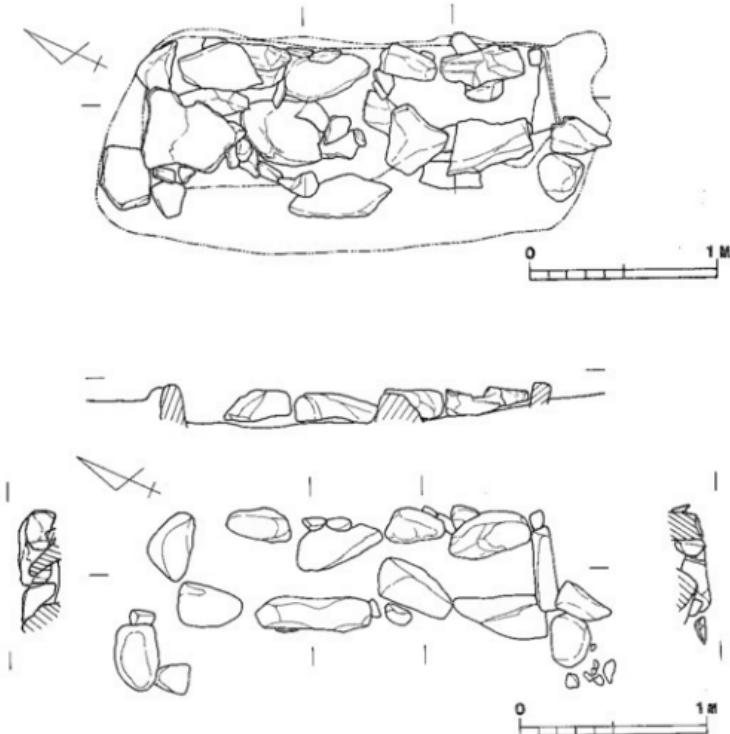
第27図 第6号竪穴式石室実測図

<第5号箱式石棺>（第32図）

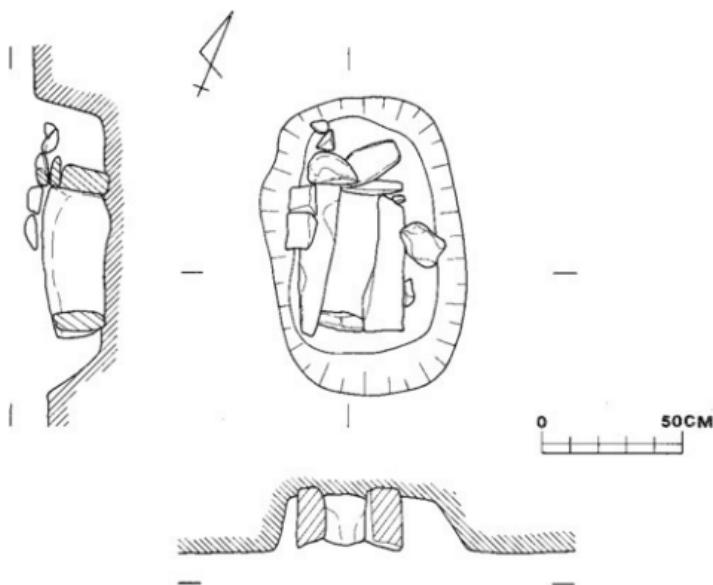
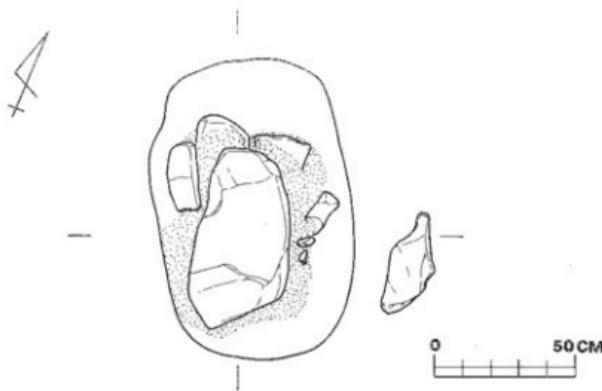
5号堅穴式住居に隣接して造られていた。石材は殆どが失われ、ごく少量化の残存石材と、掘り方が検出されたに過ぎない。ただし、石材には他の箱式石棺には見られない安山岩の板石が使われている点が注目される。

<第1号石蓋土塽墓>（第32図）

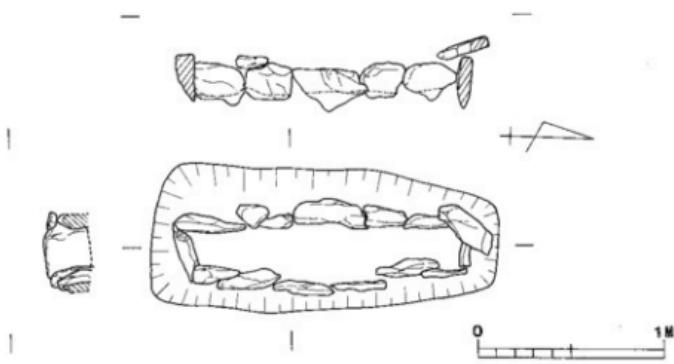
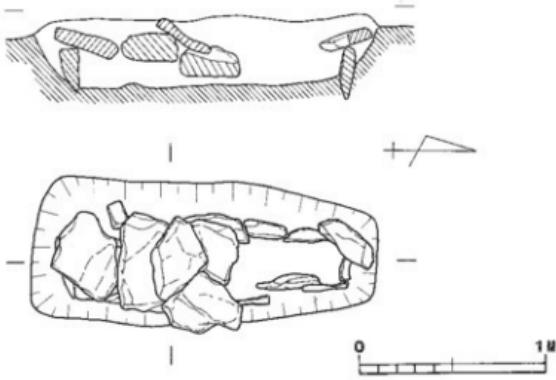
1号テラス状遺構の北側に検出された。石棺群のなかで本遺構が唯一弥生時代中期末とされる遺構で、やや離れて存在する。箱式石棺と表現するよりは、石蓋土塽墓とした方が適切であろう。掘り方は方形で、板状の石材を数枚重ね粘土で被覆した丁寧な造りの天井の構造を示している。しかし、埋葬部は素掘り土壤であった。規模は全長1.9m、幅0.9m、深さ0.45mで伴出遺物はない。



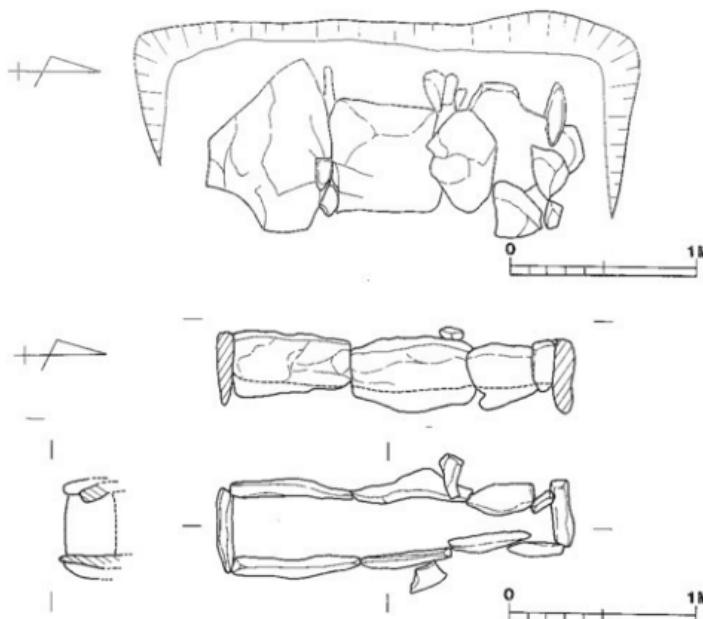
第28図 第1号箱式石棺実測図



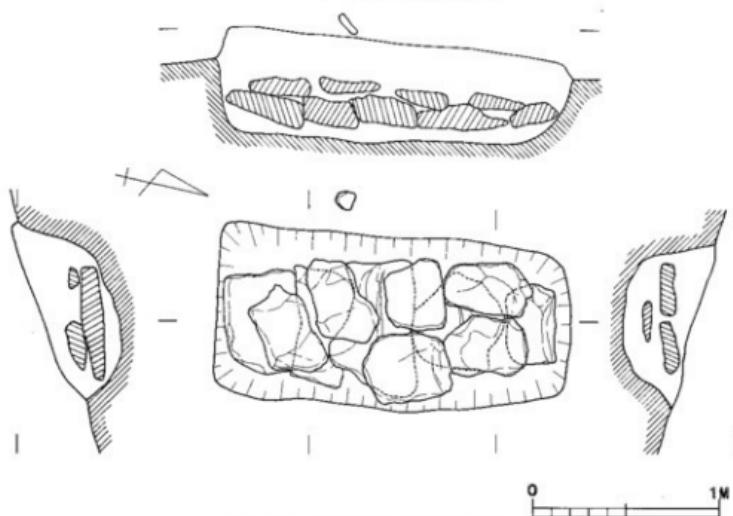
第29図 第2号箱式石棺実測図



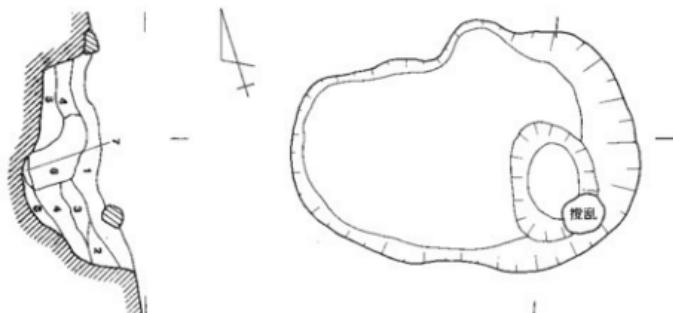
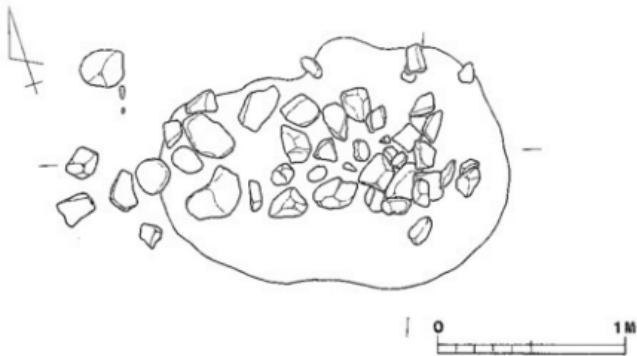
第30図 第3号箱式石棺実測図



第31図 第4号箱式石棺実測図



第32図 第1号石蓋土壤基実測図



《層序図例》

- 1 黒褐色土層 (粒子が細かい)
- 2 黒褐色土層 (粒子があらく、粘性若干有る)
- 3 線貫黒褐色土層 (地山土を含む)
- 4 線貫褐色土層 (透明白土、黒褐色土を含む)
- 5 黑褐色土層 (地山土を多く含む)
- 6 線貫黒褐色土層 (砂粒、地山土を含み、粘性無し)
- 7 線褐色土層 (しまりが強い)
- 8 線貫褐色土層 (粒子が粗く、しまりが強い)



第33図 第2号石蓋土塙墓実測図

<第2号石蓋土壙墓>（第33図）

5号小石室の南側に位置し、標高は36mを測る。

土壙は隅丸方形を呈し、斜面に直交して構築されている。このため山側の掘込が深く、0.6mを測る。土壙全長は1.85m、最大幅1.3mである。土壙上の石材は径10~20cm前後の塊石が並べられており、1号石蓋土壙墓のように板石が架け渡されている状況とは若干異なる。土壙底にはピットが1個検出されている。遺物は土壙上面の塊石の隙間から小形壺と甕の底部が出土している。

<茶臼山8号墳>（第34図）

傍生山の西茶臼山の鞍部に造られた古墳である。南側では里道のため、破壊されていた。

その周溝は幅2.4~3mで鞍部の微高地を中心にはば円形を描いている。尾根を切断する部分は周溝は明瞭に掘削されているが、稜線の東側と西側の斜面では、溝はやや不明瞭であった。

周溝が描く円形の中心付近に、安山岩の板石の集積が見られた。集積は敷き詰められたものと、立ったものに分けられる。後者はごく少数で、集積の外縁に位置する。従って、安山岩の板石で造られた箱式石棺が、周溝の中心部に位置したと考えられる。しかも、床面に板石を敷くという丁寧な作りであった。遺物は、周溝内の埋土に含まれた弥生土器片と、周溝内上部から検出された須恵器以外出土しなかった、いずれも古墳に伴うものではないと判断できる。

周溝の形態からして、本遺構が円墳であることに違いない。しかし構築年代は、不明である。石棺群と同年代であるのか、8号墳の上方・西茶臼山に位置する西茶臼山古墳に近い年代が考えられるのか、両者の可能性を指摘するにとどめたい。

3. 茶臼山遺跡

<第1号小石室>（第35図）

2号小石室と6号小石室の間に検出され、標高45.5mを測る。

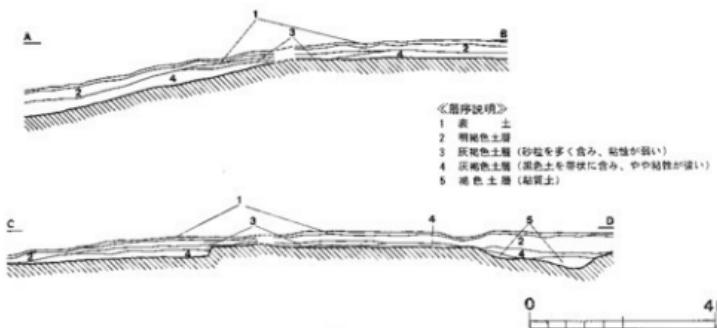
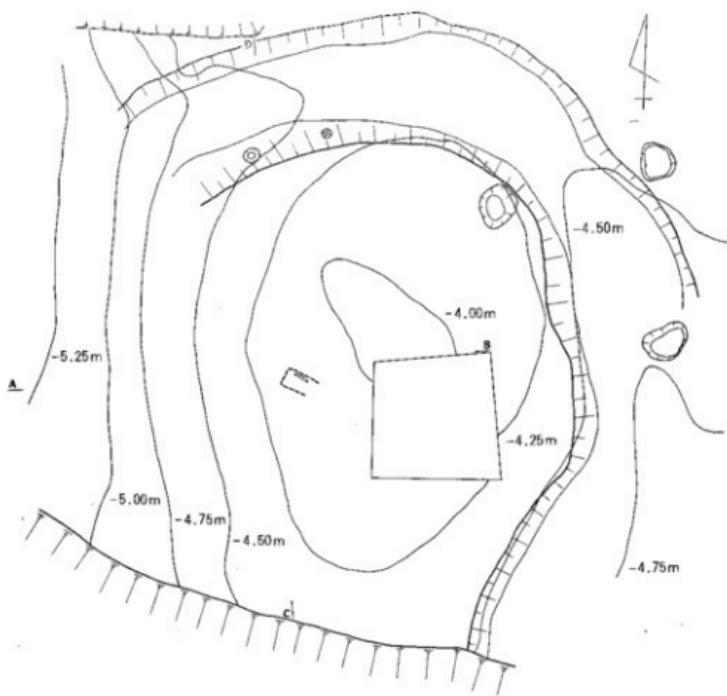
石室は地山に隅丸方形の土壙を掘り、両小口に石を積み重ねた形体をしており。土壙全長は2.25m、北小口幅0.63m、南小口幅0.73m、深さ0.5mを測る。南小口が若干幅広で、掘方側壁は急傾斜をなし、段を有する。主軸方向はほぼ磁北を示す。石室埋土は3層に分かれ、上から黄灰褐色土、黄褐色土、最下層は黄白色砂層が床面直上に薄く堆積している。両小口の積石はほとんど同じ大きさのもので、3~4段に積まれている。床面は平坦である。

石室内からの出土遺物は見られなかった。

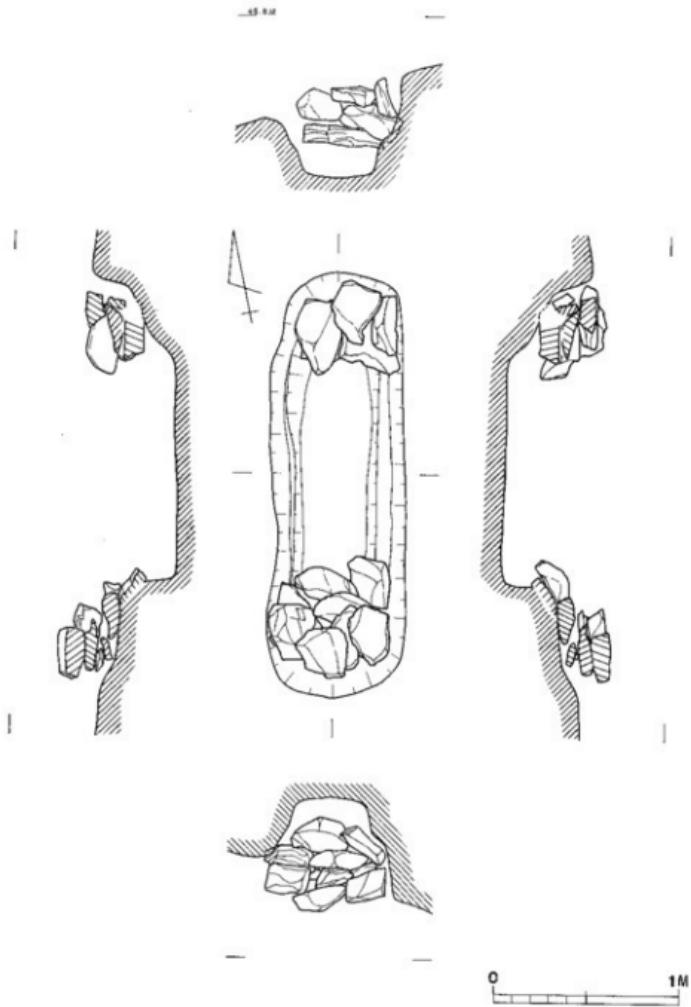
<第2号小石室>（第36図）

1号小石室の上方、高松市茶臼山古墳の前方部より北西、尾根平坦部と斜面との境目に位置する。標高は47mを測り、石室は等高線に沿うように構築されている。

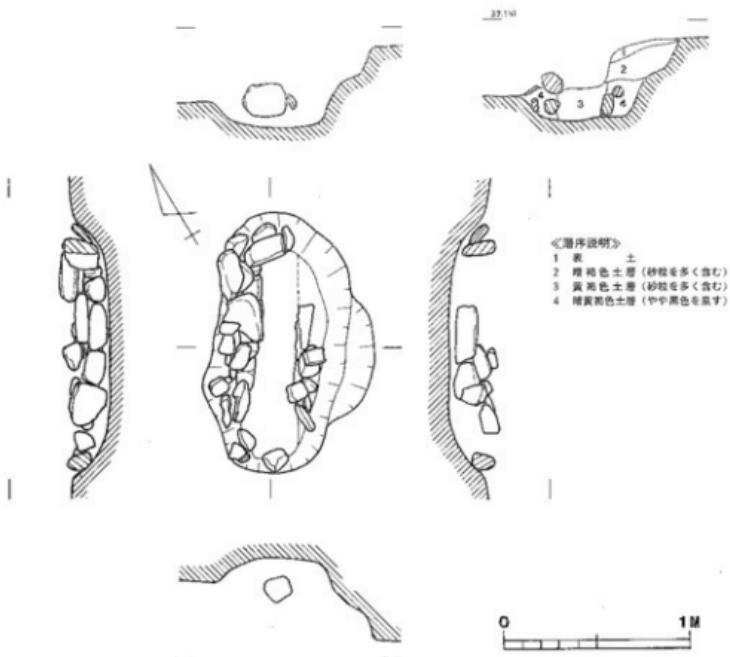
土壙は地山を切り込み、不整形な隅丸方形を呈する。土壙全長1.38m、幅は0.86m、深さは斜面



第34図 茶臼山第8号墳実測図



第35図 第1号小石室実測図



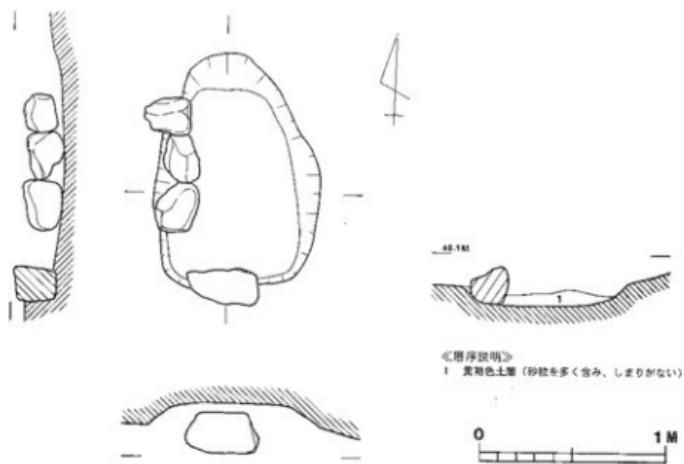
第36図 第2号小石室実測図

の山側で0.45m、谷側で0.15mである。石室はこの土塗内に主軸を北東に向けて構築されており、石室全長1.02m、幅0.2m、高さ0.25mの長方形を呈する。基部の石はやや大きいものを使っているが、上部では小さい石を使用している。天井石は確認されず、石室内の埋土も単一であった。石室内に遺物は確認されていない。

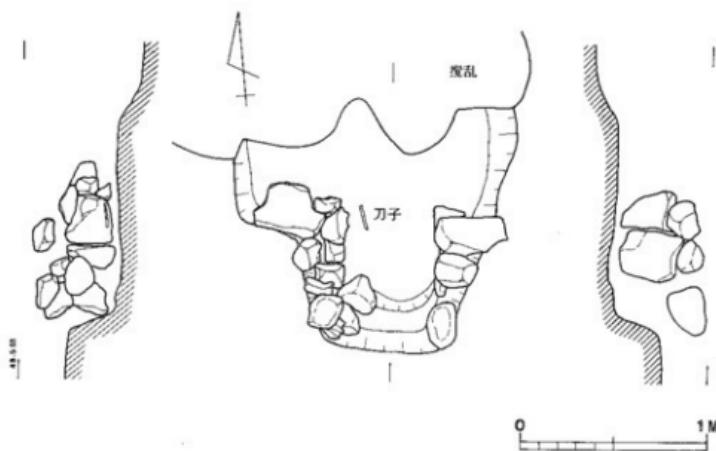
<第3号小石室>（第37図）

4号小石室の西側で、高松市茶臼山古墳の北東にあるわずかな隆起部の平坦面に位置し、標高48mを測る。

地山を切り込んだ土壤は隅丸方形を呈し、全長1.24m、幅0.9m、深さ0.15mを測る。土壤内部の小石室は、現状では南小口に1個、左側壁に3個の石材を検出することができるのみである。左側壁はほぼ一直線に石材が並んでおり、現存高は0.2mである。石室の主軸方向はほぼ磁北である。遺物は確認されていない。



第37図 第3号小石室実測図



第38図 第4号小石室実測図

<第4号小石室> (第38図)

3号小石室と同様の隆起部上で、3号小石室の東隣に位置する。標高は48.5mである。

土壇は地山を掘り込んで作られているが、北端は現代の擾乱坑によって失なわれている。土壇の現存全長1.72m、南小口幅0.75m、北端幅1.47m、深さは0.25mである。石室は西側壁の基底部にやや大きな石を使用し、その上は小さなものを積み上げている。南小口には石材は確認できなかった。床面は平坦であるが、南に若干傾斜する。

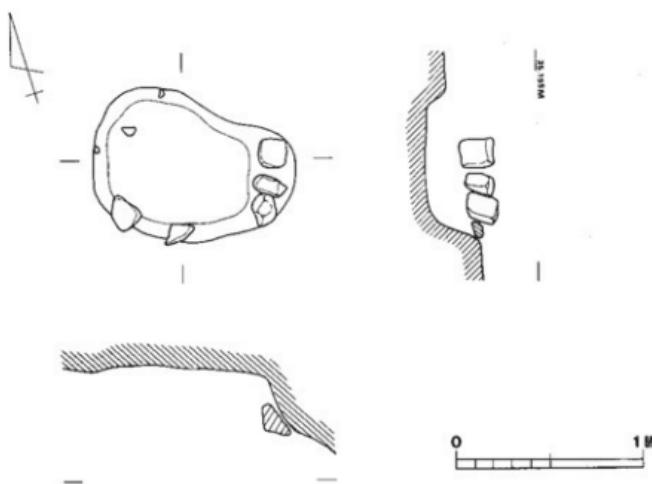
石室内からは刀子(第77図8)が出土しており、北側の擾乱中より平瓶、南東側の地表面より土師器細片が集中して見られた。

<第5号小石室> (第39図)

3号土壇と2号石蓋土壇墓の間に位置し、標高35mを測る。

土壇は不整形の隅丸方形で、斜面に直交するように設けられている。土壇全長1.08m、幅0.8mであり、深さは東小口部で0.3m、西側はほとんど段差が見られない。東小口に3個、南側壁に2個の石が残存している。主軸方向は西北西である。

出土遺物は確認できなかった。



第39図 第5号小石室実測図

<第6号小石室>（第40図）

1号小石室の西方約2mの斜面上に位置し、標高は44.5mを測る。採土の重機によって西半分が破壊されていた。

土壤は地山掘込の隅丸方形で現存長1.4m、幅0.8m、等高線に沿うように配置されている。このため、深さは斜面山側が0.6mと深くなっている。主軸方向は西北西を示している。床面はほぼ平坦である。石積は東小口側のみ小ぶりな石材のものが残存していたが、土壤西側縁部付近に石材抜取跡（採土重機によるものか）と見られる窪みが見られるため、側壁も石材によって構築されていたものと考えられる。石室内からの遺物の出土は確認できなかった。

<第1号無袖横穴式石室>（第41図）

高松市茶臼山古墳の所在する尾根筋より約17m低い位置にあり、等高線に並行するように設けられている。

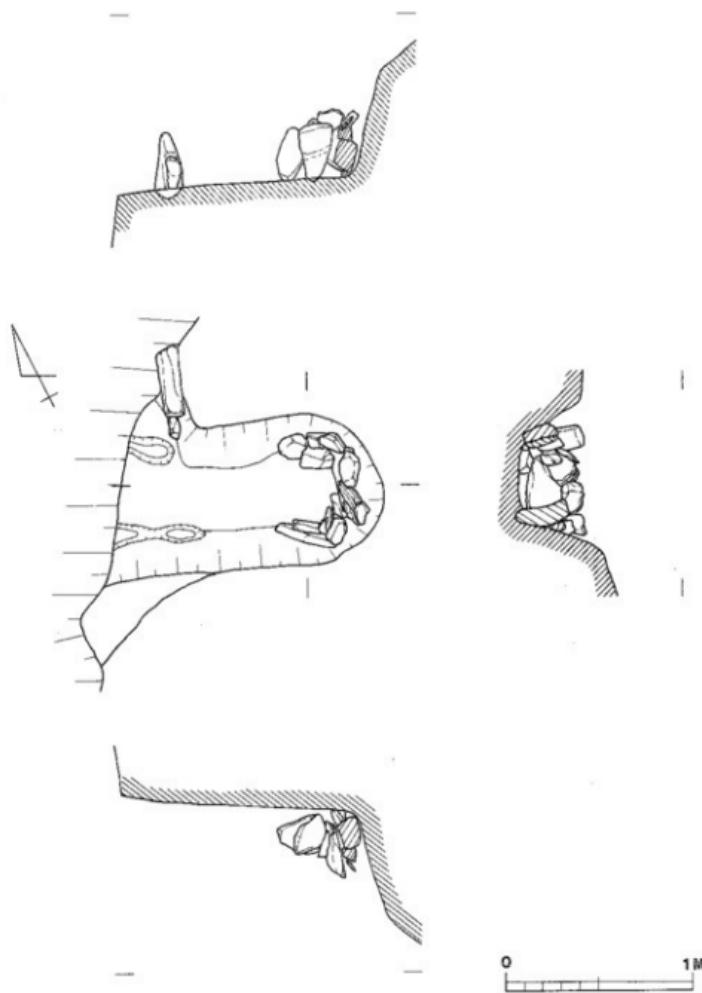
石室は山側、すなわち東側の地山を掘削して構築され、東側壁および羨道部はほとんど原形を保っていない。現存する石室の内法は、全長2.9m、幅0.6m、高さ0.48mを測り、無袖の形体を有する。主軸方向は北々東を示している。石室側壁および奥壁の基底石は長さ40～60cm、幅30～40cm、厚さ20～25cmとほぼ規格が揃ったものが、奥壁には1個、右側壁には3個、左側壁に1個（現存）用いられている。2段目以上は、右側壁のみであるが、やや小形の石による石組が1段分残存している。底面には不整形な長方形の板石が4個置かれており、配置から棺台と推定できる。

石室内の遺物は、石室中央やや北寄りの床面直上より須恵器、杯蓋、短頸壺がそれぞれ1個ずつ出土している。

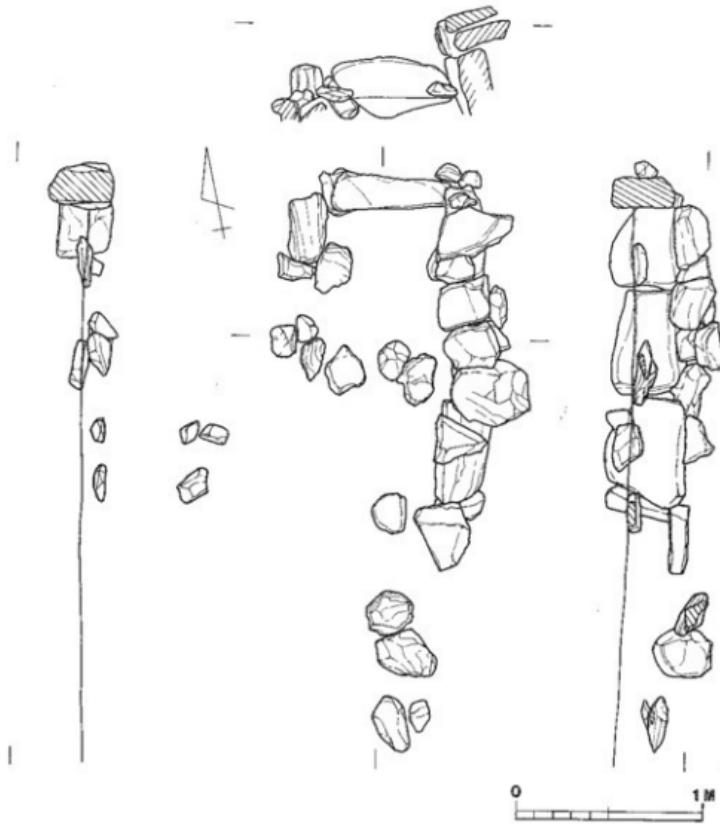
<第2号横穴式石室>（第42図）

6号壺穴式石室と3号土壤の中間に位置し、標高は34mである。

石室は等高線に沿う形で構築されており、内法長さ3m、幅0.8m、高さ0.35mとの遺跡中では最大の規模を有する。主軸方向はほぼ磁北を示している。石室構築の際には地山を掘り込んだものと推定されるが、土壤の十分な調査にまでは及んでいない。基底部に使用する石材は長さ、幅ともに20～30cmのやや大きめのものが、奥壁部に2個、左側壁に9個、左側壁は奥寄り部分が重機によって破壊されているものの、8個が確認できる。右側壁奥寄りの部分は基底部の高さが若干低いため、段の上面をそろえる目的で一段余分な石積みが見られる。開口部は1辺15cm程の石材が置かれているが、配置から閉塞石と推定できる。床面はほぼ平坦で、奥壁寄りに形が揃った板状の石材が5個づつ2列に敷かれている。おそらく棺台を意識したものであろうと考えられる。石室中央部には4石よりなる石列が石室を横断しており、またこの部分で石室の平面プランが若干屈曲していることから、玄室と羨道の区画をなしているものかとも考えられる。前庭部付近は若干の掘り込みが確認されたが、墓道であるかどうかは不明である。



第40図 第6号小石室実測図



第41図 第1号無袖横穴式石室実測図



第42図 第2号無袖横穴式石室実測図

出土遺物は、檜台と見られる石の上部に土師器、杯、須恵器、長頸壺があり、左側壁付近に土師質の内面黒色土器碗が2点、開口部付近には須恵器の杯蓋と短頸壺、杯身が出土している。

<火葬墓>

11号竪穴式住居の南東側約2mにおいて藏骨器が出土した。調査不十分のため詳細な出土状況等は不明であるが、藏骨器付近に径30cm程の不整円形の板石が見られたため、土壙中に藏骨器を埋納した後に板石によって蓋をしたものと考えられる。藏骨器は直立した状態で出土し、蓋の杯蓋は藏骨器内から破片で検出されている。その他人骨等の遺物は見られなかった。

土 坑

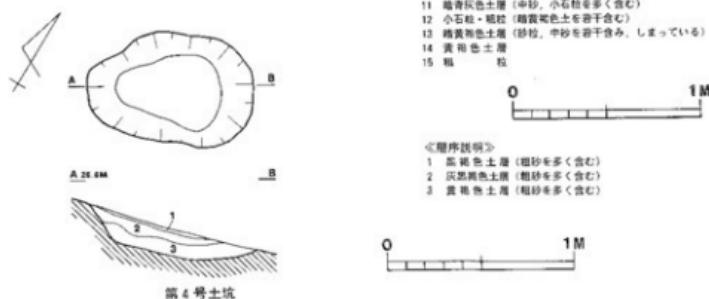
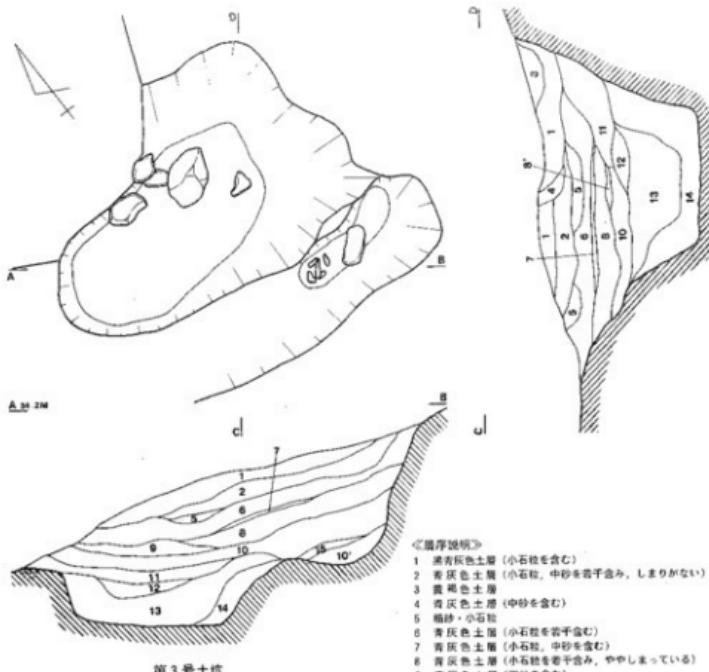
<第3号土坑>（第44図）

2号横穴式石室と5号小石室の間に位置し、標高34mを測る。地山掘込で平面は不整方形を呈するが、斜面谷側の掘方は不明瞭である。現存長は東西2.1m、南北1.8mを測る。東側の掘込はなだらかな傾斜で段を有する。深さは1.05mで底面は隅丸方形を呈し、長径1.26m、短径0.56mである。底面東隅に径10~20cmの塊石5個が検出された。埋土の上層は小石や砂majiriでレンズ状の堆積をなし、流水によるものと見られる。土坑中より若干の土器片とサスカイト片が若干出土している。

<第4号土坑>（第44図）

3号テラス状造構の東側にあり、確認トレンチによって検出された。

平面は隅丸方形を呈し、東西長0.9m、南北長0.6mを測る。深さは斜面山側（西側）で0.2mを測る。埋土中よりサスカイト片数点が出土している。



第43図 第3・4号土坑実測図

第4章 遺 物

1. 土器、土製品

図面及び 遺物番号	造構及び 調査区	出土状況	器種	口径	器高	胎土	備 考
第44図 - 1	第1号 竪穴式住居		壺	28cm	現存 4.3cm		口縁端部に4条の凹線
- 2	"	床面直上	"	17.8cm	現存 3.7cm		口縁端部に3条の凹線 と刻目文
- 3	"	"	"	11.8cm	現存 4.9cm		口縁端部に3条の凹線 外面肩部に2列の列点文
- 4	"	"	高 脚 杯 部	底径 11cm	現存 6 cm		脚縁部に1条の凹線、 外面調整は継方向のヘラ磨きを施し、裾部のみ上から横方向のナデ、 内面は縦及斜方向の刷毛目
- 5	"	ピット内	"	底径 9 cm	現存 3.5cm		脚縁部に2条の凹線、 外面は横方向のナデで、 裾部に1列の列点文、 内面は横及斜方向の刷毛目脚端部付近で大きく外反する
- 6	"	床面直上	高 杯 部	22cm	現存 3.9cm		口縁端部に1条の凹線 口縁部外面に3条の凹線
- 7	"	住居埋土内	"	脚径 3 cm	現存 5.5cm		外面に継方向のヘラ磨き
- 8	"		壺 蓋				ミニチュア土製品、表面中央部にツマミ状の凸基と、対角線上に2つずつ1対の施孔を有する
- 9	"		紡錘車				土器片転用、楕円形で中央部に両面より旋孔の一穴をもつ
第45図 - 1	第2号 竪穴式住居	住居埋土内	壺	18cm	現存 11.7cm		頸部内面に継方向のヘラ磨き
- 2	"	"	"	13.8cm	現存 5.1cm		頸部内面に継方向のヘラ磨き
- 3	"	"	"	底径 3.8cm	現存 8.4cm		胴部下半は刷毛目

図面及び 遺物番号	遺構及び 調査区	出土状況	器種	口径	器高	胎土	備考
第45図 - 4	第2号 竪穴式住居		鉢	10.2cm	7.2cm		外面は縦方向のヘラ磨き。 内面横方向のヘラ削り 口縁部に1条横方向の 強いナデ。
- 5	"	住居埋土中	彌底部	底径 5 cm	現存 1.9cm		外面裾部横ナデの後ヘ ラ磨き。
- 6	"		"	底径 3.6cm	現存 5.4cm		器面の剥離著しい。
- 7	"	住居埋土中	"	底径 12cm	現存 24cm		外面肩部は横方向、胴 部以下は縦方向のヘラ 磨き。内面は刷毛目。
- 8	"		土 磬				管状土鍊、長さに比し て径が長い。
- 9	"		紡錘車				土器片転用、表面が凸 状に若干彎曲する。中央部に両面より施孔の一穴を有する。
第46図 - 1	第3号 竪穴式住居	住居埋土中	壺	9.8cm	推定 23.3cm		口縁端部に3条の凹線、 口唇部はつまみ上げる。 頸部外面及び胴部から 底部にかけての内、外 面にヘラ磨き。
- 2	"		"	胴 部 最大径 20cm	現存 14cm		胴部最大径部より上半 は斜方向の刷毛目、肩 部のみ横方向に帯状に 刷毛目を施す。下半は 横方向のヘラ磨き。最 大径部に横2列の刻目 文、裏面は下半に縦方 向の刷毛、上半は横方 向のナデ。
- 3	"		"	16cm	現存 6 cm		口縁端部に3条の凹線、 口唇部はつまみ上げる。 頸部に縦方向のヘラ磨 き、下半にヘラ原体に による押圧文。
- 4	"		高 杯	19.8cm	現存 7 cm		口縁端部に1条、口縁 部外面に2条の凹線。 外面ともにヘラ磨きを 施す。
- 5	"		甕	15cm	現存 17cm		口縁端部は摩耗がはげ しいが、1条の凹線か、 表面は縦方向のヘラ削 りの後ナデ調整。内面 は摩耗が激しい。

図面及び 遺物番号	遺構及び 調査区	出土状況	器種	口径	器高	胎土	備考
第46図 - 3	第4号 堅穴式住居		壺	11.6cm	現存 5 cm		口縁端部は丸くおさめるが、2本の凹線を施す。外面は横ナデと縦方向のヘラ磨きが交錯するが、磨滅により不明瞭。内面は横方向のヘラ磨き
- 7	"		壺	19.2cm	現存 5 cm		口縁端部は上方につまみ上げ、2本の凹線を施す。外面は頸部上端に横ナデの部分が帶状に残り、以下は縦方向のヘラ磨きを施す
- 8	"		高杯	底径 7.7cm	現存 2.5cm		脚端部に2本の凹線をもち、外面据部付近に1条の鋸歯文帯がめぐる
- 9	"		"	底径 7.8cm	現存 1.8cm		脚端部に2本の凹線をもち、外面据部付近に2本のヘラ描き沈線が巡る
- 10	"		"	34cm	現存 4 cm		口縁端部は肥厚し、2本の凹線を施す。口縁部外面に3本の沈線。杯部内面は横方向のヘラ磨きの後にナデ
第47図 - 1	第5号 堅穴式住居		甕	14cm	現存 11.8cm		口縁端部は上方につまみ上げる。外面は器壁の剥落が激しく調整は不明。内面は口縁付近は横方向、以下は縦方向のナデか
- 2	"		"	19cm	現存 7 cm		口縁端部は上方につまみあげ、2本の凹線を施す。外面は一部継刷毛のあとにナデ。頸部に刻目文を1条巡らせる。内面はナデ
- 3	"		"	26cm	現存 7.1cm		口縁端部を上方につまみ上げ、3本の凹線を施す。外面は縦方向のヘラ磨き。内面は縦方向の刷毛のあとに横ナデ

図面及び 遺物番号	遺構及び 調査区	出土状況	器種	口径	器高	胎上	備考
第47図 - 4	第5号 竪穴式住居		高杯	底径 11cm	現存 2.9cm		脚端部に3本の凹線、 脚底部に刺突による透孔2つが残る。表面は横ナデ。裏面は横方向 のヘラ削り
- 5	"		"	脚径 3 cm	現存 5.7cm		表面は縦方向のヘラ磨き、対角方向に1対の 刺突による透孔を有する
第48図 - 1	第6号 竪穴式住居		壺	12.6cm	20.6cm		器高よりも胴部最大径 が長く野菜のカブラ形を呈する。 口縁部は短い頸部から 略水平近くまで外反する。表面は磨滅が激しいが、肩部上端には2 本の波状文が巡り、胴部下半には横方向のヘラ磨きが見られる
- 2	"		"	13cm	29cm		橢円形の体部から刷毛状に開く口縁部を有する。 外面は肩部に斜方向の 刷毛目が散在する以外 はナデによる調整、内面は頭部付近は横方向の ヘラ磨き、胴部は縦刷毛が一部残る。
- 3	"		"	9 cm	推定 16.8cm		短頸壺で頸部は卵形の 胴体からやや内傾気味 に略垂直に立ち上がる。 頸部外面に波状文を施す
- 4	"		"	12.7cm	20.4cm		球形の体部と外反気味 の短い口縁部を有する。 外面はヘラ磨き、内面 は斜方向のヘラ削りのみで荒い調整である
- 5	"		"	12.8cm	28.4cm		卵形の体部と外反気味 の短い口縁部を有する。 体部外面は斜及び縦方 向のヘラ磨き、内面は ヘラ削りを施す。肩部 に焼成後施した透孔1 つがある

図面及び 遺物番号	遺構及び 調査区	出土状況	器種	口径	器高	胎土	備考
第49図 - 1	第6号 堅穴式住居		土 製 瓶 円				土器片転用、周辺部を丁寧に打ち欠き、表面にはヘラ磨き、裏面には刷毛が残る。 中央部に裏面より旋孔を施すが貫通しない。
- 2	第7号 堅穴式住居		壺	11cm	現存 4.5cm		直立する頸部から強く外反する短い口縁部を有する。 口縁端部は上方にわずかに肥厚する。頸部外面は縦方向のヘラ磨き、内面は器壁の磨滅が激しい。
- 3	"		高 杯		現存 6.4cm		杯部中央から脚部上半にかけての破片。杯部及び脚部の外面はヘラ磨きを施す。
- 4	第8号 堅穴式住居		壺	胴部最 大径 22.2cm	現存 16.2cm		球形の体部を有する。外面は纏刷毛。内面は荒いヘラ削りと指頭圧が見られる。
- 5	"		"	底径 4.2cm	現存 18.8cm		球形の体部を有する。外面は磨滅がはげしく調整は不明。内面は荒いヘラ削りを施す。
- 6	第9号 堅穴式住居		高 杯	底径 12cm	現存 3.2cm		脚端部に1本の凹線。外面は横ナデ。裏面は、横方向のヘラ削りを施す。
第50図 - 1	第10号 堅穴式住居	住居埋土中	壺	12cm	現存 5cm		口縁端部に1条の凹線、頸部に2条の刻み目を有す。
- 2	"	床面直上	"	11.4cm	現存 3cm		口縁部は強く外反し、ほぼ水平になり、端部に1条の刻目文を有す。
- 3	"	住居埋土中	壺	22.2cm	現存 5.7cm		口縁端部に2条の凹線。胴部外面はヘラ削り。
- 4	第11号 堅穴式住居		壺	底径 5.2cm	12.9cm		外面は肩部縦刷毛。最大径部は横。下半は縦方向のヘラ磨き。

面及び 遺物番号	遺構及び 調査区	出土状況	器種	口径	高さ	胎土	備考
第50回 - 5	第11号 竪穴式住居		高杯	底径 10cm	4 cm		脚部裾に列点文、鋸齒 文を施す。 沈線文 8 条以上。
- 6	"		"	底径 10cm	4.2cm		脚裾部に竹管文。
- 7	"		"	脚径 5.2cm	8.8cm		外面は磨滅により調整 不明。裾部に 3 条以上の沈線。 内面は絞り痕が残る。
- 8	"		紡錘車	径 5.5cm			土器片転用。表面はヘ ラ磨き。裏面はヘラ削 り。中央部に両面から の旋孔あり。
- 9	"		"	径 4.3cm			土器片転用。表裏面と もヘラ磨き。中央部に 両面旋孔の穴あり。
- 10	"		"	径 4.3cm			土器片転用。表面はヘ ラ磨き。 中央部に両面旋孔の一 穴をもつ。
- 11	"		土製 円盤	径 4.7 × 4 cm			土器片転用。表面ヘラ 磨き。 中央部に表面より旋孔 を施すが、貫通しない。
- 12	"		"	径 5.3 × 3.8cm			土器片転用。不整筋円 形を呈する。表面はヘ ラ磨き。中央部に表裏 両面から旋孔の跡があ るが、位置がずれてお り、いずれも貫通しな い。
- 13	"		"	径 4.5cm			土器片転用。裏面はヘ ラ磨き。 中央部に表面より旋孔 を施すが貫通しない。
- 14	"		"	径 5 × 4.5cm			土器片転用。表面はヘ ラ磨き。旋孔の跡跡な し。
- 15	"		分銅形 土製品	幅 3 cm	厚さ 1.3cm		表裏面ともナデによる 調整。施文は見られな い。

図面及び 遺物番号	遺構及び 調査区	出土状況	器種	口径	器高	胎土	備考
第51図 - 1	第2号 テラス状 遺構		壺	36cm	現存 18.5cm		大型の広口壺の上半部。口縁端部は上下に肥厚し、3本の凹線の上から2個1組の円形浮文と棒状浮文が交互に等間隔に並ぶ。口縁部外面は綴刷毛。頸部外面は10本の凹線が巡り、上より8本目までの凹線間に綴刷毛を施し、8本目以下は頸部下端まで押圧文を重複する。肩部以下は綴刷毛、内面は口縁部に2段の波状文帯を施す。
- 2	"	包含層	"	19cm	現存 20cm		口縁端部は2条の凹線を施し、頸部外面上半は綴刷毛、下半は押圧文を施す。肩部以下は綫方向のヘラ磨き、内面は綴刷毛後にナデか。
- 3	"	テラス ピット内	"	26cm	現存 14cm		広口壺の上半部、口縁端部は4条の凹線を施す。頸部外面は10本の凹線、口縁部内面には半円連弧文。
- 4	"		"	10cm	現存 8.7cm		全体的に磨耗が激しいが、口縁端部は3本の凹線、頸部下半は刻目文で、焼成後と思われる刺突状の旋孔が2つ見られる。口縁部内面は列点文と円形浮文が巡る。
- 5	"		"	9cm	現存 7.8cm		直口壺上半部片、頸部上端近くに2本の凹線、下端に1本の凹線を施す。肩部内面は綴刷毛。内外両面にススが付着。
- 6	"	包含層	"	12.6cm	現存 9cm		直口壺頸部片、口縁端部はやや肥厚し1本の凹線と円形浮文を施す。頸部外面は9本の凹線とその直下に刻目文が巡る。内面は横方向のヘラ削り。

図面及び 遺物番号	遺構及び 調査区	出土状況	器種	口径	器高	胎土	備考
第51図 - 7	第2号 テラス状 遺構		壺	胴部 最大径 24cm	現存 14.8cm		外面肩部は縦方向、胴部上半は横方向のヘラ磨きを施す。 内面は横方向のヘラ削り。
第52図 - 1	"		"	30cm	現存 9.7cm		口縁端部は上方につまみ上げ、2本の凹線を施す。 肩部外面は縦、内面は横方向の刷毛目。
- 2	"		"	底径 9 cm	現存 33.6cm		肩部から底部にかけての破片。外面は肩部は縦刷毛で3条のヘラ原体による押圧紋が巡る。 胴部中位は横方向、下位は縦方向のヘラ磨き。 内面は胴部中位迄は縦刷毛、下位はヘラ削りを施す。
- 3	"		"	底径 8 cm	現存 26.8cm		頸部以上を欠損。外面肩部は縦刷毛で2条の刻目文を施す。胴部最大径部付近は横方向、以下は縦方向のヘラ磨き。 内面は胴部以下に縦方向のヘラ削りが見られる。
- 4	"	包含層	"	底径 5.6cm	現存 12.5cm		胴部から底部にかけての破片。内外面ともに縦刷毛を施し、内面胴部下位には、指頭圧痕が見られる。外面にスス付着。
- 5	"		甕	底径 8.8cm	現存 9 cm		底部付近の破片。器壁の剥落が激しいが、外面は縦刷毛、内面はヘラ削りが見られる。
第53図 - 1	"		壺	13cm	現存 9 cm		口縁端部は下方に肥厚し、3本の凹線を施す。 肩部外面は横又は縦のヘラ磨き、内面は縦刷毛後にナデか。
- 2	"	包含層	"	15.4cm	現存 9.8cm		口縁端部は上下方に肥厚し、3本の凹線を施す。 外面調査は、頸部は縦刷毛、肩部上半も縦刷毛で一部は斜格子状に重なる。

図面及び 遺物番号	遺構及び 調査区	出土状況	器種	口径	器高	胎土	備考
第53図 - 3	第2号 テラス状 構造	包含層	甕	18cm	現存 15.5cm		口縁端部は、上方につまみ上げる。外面調整は、肩部は縦方向の刷毛、腹部以下は、縦方向のヘラ磨きを施す。内面は器壁の剥離がはげしく未詳。
- 4	"		"	15.4cm	現存 9.8cm		口縁端部は2本の凹線を施す。外面は縦方向のヘラ磨き。肩部に1条の刻目文帯。内面は斜方向の刷毛が散在する。
- 5	"	包含層中	高杯	28cm	16.8cm		口縁端部は肥厚し、1条の凹線を施す。口縁端部外面には5条の凹線。内面は横ナデ。杯部外面は横方向のヘラ磨き。内面は横ナデ。杯部外面は横方向のヘラ磨き、内面のヘラ磨き。腹部は表面の磨滅がはげしいが、上半に2本1組の沈線が2組巡り、下半にはヘラ状工具による透し状の刻目を施す。
- 6	"	包含層中	"	口径 14.8cm 脚径 11.3cm	15.3cm		碗状の深い杯部に若干内湾し、立ち上がりの高い口縁部をもつ。器壁の磨滅が激しいが、口縁外面は7条の凹線を施す。脚部は短く若干ふくらみをもち、3方に刺突による透孔をもつ。
- 7	"		"	24cm	現存 7.5cm		直線上に開く杯部と直立する口縁部を有する。口縁部外面は2本の凹線が巡り、内面は横ナデ。杯部は内外面とも縦方向に放射状のヘラ磨きを施す。
- 8	"		"	底径 8.4cm	現存 9.4cm		全体的に表面の剥離がはげしい。杯部外面は縦方向のヘラ磨き、脚部外面は横方向のナデか。脚部裾に1条の列点文が巡る。脚部内面はヘラ削り、脚端部は肥厚し、2本の粗線が巡る。

図面及び 遺物番号	遺構及び 調査区	出土状況	器種	口径	器高	胎土	備考
第E3図 - 9	第2号 チラス状 構造		高杯	底径 12cm	現存 14.4cm		杯部は中央部のみ残るが、器面はヘラ磨きを施す。脚部は基部はナデのうえ、6条の沈線、下半は縦方向のヘラ磨きを施す。四方にヘラ状工具による鳥足様の文様を施し、底部は刺突による円形の透孔を2重に巡らせる。脚端部は3条の回線。
- 10	"	包含層	"	底径 8 cm	現存 4.8cm		脚端部は肥厚し、丸くおさめる。1条の凹線を施す。外面は横ナデ。内面は横方向のヘラ削り。
第54図 - 1	第3号 チラス状 構造	埋土中	壺	11.6cm	推定 28.7cm		口縁端部に2本の凹線。外面は肩部以下に縦方向のヘラ磨き。内面は縦方向のヘラ削り。
- 2	"	底面直上	"	胸部 最大径 30cm	現存 28.4cm		内外面ともに器壁の磨滅がはげしい。外面肩部に2条の刻目文。下半は縦方向のヘラ磨き。内面は上半は指頭圧、下半はヘラ削りが見られる。
- 3	"	埋土中	壺	28cm	現存 10cm		口縁端部は上下方につまみ出し、3条の凹線を施す。体部外面は縦刷毛、内面は横方向の削りか。
- 4	"	底面直上	"	16.6cm	現存 29cm		底部付近を欠損。口縁端部は2本の凹線。外面は体部上半はヘラ削り。下部は縦方向のヘラ磨き。胸部最大径部に1条の刻目文。内面は下半にヘラ削り。
- 5	"	底面直上	"	16.6cm	現存 16.8cm		口縁端部に2条の凹線。外面は磨滅が激しいが胸部最大径部に1条のヘラ原体による押圧文。胸部下半は縦方向のヘラ磨き。内面は縦方向の一部削毛目。
第55図 - 1	第2号 石蓋土壙墓	埋土中	壺	14cm	現存 7.5cm		口縁部は、強く外反する。口縁部横ナデ。胸部外面はヘラ削り。

前面及び 遺物番号	遺構及び 調査区	出土状況	器種	口径	器高	胎七	備考
第55回 - 2	第2号 石蓄土壇墓	埋土中	甕	底径 8 cm	現存 2 cm		
- 3	第1号無袖 横穴式石室		杯 蓋	13.9cm	4 cm		口縁端部は丸くおさめる。体部外面は上半は回転ヘラ削りで頂部は平坦に近い。下半は回転ナデの段が明瞭に残る。
- 4	"		短頸甕	7 cm	6 cm		半円球の体部に平坦な肩部から、やや内傾しつつ短く立ち上がる頸部を有する。体部上半はナデ、肩部の腰線上に1条の凹線。体部下半は回転ヘラ削り。
- 5	第2号無袖 横穴式石室		杯 蓋	17.6cm	2.7cm		器面は淡黄灰色を呈し、焼成はあまり良くない。径1 mm程の石英粒を多く含む。口縁部の立ち上がりは浅く端部は丸くおさめる。外面とも回転ヘラ削りの後ナデか。
- 6	"		"	9 cm	3.1cm		口縁端部は丸くおさめる。体部外面は明瞭な稜をもたず、底部から浅いボール状に立ち上がる。底部付近は回転ヘラ削り。口径部付近はナデ。No10の短頸甕とセット。
- 7	"		杯 身	13cm	35cm		体部は平底から直線的に立ち上がる。口縁部は丸くおさめる。体部外面はナデ。底面は回転ヘラ削りの後ナデ調整か。
- 8	"		椀	13cm	4.2cm		内面黒色土器。内面はヘラ磨き。外面はナデ。貼付高台。
- 9	"		"	15.2cm	4.4cm		内面黒色土器。内面はヘラ磨き。外面はナデ。貼付高台。高台の貼付部分が剥落。

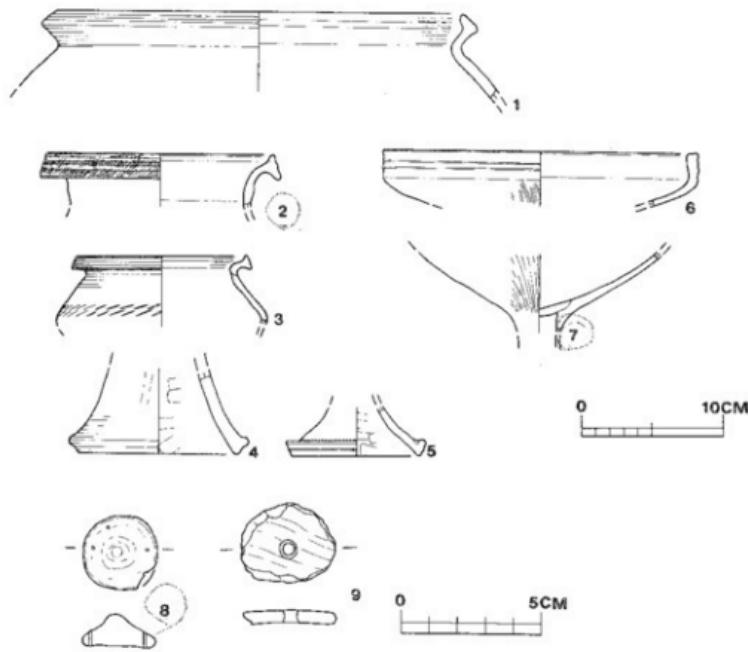
図面及び 遺物番号	遺構及び 調査区	出土状況	器種	口径	器高	胎上	備考
第55図 -10	第2号無袖 横穴式石室		短頭壺	6.2cm	8.3cm		口縁部は丸くおさめ、 頭部と肩部の境に浅い 1条の沈線を有する。 体部上半及び内面はナ デ。外底部付近は回転ヘ ラ削り。
-11	"	床 面	長頸壺	9 cm	23.3cm		口縁は喇叭状に外反し、 端部は丸くおさめる。 頸部中央部に2本の沈 線。同裾部にも1条が 巡る。 肩部と頭部の境に凸帶 を有する。肩部の稜は 明瞭で高台は強く外方 へ踏ん張る。
-12	茶臼山 第8号墳	周 濶 内	杯 蓋	10.2cm	3.5cm		口縁部は丸くおさめる。 上部は回転ヘラ切りの 後ナデ。
第56図 -1	第1号土坑		高 杯	底径 13.8cm	現存 5.3cm		脚端部に2本の凹線。 脚部表面には8条のヘ ラ描による沈線が巡る。
-2	"		甕	13.6cm	現存 7.2cm		口縁端部はつまみ上げ、 2本の凹線。肩部外面 は縦方向のヘラ削り。 肩部に1条のヘラ原体 による押圧文。
-3	"	埋 土 中	"	底径 4.8cm	現存 3.6cm		底部片、表面は縦刷毛。 底面はわざかに窪む。
-4	"	"	"	底径 5 cm			底部片、表面は縦方向 のヘラ磨き。
-5	"		甕	10.7cm	21.8cm		土器外面は縦方向のヘ ラ磨き。内面はヘラ削 り。腰部の四方の底部 に径2~3cmの透孔を もつ。
-6	第2号土坑		高 杯	脚径 4.6cm	現存 5.9cm		杯部外面は縦方向のヘ ラ磨き。脚部は縦刷毛 か。
-7	"		壺	13.6cm	現存 5.6cm		肩部外面は縦方向の、 内面は横方向のヘラ磨 き。
-8	"		"	16cm	現存 9.7cm		口縁部は強く外反し、 端部が下方に若干肥大 し、2条の凹線、肩部 は円形を呈し、刷毛目。

箇面及び 遺物番号	遺構及び 調査区	出土状況	器種	口径	器高	胎土	備考
第56図 - 9	第2号土坑		壺	底径 5.2cm	現存 3.5cm		
- 10	第4号堅穴式住居南側土坑		"				壺肩部片、頸部下端に2本の凸帯。外面の調整は不明だが、肩部に家屋の屋根部分の絵画を有する。 内面は縦刷毛後に横刷毛。
- 11	"						絵画土器片、外面は縦刷毛後ナデか、土器片下端に刻目。内面は縦刷毛。
第57図 - 1	"		甕				1条の刻目文を有す。 外面はこまかいヘラ削り。内面上半は幅の太い刷毛目、下半はヘラ削り。
- 2	"		"	29.2cm	現存 29.3cm		口縁部は強く外反し、端部に2条の凹線、胴部上半はヘラ削り、下半はヘラ削り後ナデ。
第58図 - 1	ピット群		壺	17.6cm	現存 9.5cm		口縁端部は上下に肥大し、2条の凹線。胴部は磨耗が激しく、整形は不明瞭。
- 2	"		高杯	35.8cm	現存 6.5cm		口縁端部は肥大し、平坦であり2条の凹線。口縁部に2条の凹線。体部外面はヘラ磨き。
- 3	"		壺		現存 6cm		口縁端部はナデ、胴部は横刷毛後に縦方向のヘラ削り、内面はヘラ削り、2条の刻目文。
- 4	"		"		現存 5.7cm		壺肩部片、外面は縦刷毛。
- 5	第3号墳墓 南側土坑		"	13.6cm	現存 15.3cm		口縁端部はナデ。外面肩部は縦、胴部は横方向のヘラ磨き。 肩部には逆方向2段のヘラ原体による押圧文。内面は横方向のヘラ削り。
- 6	"		高杯	脚径 2.6cm	現存 4.2cm		高杯脚部片。外面に8本のヘラ描状の沈線が巡る。

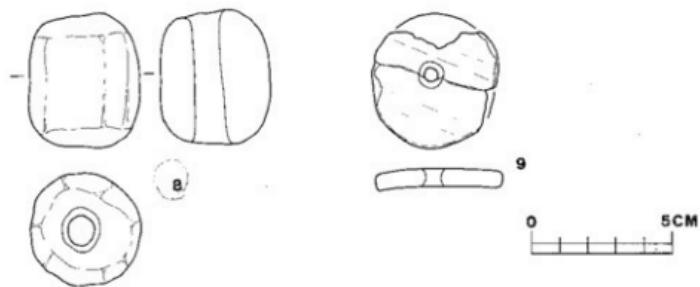
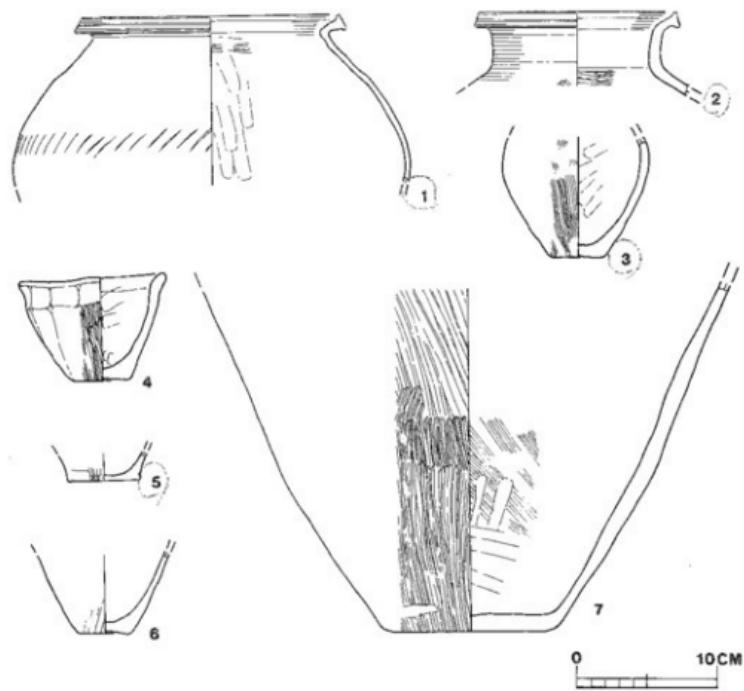
図面及び 遺物番号	遺構及び 調査区	出土状況	器種	口径	器高	胎土	備 考
第58図 - 7	第3号上塙 墓南側土坑		高 杯	底径 10cm	現存 3.3cm		高杯脚部片。外面に8 本のヘラ描状の沈線が 巡る。
- 8	ピット群		土 製 円 盤				土器片転用。表面はヘ ラ磨き。裏面は刷毛目 が残る。
- 9	"		不 明 土製品				黒褐色で側面は面取り を施している。底部上 旋孔があるが、貫通し ない。
第59図 - 1	第9号 竪穴式住居		壺	12.4cm	現存 4.9cm		口縁端部は拡張し、内 外面に波状文を施す。 頸部外面はヘラ磨き。 下半に波状文を施す。
- 2	"		"				短頸壺。口縁端部に1 条の凹線。頸部は4本の 沈線を2本1組にして 巡らせる。体部外面 は縱方向のヘラ磨き。
- 3	遺 構 外		"	18cm	現存 9.6cm		口縁端部は上下に拡張 し、3条の凹線文、頸 部はヘラ原体による押 圧文。内面に指頭圧痕。
- 4	"		"	12cm	現存 18cm		口縁端部はナデ。外面 は下半は縱方向のヘラ 磨き、最大径部に2条 の刻目文。内面は横方 向のヘラ削りと指頭圧 痕。
- 5	"		"	22cm	現存 12.5cm		口縁端部は上下に拡張 し、3条の凹線文。頸 部外面はこまかいヘラ 削り。ヘラ原体による 押圧文。
- 6	"		甕	底径 7.6cm	現存 9.7cm		底部から急傾斜で立ち 上がり、内外面ヘラ削 り。
- 7	C-2-7 (トレンチ)		高 杯		7.4cm		杯底部はヘラ磨きが 残る。外面には指頭圧 痕。脚部は短く脚端の 開きも小さい。全体に 厚手。

図面及び 遺物番号	遺構及び 調査区	出土状況	器種	口径	高さ	胎土	備考
第59図 - 8	5-2-0 (トレンチ)		高杯	底径 10.6cm	現存 6.3cm		脚端部は上方に拡張し、 2条の凹線を有す。
- 9	遺構外		ミニチュア土器				外面はヘラ磨きで、鐘状の形体を有すると思われる。製塙土器のミニチュアか。
- 10	"		紡錘車	径 5.6× 5.4cm			土器片転用、隅丸の亀甲状六角形を呈する。 表面はヘラ磨き、中央部に両面よりの旋孔を施す。
- 11	"		不明 土製品				円筒状の粘土の一端を指先でつまみ出した形体を有する。表断面ともに黒褐色。
第60図 - 1	トレンチ		高杯		現存 9.6cm		外面はヘラ削りの後にナデ。杯部内面はこまかいヘラ削り。脚部内面は横方向のヘラ削り。
- 2	"		"		現存 8cm		杯部はヘラ削り。脚部 外面はナデ、内面ヘラ 削り。
- 3	"		"	50cm	現存 11.3cm		口縁端部は拡張し、6 条単位の波状文と直線文を有す。 口縁部外面に明瞭な2 本の凹線。内面ヘラ削り。
- 4	第1号 無袖横穴式 石室付近		壺	9.8cm	9.4cm		口縁部はやや内傾し、 端部は丸くおさめる。 体部外面は、上半は縦刷毛、腰から底部にかけては横方向のヘラ磨き。 内面は頸部のみ横刷毛。
- 5	第4号 小石室付近		平瓶	胴部 最大径 13.6cm	現存 9cm		肩部に若干の稜を有するが、球形に近い体部を有する。 体部外面は横方向のヘラ削り後、 ナデか。 体部上半部に自然灰釉。 内面は横ナデ、底部に自然灰釉。

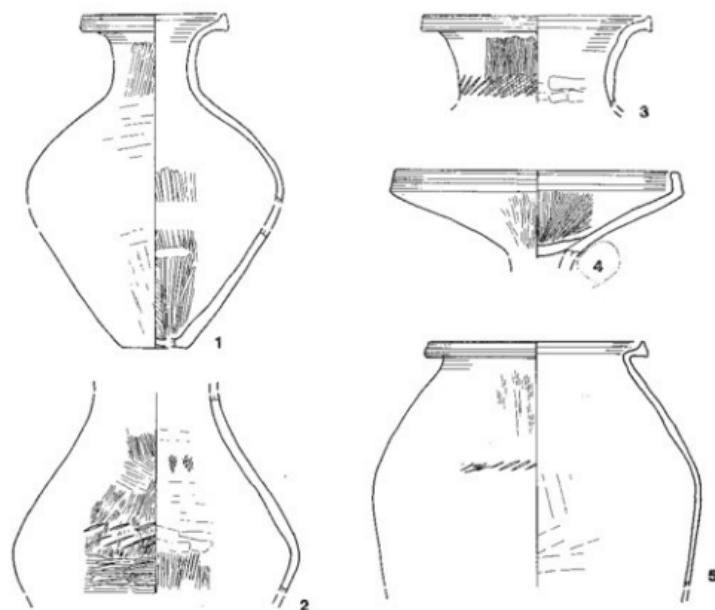
図面及び 遺物番号	遺構及び 調査区	出土状況	器種	口径	器高	胎土	備考
第60図 - 6	第11号 壁穴式住居 付近		杯	13.2cm	3.5cm		淡黃灰色を呈し、焼成 はあまり良くない。口 縁部は丸くおさめ、体 部は底面から直線的に 立ち上がる。内外面と も横ナデ。底部は逆時 計回りのヘラ切り跡。 No.7の壺の蓋に転用。
- 7	"		壺	底径 9.6cm	現存 14.8cm		口縁部を人為的に欠損 し、藏骨器に転用。体 部外面は横方向のヘラ 削り。高台は断面長方 形で強く外へ踏ん張る。 殆ど 跡に近い形の耳 が1ヶ所に残る。体部 の一部に灰釉。



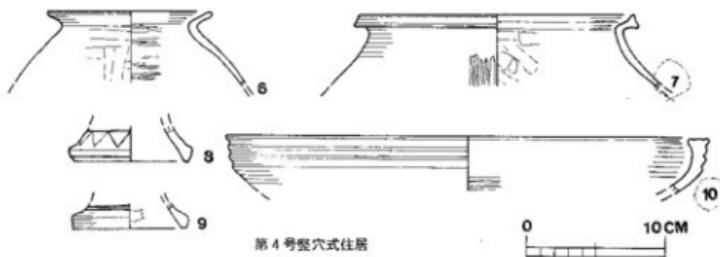
第44図 第1号窯穴式住居出土遺物実測図



第45図 第2号整穴式住居出土遺物実測図

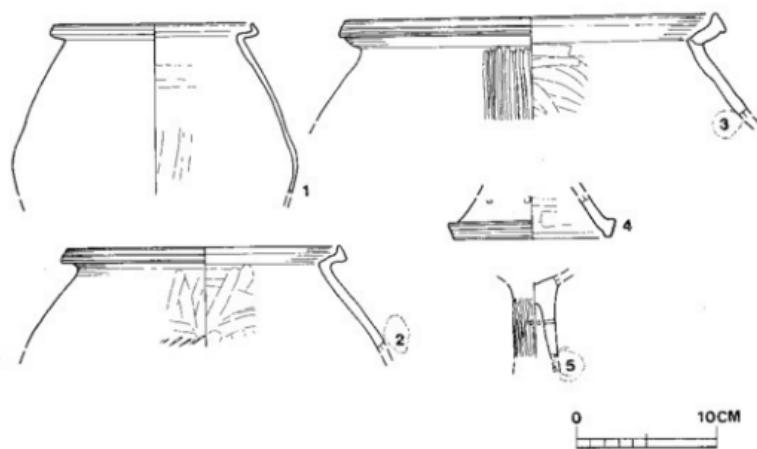


第3号竖穴式住居

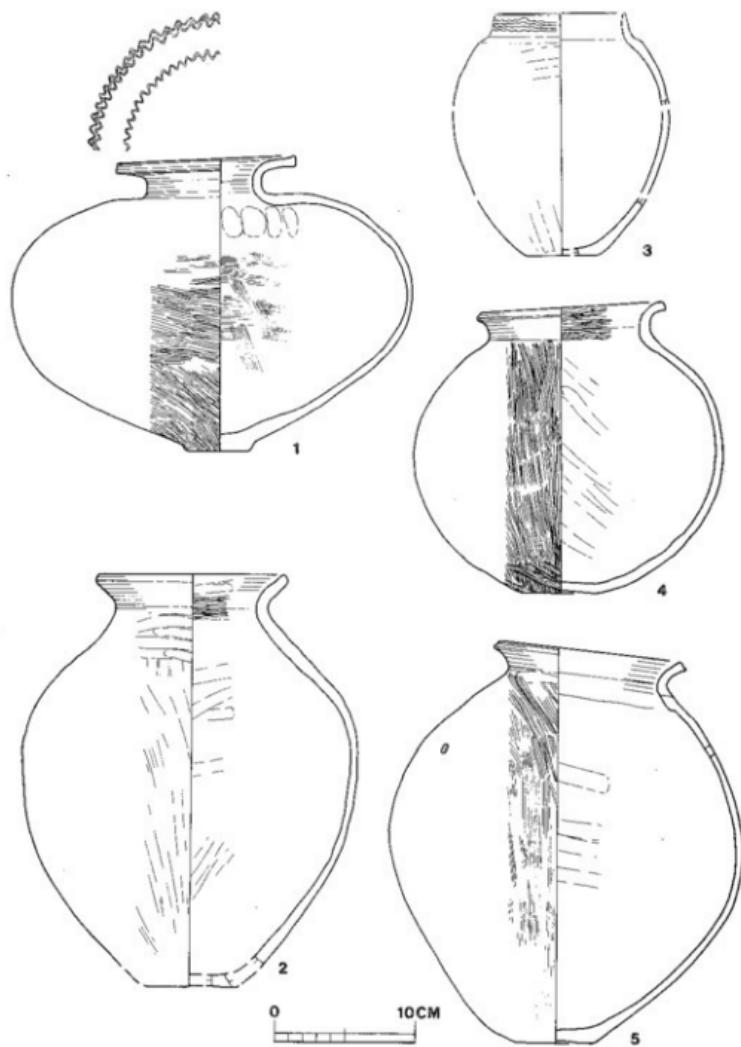


第4号竖穴式住居

第46図 第3・4号竖穴式住居出土遺物実測図



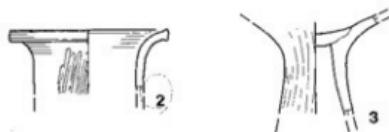
第47図 第5号整穴式住居出土遺物実測図



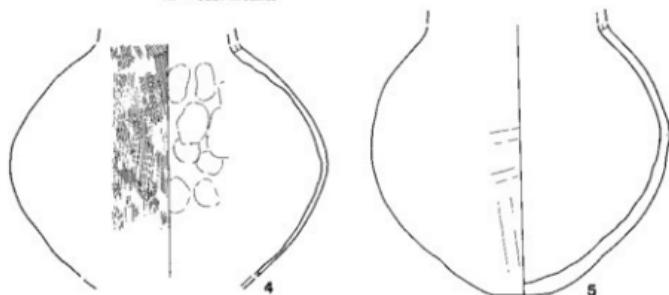
第48図 第6号竪穴式住居出土遺物実測図(1)



第6号竪穴式住居



第7号竪穴式住居



第8号竪穴式住居

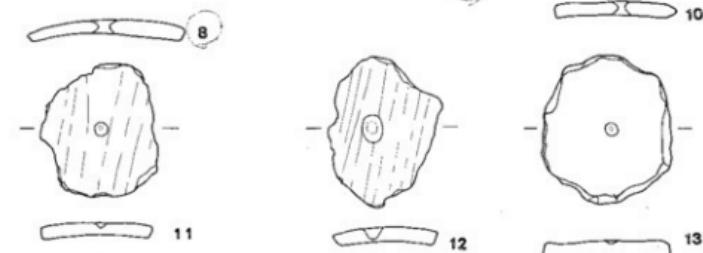
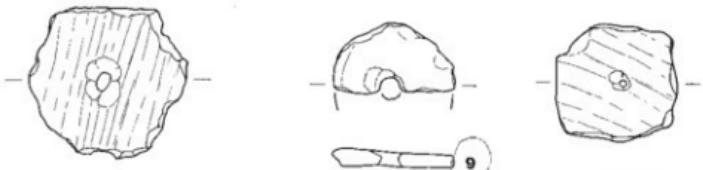
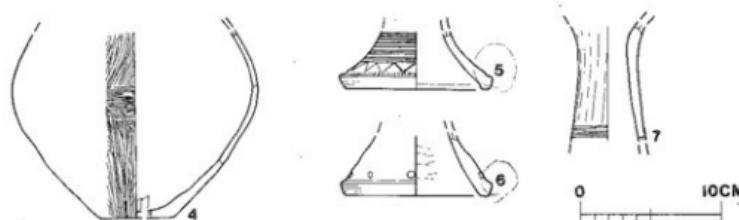


第9号竪穴式住居

第49図 第6号竪穴式住居出土遺物実測図(2)
第7・8・9号竪穴式住居出土遺物実測図

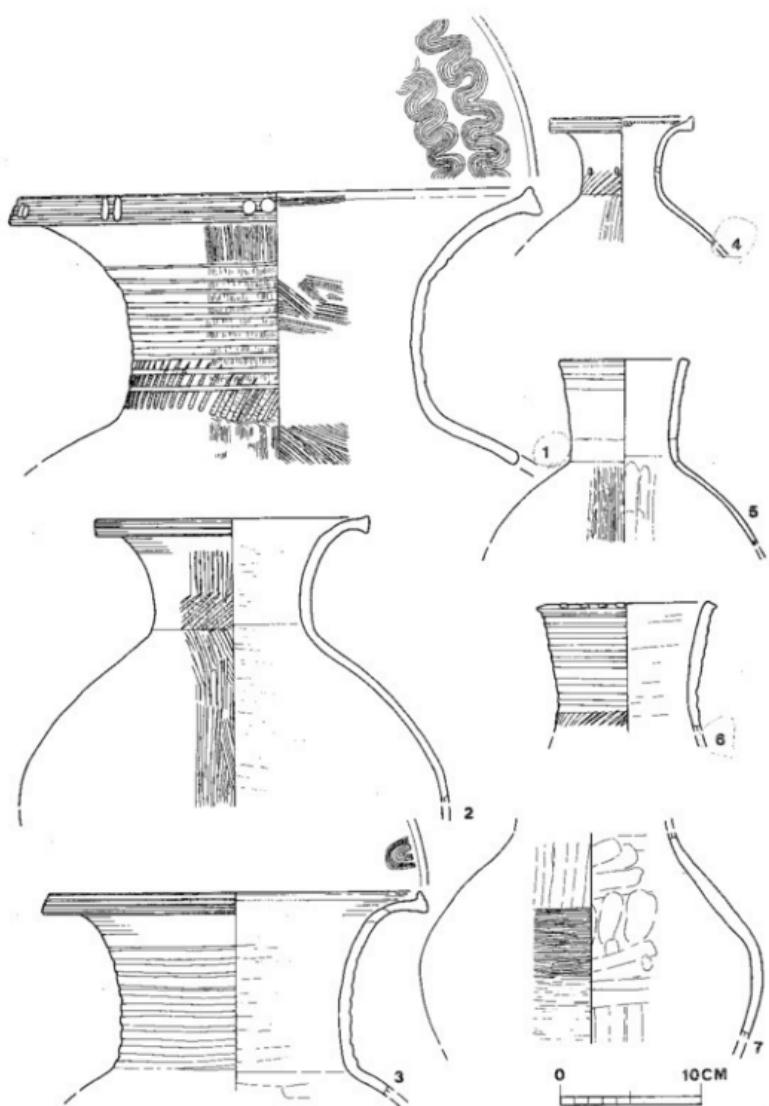


第10号堅穴式住居

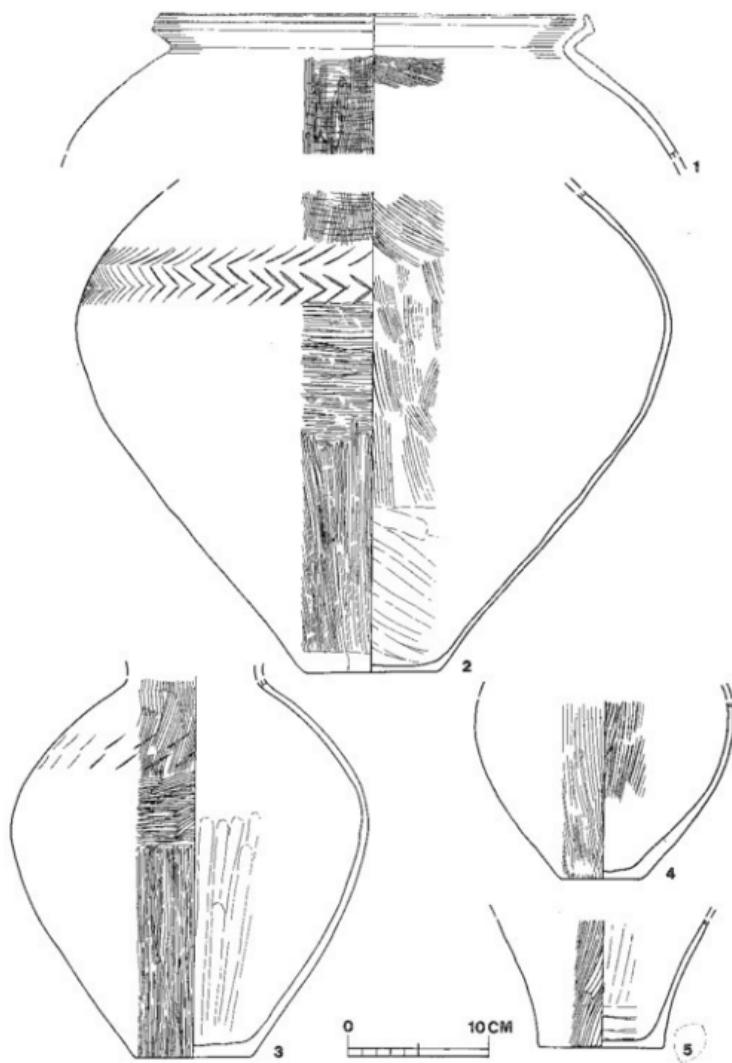


第11号堅穴式住居

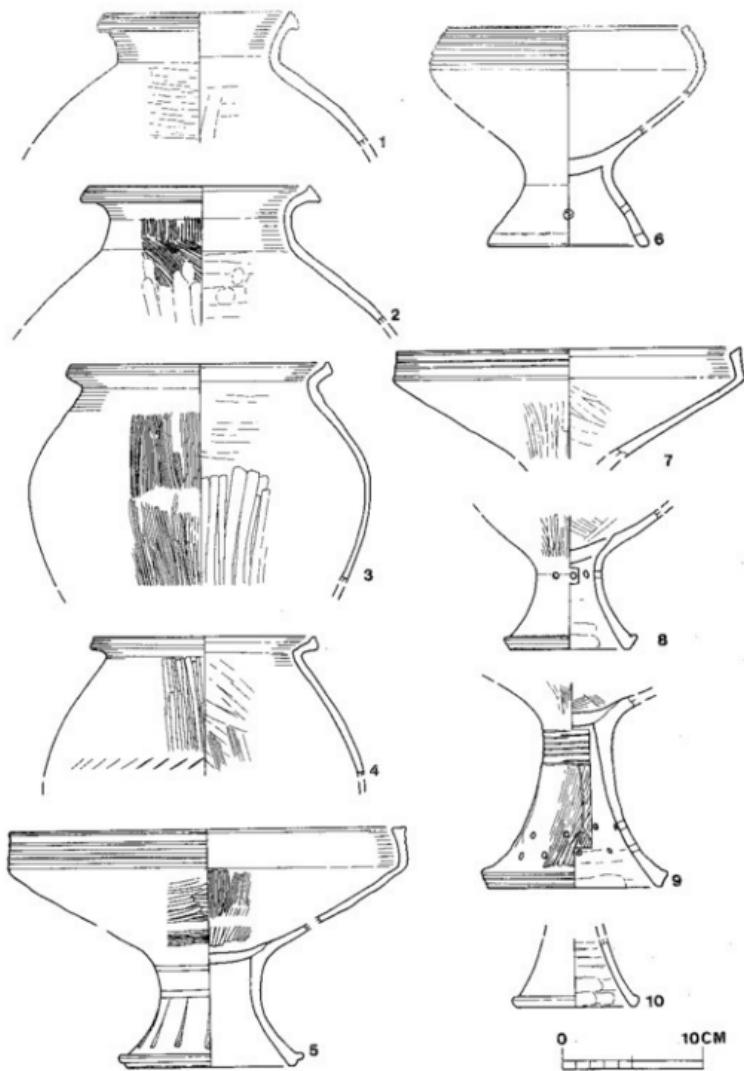
第50図 第10・11号堅穴式住居出土遺物実測図



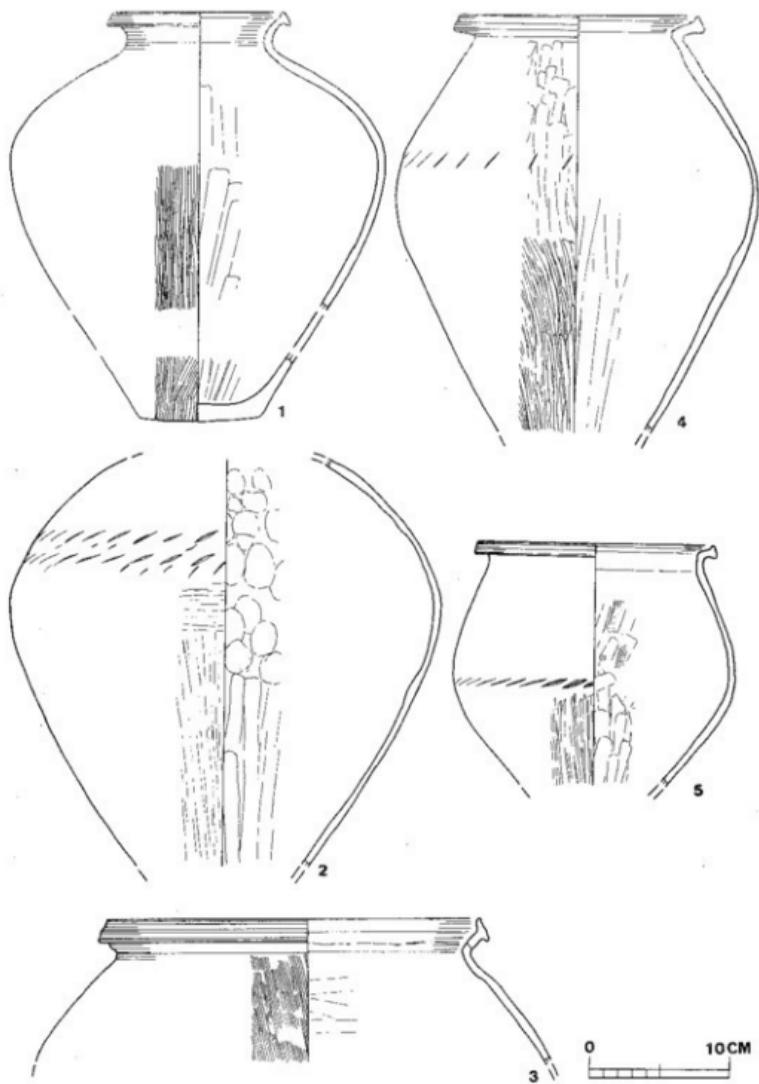
第51図 第2号テラス状遺構出土遺物実測図(1)



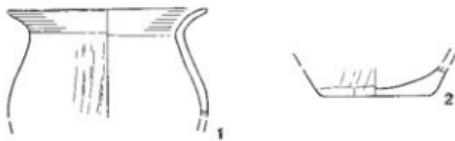
第52図 第2号テラス状遺構出土遺物実測図(2)



第53図 第2号テラス状遺構出土遺物実測図(3)



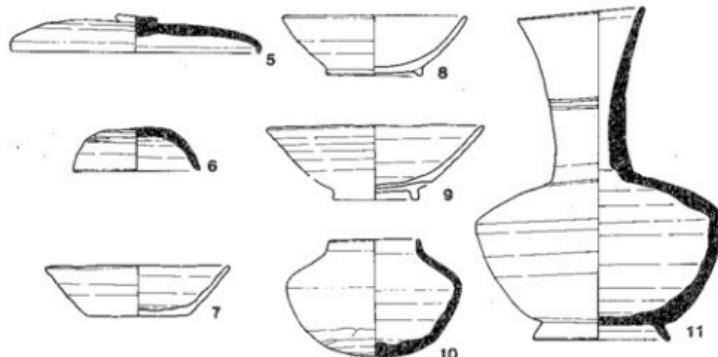
第54図 第3号テラス状遺構出土遺物実測図



第2号石室土塚蓋



第1号無袖横穴式石室



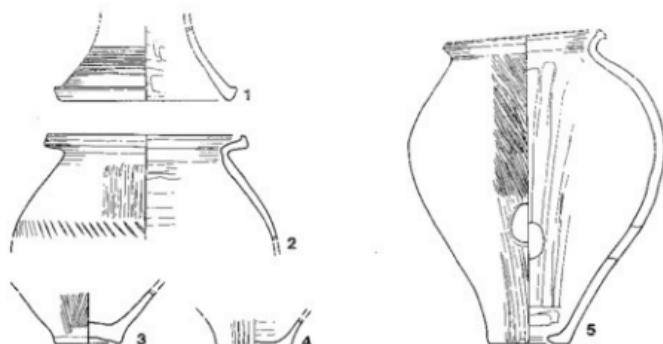
第2号無袖横穴式石室



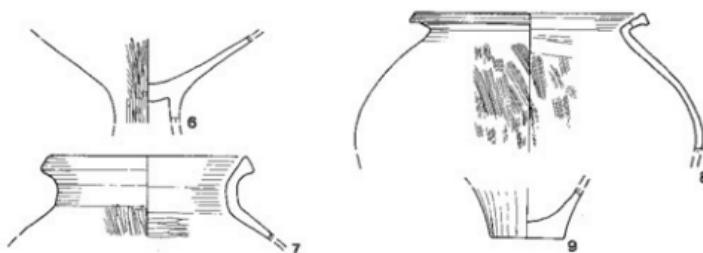
茶臼山第8号墳



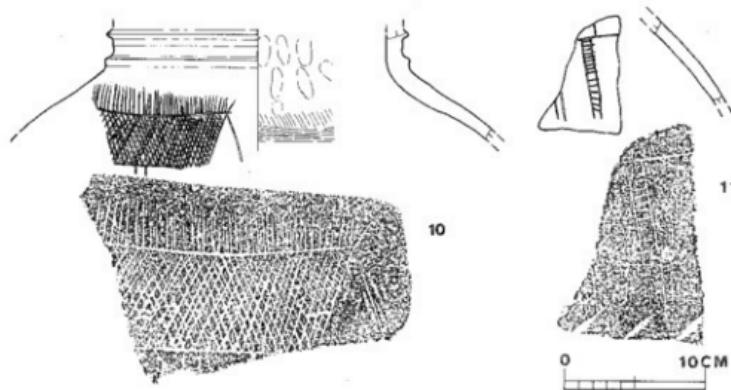
第55図 第2号石室土塚蓋・第1号無袖横穴式石室
第2号無袖横穴式石室・茶臼山第8号墳出土遺物実測図



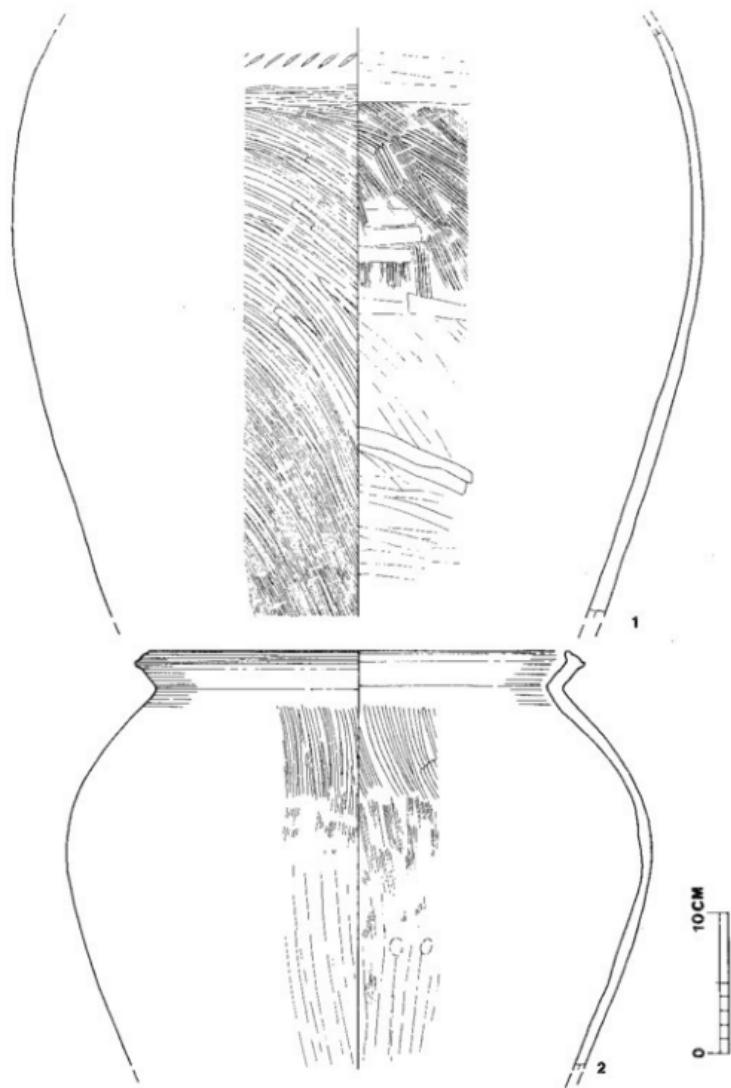
第1号土坑



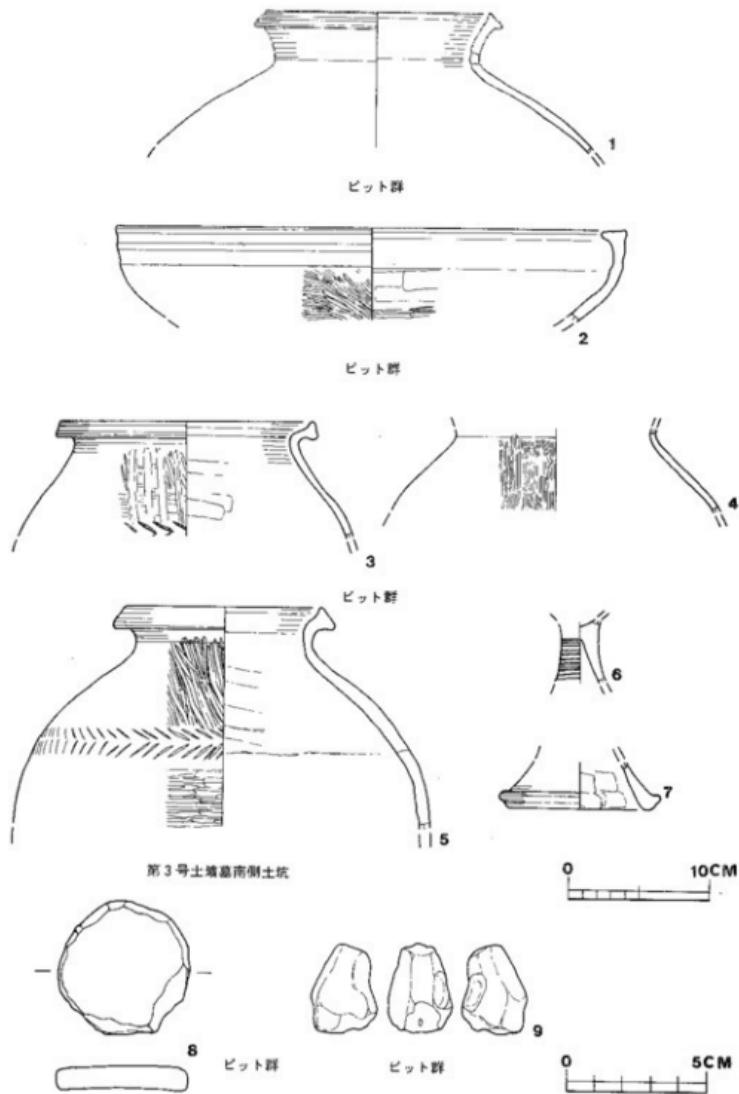
第2号土坑



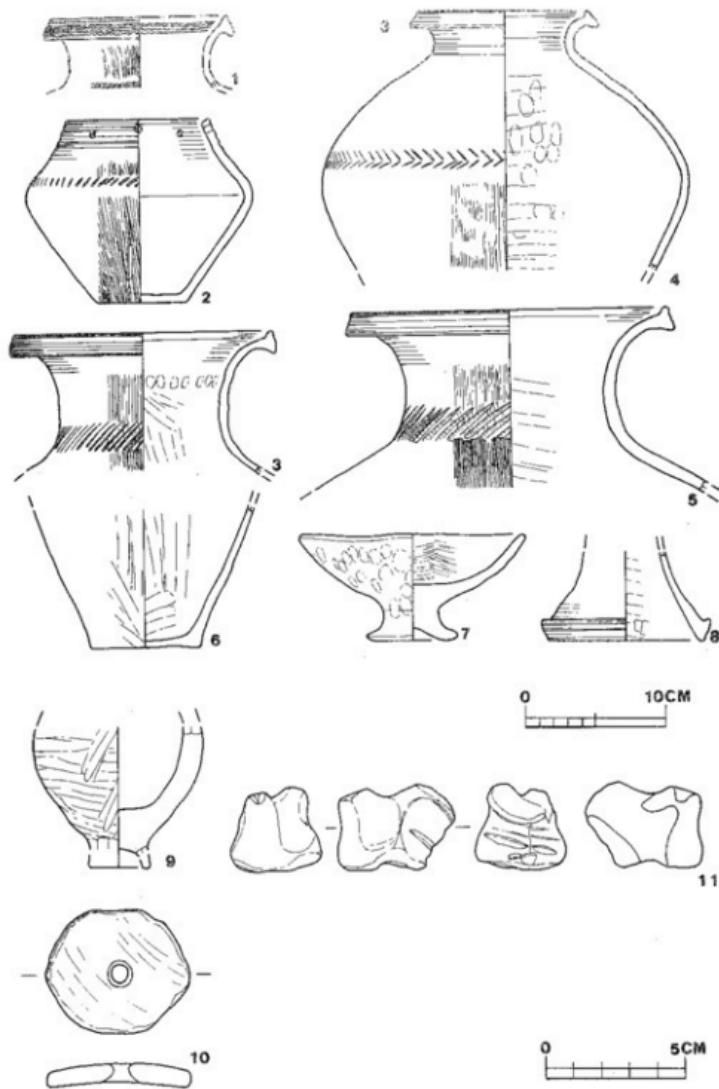
第56図 土坑出土遺物実測図(1)



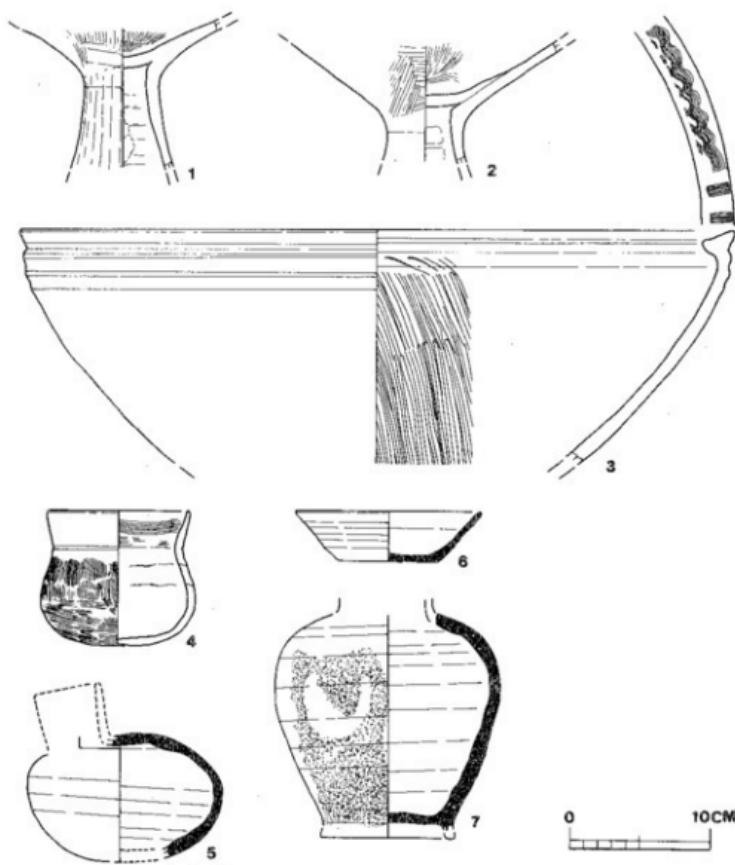
第57図 土坑出土遺物実測図(2)



第58図 土坑出土遺物実測図(3)



第59図 グリッド・トレンチ出土遺物実測図(1)



第60図 グリッド・トレンチ出土遺物実測図(2)

2. 石器

図面及 び遺物 番号	遮構及び 調査区	出土状況	器種	石材	重量	法 量			備 考
						A長さ (現存値)	B幅 ()	C厚さ ()	
第61図 - 1	第1号 堅穴式住居	排土中	石錐	サヌ カイト	2.0	A 3.5 B 1.5 C 0.4			凸基有茎式。AB両面 とも大剥離面を残す。
- 2	"	P 2 埋土中	"	"	1.7	A 3.3 B 1.3 C 0.4			凸基有茎式。AB両面 とも中央部に大剥離面 を残す。
- 3	"		"	"	1.8	A (3.0) B 1.5 C 0.3			凸基有茎式。茎部先端 を欠損のAB両面とも 中央部に大剥離面を残 す。
- 4	"		"	"	1.0	A (2.3) B 1.4 C 0.25			凸基有茎式。先端部と 茎部の下端部を欠損。 AB両面とも中央部に 大剥離面を残す。
- 5	"		"	"	1.0	A 2.7 B 1.2 C 0.35			凸基有茎式。A面は縁 辺部に細かい調整剥離 を施し、中央部には大き く大剥離面が残る。 B面は大剥離面のみで 調整が見られない。
- 6	"	第2層	"	"	2.8	A 42 B 1.25 C 0.5			凸基有茎式。AB両面 とも中央部に僅かに大 剥離面を残し、先端部 を中心に細かい調整剥 離を施す。基部の作り 出しは不明瞭。
- 7	"	排土中	"	"	2.8	A 4.0 B 1.6 C 0.5			凸基無茎式。A面は全 面調整、B面は縁辺部 のみの調整で、中央部 に大きく大剥離面が残 る。
- 8	"		"	"	1.7	A (2.6) B (1.7) C 0.5			基部を欠損。AB両面 とも全面に調整剥離を 施す。
- 9	"		"	"	0.4	A (1.3) B (1.1) C 0.3			先端部のみ残存。AB 両面とも全面に調整剥 離を施す。
- 10	"		"	"	4.7	A 5.4 B 1.8 C 0.6			凸基有茎式。AB両面 とも縁辺部に細かい調 整剥離を施し、B面は 中央部に大剥離面を残 す。

図面及 び遺物 番号	遺構及び 調査区	出土状況	器種	石材	重量	法量		
						A長さ	(現存値)	B幅
第61図 -11	第1号 竪穴式住居		石庖丁	サヌ カイト	84.8	A 11.0 B 5.5 C 0.9		刃部と一方の抉部は両面からの調整。背面ともう一方の抉部はB面のみからの調整を施す。
-12	"		削器	"	66.9	A (7.7) B 4.7 C 0.9		両端部を欠損。刃部および背部は両端より調整を施す。A面は何度かの面調整の痕跡があるが、B面は石材採取時の大剝離面が残る。
-13	"		石庖丁	サヌ カイト	42.5	A (6.1) B 4.8 C 0.8		A B両面に面調整の剥離痕を有し、刃部をはじめとする全縁辺部に両面より調整が加えられている。半裁品であるが、欠損部にも抉の調整が施されており、再利用されたものと思われる。
第62図 -1	"		"	"	79.1	A 13.2 B 5.0 C 0.8		刃部、背部とも両面からによる調整であるが、刃部についてはA面からのものが主である。
-2	"		削器	"	85.2	A 11.6 B 5.5 C 1.3		A面は刃部に調整剥離、先端部にも器面調整のための剥離を施す。B面は刃部に細かい調整剥離。
-3	"		楔形 石器	"	34.5	A 6.8 B 3.3 C 1.2		両端の截断によって扇形に整形され、刃部を背部に階段状の剥離が見られる。
-4	"		台石	砂岩	1119.1	A 15.0 B 9.8 C 4.1		偏平な楕円石蹠で、表面中央部下割りと両端に敲打痕が見られる。全体的に赤褐色を呈し、熱を受けたものと思われる。
-5	"		砥石	"	248.6	A (8.8) B 4.4 C 3.5		A B面および背面は、磨滅により内湾する。
-6	"		"	サヌ カイト	305.0	A (9.8) B (6.4) C 2.2		表裏面に縦方向の擦痕。表面上端は横方向の擦痕を有する。

図面及び遺物番号	遺構及び調査区	出土状況	器種	石材	重量	法 規 A長さ (現存値) B幅 C厚さ (×)	備考		
							A	B	C
第63図 - 1	第2号 竪穴式住居		石 篦	サス カイト	2.8	A 4.6 B 1.7 C 0.3	凸基有茎式。A面は中央部に大剥離面が大きく残り縁辺部のみに調整剥離を施すが、B面は全面に細かい調整剥離を施す。		
- 2	"		"	"	3.1	A 4.2 B 1.5 C 0.4	凸基有茎式。A面中央部にわずかに大剥離面が残るが、B面は全面調整を施す。		
- 3	"		"	"	2.9	A (4.2) B 1.8 C 0.4	凸基有茎式。茎部を欠損。AB面とともに全面細かい調整剥離で特に先端部の整形は丁寧である。		
- 4	"		"	"	1.8	A 4.1 B 1.8 C 0.2	凸基有茎式。AB面とともに大剥離面が僅かに残る。茎部に比べ先端部の整形が甘く、均整もとれないため、未製品と思われる。		
- 5	"		"	"	2.5	A 3.0 B 1.5 C 0.6	凸基無茎式。A面は全面に調整剥離を施す。B面は縁辺部は調整によって薄く整形されているが、中央部が未調整で厚く残されている。未製品と思われる。		
- 6	"		"	"	1.8	A 2.6 B 1.7 C 0.4	凹基式。B面中央部に僅かに大剥離面を残す。		
- 7	"		"	"	3.	A 3.3 B 2.1 C 0.4	凹基式。AB両面ともに全面調整剥離縁辺部は特に細かい調整を施している。		
- 8	"		楔 石 形 器	"	9.0	A 2.9 B 2.5 C 0.8	左右両端を截断した正方形状を呈し、刃部と背部に階段状剥離が見られる。		
- 9	"		石庖丁	"	51.3	A 10.3 B 5.1 C 0.8	背部は両面より調整が加えられているが、刃部はA面にのみ細かい調整が見られるのみである。		

図面及 び遺物 番号	遺構及び 調査区	出土状況	器種	石材	重量	法 量			備 考
						A 八長さ(現存値) B 幅 C 厚さ(-)	B 高さ(-)	C 幅(-)	
第63図 -10	第2号 竪穴式住居		削 器	サス カイト	31.7	A 7.3 B 4.6 C 0.5			万部・背部ともに両面 より調整を加える。
-11	"		柱 状 石 斧	結 晶 片 岩	106.1	A (10.1) B (3.0) C 1.7			裏面と一側面が剥離。 表面は丁寧な研磨を施 し、側面も荒く磨いて いる。
-12	"		砥 石	安山岩	441.2	A 12.6 B 8.0 C 2.7			表離面に縦方向の擦痕 が残る。
-13	"		"	"	41.5	A 4.9 B 2.8 C 2.8			表離面と一側面に縦ま たは斜方向の擦痕。
第64図 -1	第3号 竪穴式住居		石 鐵	サス カイト	1.9	A 3.0 B 1.3 C 0.5			凸基無茎式。A B両面 とも全面に調整剥離を 施す。
-2	"		"	"	1.6	A 2.6 B 1.6 C 0.3			凹基式。A B両面とも 中央部に大剥離面を残 し、側縁部は細かい調 整剥離を施す。
-3	"		"	"	1.0	A (2.0) B 1.4 C 0.35			基部付近を欠損、B面 中央部に大剥離面を残 す。側縁部は荒い調整 剥離を施す。
-4	"		石庖丁	"	20.0	A (2.6) B (4.8) C 1.0			片方の端部のみ残存。 両面調整でB面に大剥 離面を残す。抉りは、 細かい調整剥離で弧状 を呈する。
-5	"		砥 石	砂 岩	649.6	A 9.9 B 11.9 C 2.8			表、裏面に研磨痕。表 面左肩部に敲打痕。石 材全体が赤褐色を帯び、 加熱を受けたと見られる。
-6	"		投 弹	"	42.8	A 4.2 B 3.5 C 2.8			偏平卵形の自然石で加 工痕は見られない。全 体に赤褐色を帯び、加 熱を受けたと見られる。
-7	第4号 竪穴式住居		石 鐵	"	1.4	A 2.3 B 1.4 C 0.4			凹基式。A B両面とも に全面に調整剥離を施 す。側縁部、基部とも に細かい調整によって 薄く仕上げている。

図面及び 遺物番号	遺構及び 調査区	出土状況	器種	石材	重量	法量 A長さ(現存値) B幅 C厚さ()	備考		
							A	B	C
第64図 -8	第5号 堅穴式住居		石 繪	サス カイト	0.6	A (1.9) B (1.2) C 0.3			先端部のみ残存。AB面ともに中央部に大剥離面を残す。側縁部は細かい調整剥離を施し、先端部も鋭い。
-9	"		砥 石	安山岩	129.6	A 10.2 B 4.9 C 1.4			厚さの揃った板石で表裏面に斜方向の目の荒い擦痕が見られる。
-10	"		磨 石	砂 岩	101.1	A (6.8) B (5.6) C 1.9			偏平な円盤状の川原石で1/4が残存。表面中央部が研磨により痙んでいる。石材表面が黄石褐色を帯びる。
第65図 -1	第6号 堅穴式住居		"	サス カイト	2.2	A (2.6) B 1.8 C 0.2			凸基有茎式。先端部を欠損。AB両面とも中央部に大剥離面を残す。
-2	"		"	"	1.3	A (2.5) B 1.7 C 0.3			平基式。基部の部を破損。荒い調整剥離で形を整え、刃部にのみ細かい調整を施す。
-3	"		"	"	1.4	A 2.9 B 1.6 C 0.4			凸基有茎式。未製品かAB両面とも刃部のみ調整剥離を施し、中央部には大剥離面が大きく残る。
-4	"		"	"	0.9	A (2.2) B 1.4 C 0.3			凸基有茎式。先端部を欠損。A面は中央部に大剥離面を残し、側縁部のみ調整。B面は一侧縁は調整がなく大剥離面のまま残る。
-5	"		"	"	1.1	A 2.7 B 1.5 C 0.25			凸基無茎式。AB両面とも中央部に大きき剥離面が残り側縁部のみ細かい調整剥離を施す。
-6	第7号 堅穴式住居		"	"	2.4	A (3.1) B 1.4 C 0.5			凸基無茎式。凸基部を欠損。AB両面とも中央部に大剥離面を残す。
-7	"		"	"	6.1	A 5.9 B 2.5 C 0.5			凸基有茎式。AB面とも中央部に大剥離面を残し、側縁部のみに調整剥離を施している。大型で薄手。

図面及 び遺物 番号	遺構及び 調査区	出土状況	器種	石材	重量	法 量 A長さ〔現存値〕 B高さ〔 〕 C厚さ〔 〕	備 考		
第65図 - 8	第7号 堅穴式住居		柱 状 石 斧	結 晶 片 岩	285.2	A (10.0) B 5.4 C 0.5	基部付近を欠損、刃部 は四角往状を呈し、研 磨を施す。		
- 9	"		石庖丁	結 晶 片 岩	55.6	A (12.3) B 3.0 C 3.2	両端部を欠損。石質の 筋理を利用して板状に 採った石材の刃部と背 部に調整剥離を施すが、 刃部は磨耗が著しい。		
- 10	第8号 堅穴式住居		石 鐵	サ ヌ カ イ ト	4.1	A 3.3 B 2.8 C 0.3	凹基式。側縁部のみ大 剥離面を施す。B面は 一側縁部にわずかに階 段状剥離が残る以外は 目立った調整が見られ ない。全体的に風化が はげしい。		
- 11	"		模 石 形 器	"	10.9	A (3.1) B 2.7 C 0.9	A面は中央部に大剥離 面が残り、両側縁部に は階段状剥離が残る。		
- 12	"		石庖丁	"	11.3	A (2.6) B 3.8 C 0.7	端部のみ残存。粗い調 整剥離で形体を整え、 刃部の一部と抉り部に のみ調整剥離を施す。		
第66図 - 1	第9号 堅穴式住居		敲 石	砂 岩	332.5	A 9.4 B 7.2 C 3.8	偏平な卵形で縁辺部に 敲打痕、表面にも数ヶ 所に研磨痕が見られる。		
- 2	第10号 堅穴式住居		台 石	花崗岩	1124.5	A 17.6 B (6.5) C (5.2)	表面に不明瞭な擦痕、 全体に赤褐色を帯び、 加熱のためと見られる。		
- 3	"		石庖丁	結 晶 片 岩	45.7	A (7.3) B (5.0) C 0.7	半分と、背部の一部を 欠損。刃部と背部は両 面より調整。表、裏面 の中央部にウロコ状の 加工痕が横一列に残る。		
- 4	第11号 堅穴式住居		石 鐵	サ ヌ カ イ ト	2.8	A 4.3 B 1.6 C 0.5	凸基有茎式。A面中央 部に僅かに大剥離面が 残る。側縁部は両面と も丁寧な調整を施す。		
- 5	"		"	"	1.8	A (3.5) B 1.5 C 0.3	凸基有茎式。茎部先端 を欠損か。B面中央部 に大剥離面が残るが、 縁辺部をはじめとして 全体に細かい調整剥離 を施している。		

図面及 び遺物 番号	遺構及び 調査区	出土状況	器種	石材	重量	法 量 a長さ (現存値) S横 C厚さ ()	考		
							A	B	C
第66図 - 5	第11号 窓穴式住居		石 瑚	ナス カイト	2.4	A (2.4) B 1.9 C 0.5	錐部基部のみ残存。A 面中央部は大剥離面が 残る。		
- 7	"		石 瑚	"	3.3	A (3.7) B 3.1 C 0.3	凸基有茎式。先端部を 欠損。B面に大剥離面 が残る。全体に薄手で 刃部の調整は少ない。 推定5~6cmの大形の 石鎧。		
- 8	"		"	"	1.6	A 2.9 B 1.5 C 0.4	平基式。全面に調整剥 離を施し、断面は菱形 を呈する。先端は鈍い。		
- 9	"		"	"	3.4	A 4.0 B 1.9 C 0.4	凹基式。両面に細かい 調整剥離を施し、断面 はレンズ状を呈する。		
- 10	"		"	"	2.0	A 3.4 B 1.6 C 0.3	凸基有茎式。A面全面 とB面縁辺部に調整を 施す。先端部をはじめ 全般的に粗雑で鈍い作 りである。		
- 11	"		"	"	5.8	A (4.6) B (2.7) C 0.4	推定復元長6~7cmに も及ぶと見られる大形 の石鎧片。先端部のみ 残存。A B両面とも縁 辺部のみ調整剥離を施 す。		
- 12	"		石 瑚	"	2.0	A 4.0 B 1.2 C 0.4	両面に調整剥離を施す が、A面は錐先端部や 基部に大剥離面が残り、 調整剥離も荒いのに比 べ、B面は全面に細か い調整を施す。		
- 13	"		櫛 石 形 器	"	8.9	A 3.7 B 2.2 C 0.9	左右両端を截断して台 形に整形。A B両面と ともに全面調整剥離を 施し、刃部と背部には階 段状剥離が見られる。		
- 14	"		"	"	8.3	A 3.8 B 2.0 C 0.9	左右両端を截断して台 形に整形。A B両面と ても中央部は大剥離面が 残り、刃部と背部に階 段状剥離が見られる。		
- 15	"		"	"	31.9	A (6.9) B 4.4 C 1.0	両端部を欠損。刃部と 背部のみ両面より調整 を施す。		

図面及び遺物番号	遺構及び調査区	出土状況	器種	石材	重量	法 量 A長さ B幅 C厚さ	{現存値} {=} {=}	備考
第56図 -16	第11号 竪穴式住居		石庖丁	サス カイト	11.9	A (4.8) B (3.9) C 1.0		端部のみ残存。刃部・ 背部および抉り部等の 周辺部のみに調整を施 していると見られる。
第67図 -1	"		削器	"	59.1	A (5.5) B 6.1 C 0.8		両端部を欠損。刃部と 背部に調整剝離を施す。
-2	"		"	"	26.4	A 5.8 B (4.7) C (0.9)		刃部のみ両面より調整 を施す。
-3	"		石斧	結晶片岩	174.3	A 18.0 B 2.4 C 2.5		棒状の自然石だが、表 面に研磨痕が見られる。
-4	"		"	"	16.4	A 7.6 B 6.8 C 3.5		黄灰色で隅丸方形の座 布團状の形体を有する。 裏面に研毛目状の擦痕 が斜目に見られる。
-5	"		擦石	安山岩	322.4	A (4.0) B (3.8) C (0.7)		石斧先端部付近の表面 が剥離した破片。表面 は丁寧に研磨を施し、 中央部に溝状の傷をも つ。
-6	"		台石	砂岩	292.2	A (9.7) B (6.3) C (3.4)		両側面に荒い擦痕が見 られる。石材表面が赤 褐色を呈しているため 熱によって破碎したもの と思われる。
-7	"		"	"	204.1	A (5.4) B (5.7) C 5.5		表裏面に擦痕。石材表 面が赤褐色を呈し、熱 によって破碎したもの と思われる。
第68図 -1	"		"	安山岩		A (33.2) B (21.8) C 11.4		中央ピット西側の床面 上に出土。表面に荒い 擦痕が縦横に見られる。
-2	"		"	"		A (21.2) B 19.0 C 3.7		中央ピット脇に検出し、 不整形な板状を呈し、 表面右肩に擦痕が見ら れる。
-3	"		砥石	砂岩	2014.8	A (11.0) B (16.0) C (8.0)		中央ピット西側の床面 上に検出。表面は研磨 によってぼんやり裏 面も全面研磨のうえに 中央部に敲打痕が見ら れる。

図面及 び遺物 番号	遺構及び 調査区	出土状況	器種	石材	重量	法 量	備 考
						A長さ(現存値) B幅さ C厚さ	
第69図 - 1	第3号 チラス状 遺構		石 繼	サス カイト	2.8	A (4.4) E 1.7 C 0.45	凸基有茎式。茎の先端一部を欠損。AB両面ともに中央部にわずかに大剥離面を残す他は、細かい調整剥離を施す。
- 2	"		"	"	4.0	A 4.7 B 1.7 C 0.5	凸基有茎式。茎の先端を欠損。AB両面とともに中央部は粗い調整。側面部は細かい調整剥離を施す。
- 3	"		"	"	2.0	A (3.2) B 1.7 C 0.3	凸基有茎式。先端部を欠損。AB両側面とともに中央部に大きく大剥離面を残し、側縁部のみ細かい調整剥離を施す。
- 4	"		"	"	1.4	A 3.3 B 1.5 C 0.3	凸基有茎式。先端部を欠損。AB両側面とともに中央部に大きく大剥離面を残し、側縁部のみ細かい調整剥離を施す。
- 5	"		"	"	200	A (2.5) B 1.5 C 0.5	凸基有茎式。茎部先端を欠損。AB両面とも中央部に僅かに大剥離面を残し、側縁部は細かい調整剥離を施す。
- 6	"		"	"	2.4	A (3.4) B 1.8 C 0.4	凸基無茎式。先端部と基部の一部を欠損。A面は全面調整剥離。B面は中央部僅かに大剥離面を残す。両面とも細かい調整で断面は薄いレンズ状を呈する。全体的に風化がすすんでいる。
- 7	"		"	"	0.8	A 2.8 B 1.1 C 0.3	凸基無茎式。AB両面とも中央部に大きく大剥離面を残し、側縁部のみ調整剥離を施す。
- 8	"		"	"	3.0	A 2.9 B 2.1 C 0.5	基部を欠損。A面は側縁部のみ調整を施し、B面は側縁部に二三の調整剥離が見られるようである。未製品か。

図面及 び遺物 番号	遺構及び 調査区	出土状況	器種	石材	重量	法 量 A長さ B幅 C厚さ (現存値) (原寸) (原寸)	備 考
第69図 -9	第3号 テラス状 遺構		石 磨	サス カイト	1.1	A (2.5) B 1.2 C 0.4	基部を欠損。A面は基 部付近。B面は先端近 くの中央部に僅かに大 剝離面を残す。
-10	"		"	"	0.4	A (1.0) B 1.1 C 0.3	凹基式。先端部を欠損。 ABとも中央部に僅かに大剝離面を残す。
-11	"		"	"	0.4	A 1.2 B 1.4 C 0.2	凹基式。AB両面とも 全面に調整剝離を施す。 先端の角理が60°前後 と広く、正三角形状の 平面形を呈する。
-12	"		石 錐	"	0.8	A (2.3) B (1.6) C 0.2	錐先端を欠損。AB両 面とも基部付近から錐 部にかけての縁辺部の みに調整剝離を施す。
-13	"		"	"	3.4	A (4.3) B 1.8 C 0.3	錐先端部を欠損。AB 両面の基部付近から錐 部にかけての縁辺部と 基部裁断面のみに調整 剝離を施す。
-14	"		石庖丁	"	21.4	A (3.4) B 4.2 C 0.8	端部のみ残存。A面は 刃部と抉り部。B面は 背部と抉り部分に調整 剝離を施す。
-15	"		"	"	7.9	A (1.9) B 4.8 C 0.7	端部のみ残存。A面では 刃部と側縁部。B面 では側縁部のみに調整 剝離を施す。
-16	"		"	"	45.4	A 10.2 B 3.0 C 0.7	完形。両面調整。
-17	"		"	"	53.3	A 11.2 B 4.0 C 1.0	完形。両面調整。A面 背部中央に大剝離の際 の打壊痕が残存。背部 は自然面のままでB面 のみわずかに調整剝離 が見られる。
第70図 -1	"		砥 石		78.2	A (8.8) B 2.6 C (2.9)	器表面は荒い研磨を施 す。一面に横方向の溝 状の磨滅による傷が2 本残る。

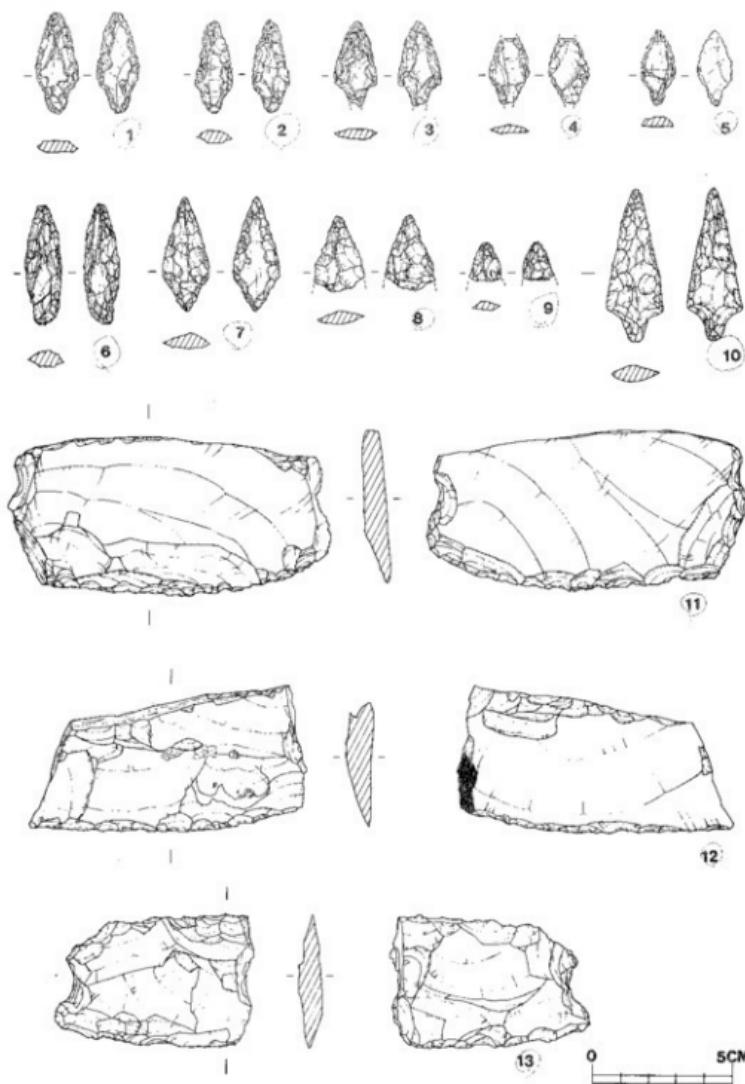
図面及 び遺物 番号	遺構及び 調査区	出土状況	器種	石材	重量	法 量 A長さ(測定値) B幅 C厚さ	備 考		
第70回 -2	第3号 テラス状 遺構		砥石	砂岩	79.5	A (9.1) B 3.8 C 1.8	表面は不明瞭な擦痕を 有し、レンズ状に窪む。 先端は尖っているが人 工によるものかどうか は不明。		
-3	"		往石 状斧	結晶岩	377.2	A (13.5) B 4.3 C 3.3	外面は丁寧な研磨が見 られ、先端部と先端部付 近に敲打痕が見られる。 基部付近を欠損。		
-4	"		台石	砂岩	239.1	A (10.8) B (5.4) C (3.4)	表面は丁寧な研磨を施 し、中央部は敲打によ って窪んでいる。裏面 は剥離。		
-5	"		敲石	"	978.9	A 18.5 B 10.6 C 3.7	不整三角形の自然石で 全面に研磨を施す。表 面は下方に敲打痕をも ち、その他は剥離によ ると見られる痕跡をも つ。裏面も下半に敲打 痕。		
第71回 -1	久米池 2号テラス		石 砕	サヌ カイト	2.2	A 4.0 B 1.8 C 0.3	凸基有柄式。A B両面 ともに中央部に大剥離 面が大きく残り、縁辺部 にのみ調整を施す。 先端部が丸みをおびる が、薄手の石材を要領 よく加工して仕上げて ある。		
-2	"		"	"	1.7	A (3.5) B 1.4 C 0.4	凸基有柄式。先端部と 基部先端を欠損。A面 は全面に調整を施すが、 中央部が肉厚に隆起し ている。B面は縁辺部 のみの調整で中央部に 大剥離面が残る。		
-3	"		"	"	2.2	A 3.4 B 1.6 C 0.4	凸基無茎式。A面全面 とB面縁辺部に調整を 施し、紡錘形に加工す る。		
-4	"		"	"	1.3	A 2.7 B 1.2 C 0.4	凸基無茎式。A B両面 とも中央部基部寄りに 大剥離面が残る。先端 部は調整を施す。中央 部が肉厚に隆起し先 が不整形なため、未製 品と見られる。		

図面及 び遺物 番号	遺構及び 調査区	出土状況	器種	石材	重量	法 量 A長さ(保存値) B幅さ() C厚さ()	備 考		
第71図 - 5	久米池 2号テラス		石 鋸	サス カイト	3.0	A (4.5) B 1.9 C 0.4	凸基有茎式。基部の先端を欠損。A B両面とも中央部確かに大剥離面が残るが、全体としてよく整った左右対称形に整形されている。		
- 6	遺構外及 表探 遺物		ナイフ 形石器	"	6.3	A 4.4 B 2.0 C 0.6	国府型ナイフ		
- 7	"		"	"	7.1	A 5.8 B 1.6 C 0.8	"		
- 8	"		石 鋸	"	3.2	A 4.6 B 1.8 C 0.4	凸基有茎式。B面中央に大剥離面が残る他は全面調整を施す。		
- 9	"		"	"	3.3	A 4.0 B 2.5 C 0.4	凸基有茎式。両面とも中央部に大剥離面を残し、縁辺部を中心に調整を施すが、直線的・幾何学的な整美な形に加工されている。		
- 10	"		"	"	3.1	A (3.9) B 2.0 C 0.4	凸基有柄式。先端部を欠損。A B両面とも中央部に大剥離面を残す。形状は長三角形状を呈し、逆刺部が三角翼状に両側に張り出している。		
- 11	"		"	"	1.1	A (1.9) B 1.7 C 0.3	凸基有茎式。先半部と茎端部を欠損。A B両面とも中央部に大剥離面を残す。縁辺部の調整はA面からが主で、B面には片側しか見られない。		
- 12	"		"	"	2.9	A 4.4 B 1.7 C 0.4	凸基無茎式。A面側縁部とB面全面に調整を施す。		
- 13	"		"	"	3.4	A 4.2 B 1.7 C 0.5	凸基無茎式。A B両面とも中央部に大剥離面を残し、縁辺部は大まかな調整を施す。		

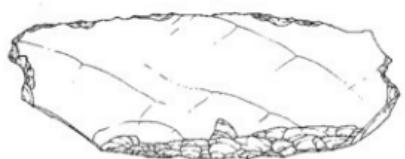
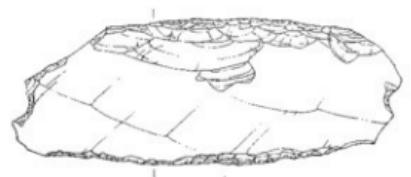
図面及び 遺物番号	遺構及び 調査区	出土状況	器種	石材	重量	法量 A高さ(残存高) B幅 C厚さ()	備考		
第71図 -14	遺構外及 表探遺物		石 簪	ナス カイト		A (3.5) B 1.3 C 0.3	凸基有茎式。先端部と 茎部を欠損。A B両面 とも細かい調整を全面 に施し、柳葉状に加工 する。		
-15	"		"	"	3.6	A 3.9 B 2.1 C 0.5	凹基式。両面とも中央 部僅かに大剥離面を残す。 縁辺部の調整はB 面は大まかであるが、 A面は細かく最終的な 整形はA面で作ったと 見られる。		
-16	"		"	"	3.4	A 3.6 B 2.1 C 0.4	凹基式。A面中央部僅 かに大剥離面が残る。 縁辺部の調整は両面より 細かに加えられている。		
-17	"		"	"	2.6	A 3.2 B 2.0 C 0.5	凹基式。両面とも全 面に大まかな調整を施す。		
-18	"		"	"	1.0	A 2.1 B 1.4 C 0.3	凹基式。A面基部付近 にわずかに大剥離面が 残る。基部は僅かに内 湾し、先端部はU字状 を呈する。		
-19	"		"	"	0.5	A 2.2 B 1.4 C 0.3	凹基式。両面とも全 面に細かく丁寧な調整を 施す。基部は逆刺が発 達し、三叉状を呈する。		
-20	"		石 錐	"	2.6	A 4.3 B 1.6 C 0.4	基部 A B面および錐部 A面に大剥離面を残す。 縁辺部は基部は両面。 錐部は主に B面からの 調整によって整形して いる。		
第72図 -1	"		石庖丁	"	78.3	A 11.8 B 4.9 C 0.8	刃部・背部および抉部 は両面より調整、B面 の大部分は自然風化面 が残る。		
-2	"		"	"	75.8	A 11.7 B 4.8 C 1.1	刃部および背部は両面 からの調整。抉部は基 本的には一方向からの 調整で加工。		

図面及 び遺物 番号	遺場及び 調査区	出土状況	器種	石材	重量	法 量			備 考
						A長さ(現存値)	B幅()	C厚さ()	
第72図 -3	遺場外及 表採遺物		石 鎌	サヌ カイト	69.2	A 10.5 B 4.3 C 1.1			先半部を欠損。刃部および背部は両面からの調整で、A B両面とも全面にわたって調整を加えている。刃部に階段状剥離が見られる。
-4	"		石庖丁	"	36.5	A 9.2 B 4.5 C 0.7			A B両面とも、大剥離面が大きく残る。背部は自然風化面が残り、刃部は基本的にはA面のみからの調整。
-5	"		"	"	71.8	A 8.4 B 5.5 C 1.1			B面は大剥離面が残る。刃部・背部・抉部とも両面よりの調整。もとが内厚な剥片であるため、大まかな調整で縁辺部を落として使用に耐え得るように加工している。
第73図 -1	"		"	"	96.1	A 14.5 B 4.8 C 0.8			全体的に刃部側に内湾する。刃・背部・抉部ともに両面から調整を施すが、刃部についてはB面からの加工が主で、A面のものは最終調整的な細かいものばかりである。
-2	"		"	"	37.9	A 7.7 B 4.7 C 1.0			整形・調整とともに両面から施され、小判形に仕上げる。縁辺部の調整は概してA面からのものが大まかでB面は最終的なものが多い。
-3	"		"	"	36.5	A (6.5) B 4.9 C 1.0			半分のみ残存。A面からの大きな剥離によつて整形のうえ、縁辺部の細かい調整はB面から行っていると見られる。
-4	"		"	"	52.9	A (5.7) B (5.8) C 1.5			半分のみ残存。石材に若干の白色風化が見られる。縁辺部は両面より調整を施す。
第74図 -1	"		石 斧	玄武岩	353.2				

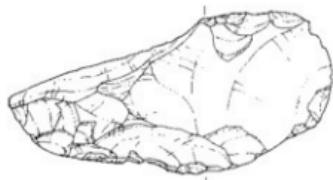
図面及 び遺物 番号	遺構及び 調査区	出土状況	器種	石材	重量	法 量	備 考
						A長さ(現存値) B幅() C厚さ()	
第74図 - 2	遺構外及 表採遺物		石斧	結晶岩	73.2		
- 3	"		"	"	56.4		柱状片刃石斧
- 4	"		"	"	21.5		偏平片刃石斧
- 5	"		"	蛇紋岩	52.0		"
- 6	"	砥石	粘板岩	14.0			両面および側縁を研磨 している。
- 7			"	流紋岩	9.9		偏平片刃か。
- 8		磨石	片磨岩	403.6			
- 9		不明 石器	砂岩	370.9			



第61図 第1号竪穴式住居出土石器実測図(1)



1

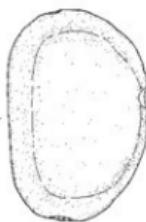


2



3

0 5CM



6

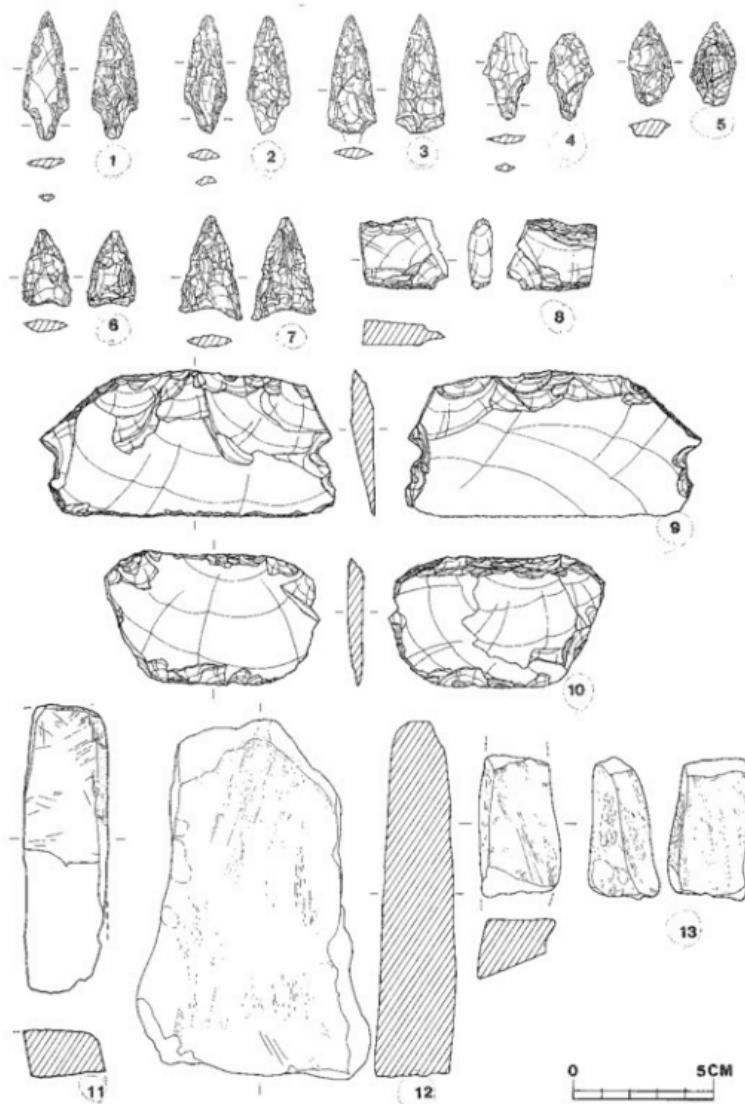
0

10 CM

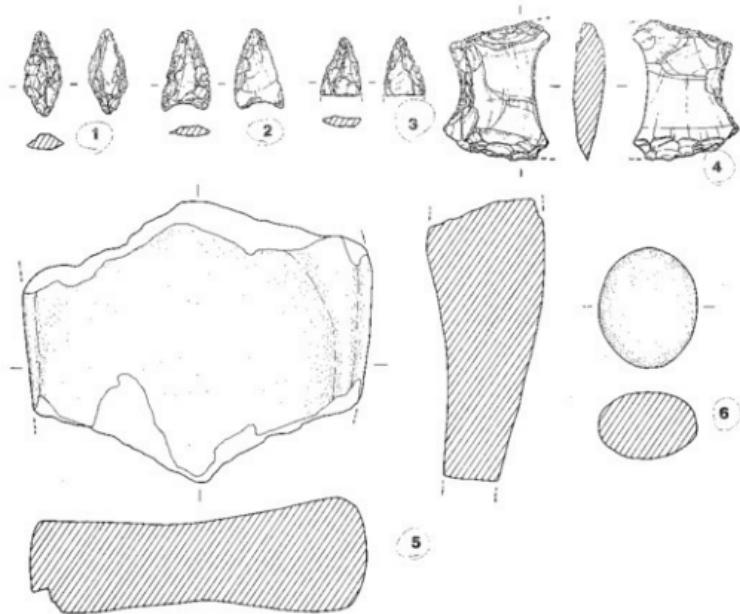


5

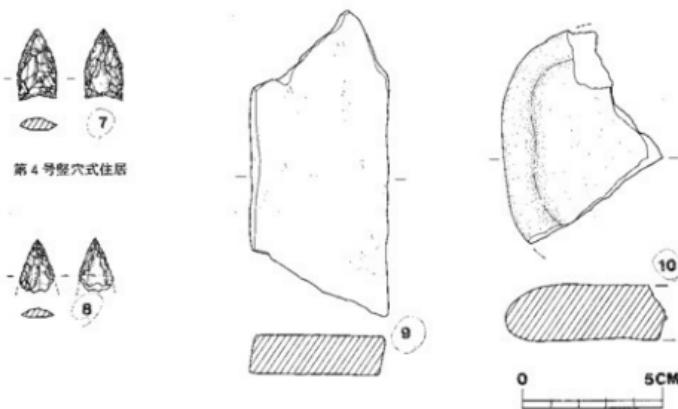
第62図 第1号竪穴式住居出土石器実測図(2)



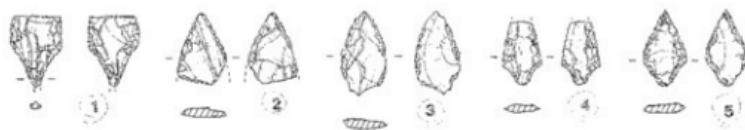
第63図 第2号竪穴式住居出土石器実測図(2)



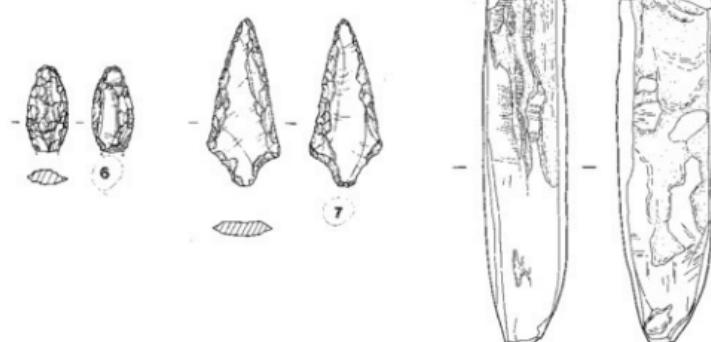
第3号堅穴式住居



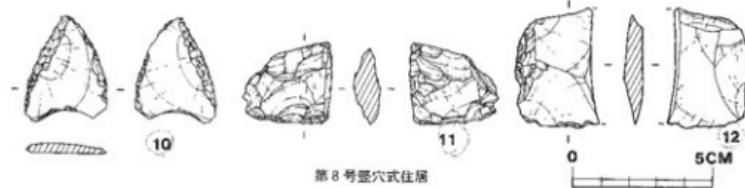
第64図 第3・4・5号堅穴式住居出土石器実測図



第6号堅穴式住居

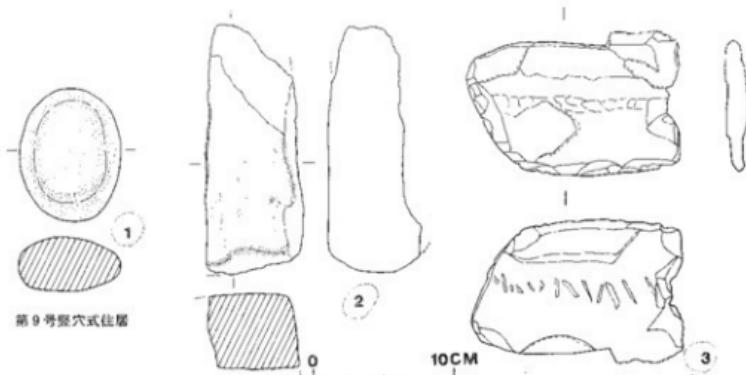


第7号堅穴式住居



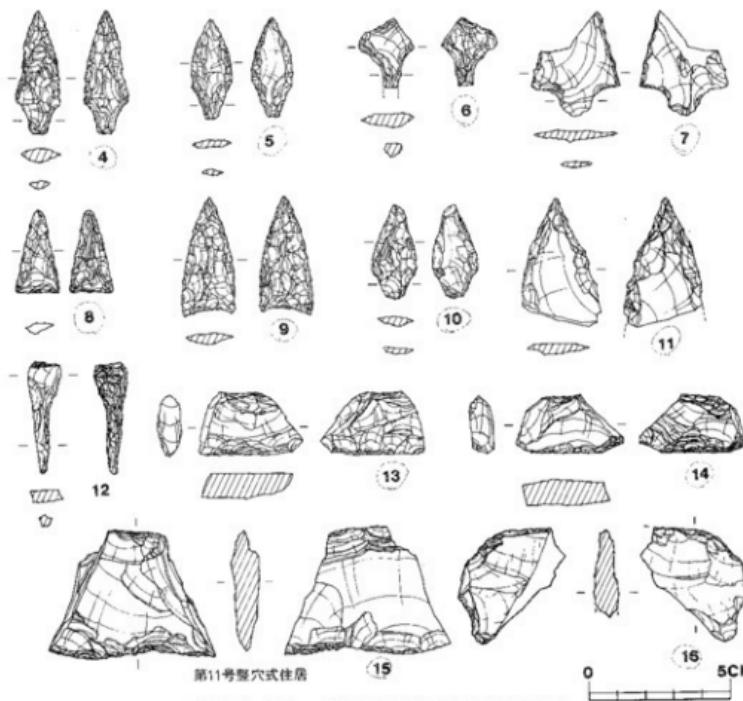
第8号堅穴式住居

第65図 第6・7・8号堅穴式住居出土石器実測図

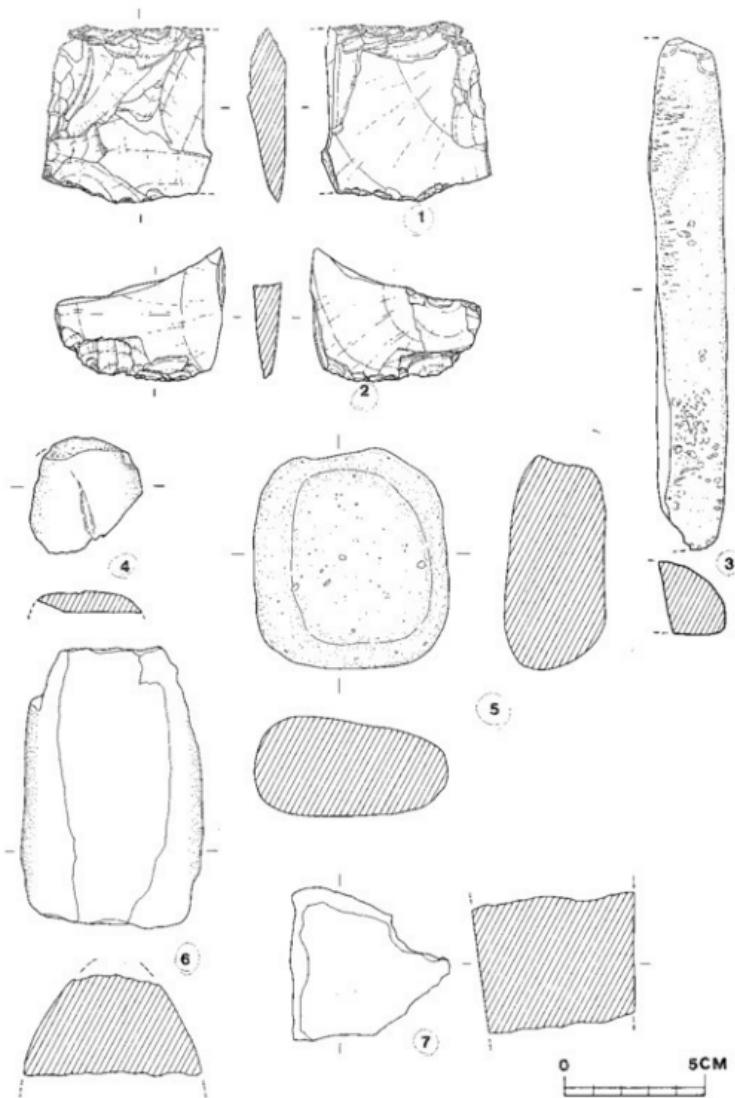


第9号竖穴式住居

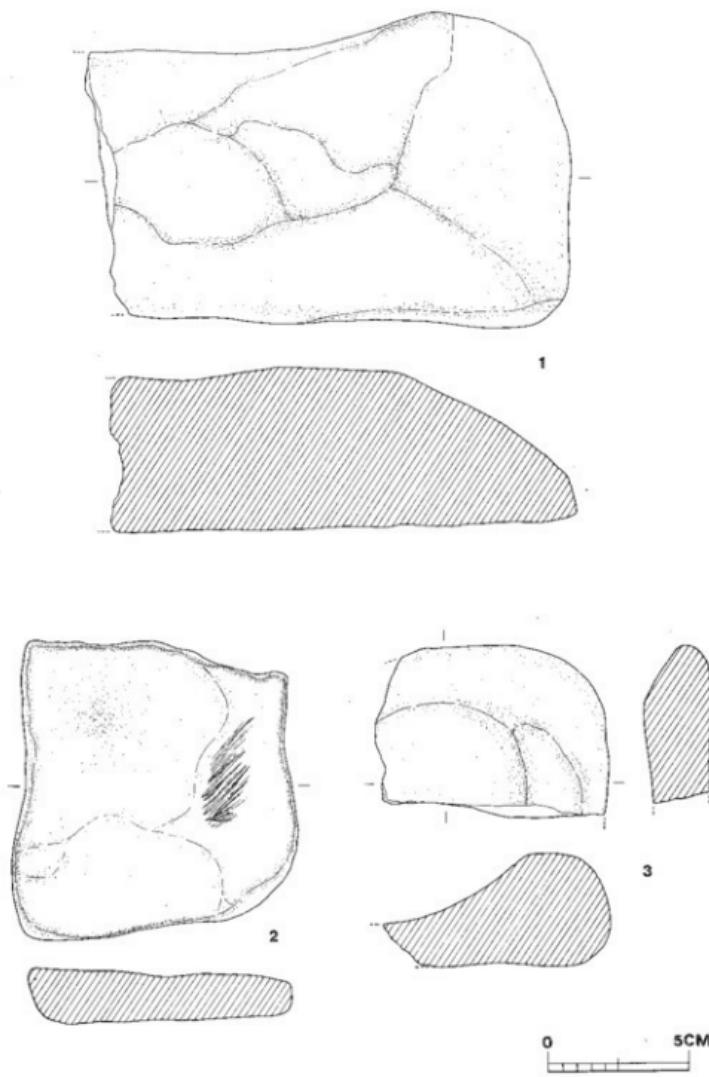
第10号竖穴式住居



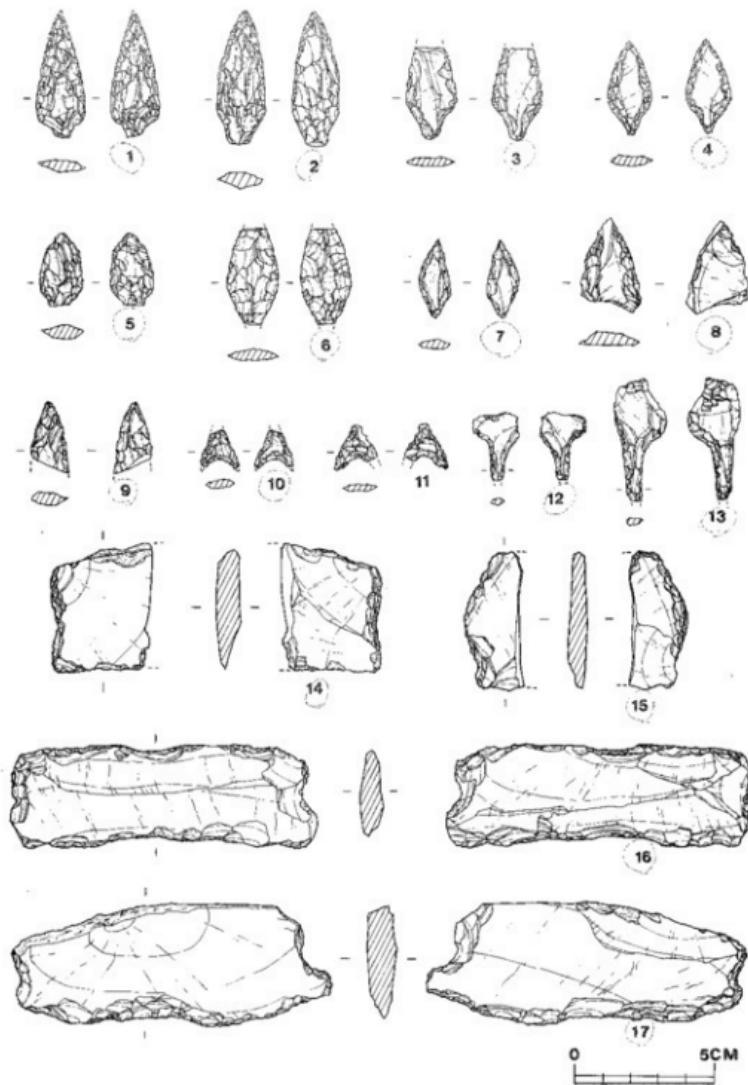
第66図 第9・10号竖穴式住居出土石器実測図
第11号竖穴式住居出土石器実測図(1)



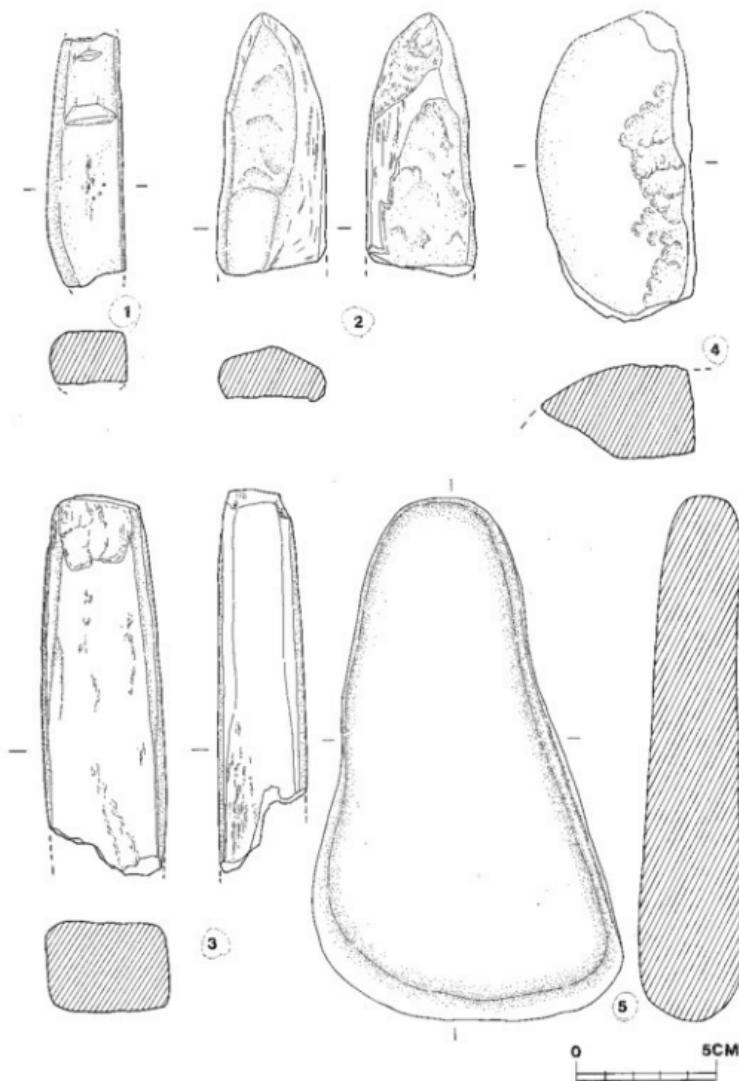
第67図 第11号竪穴式住居出土石器実測図(2)



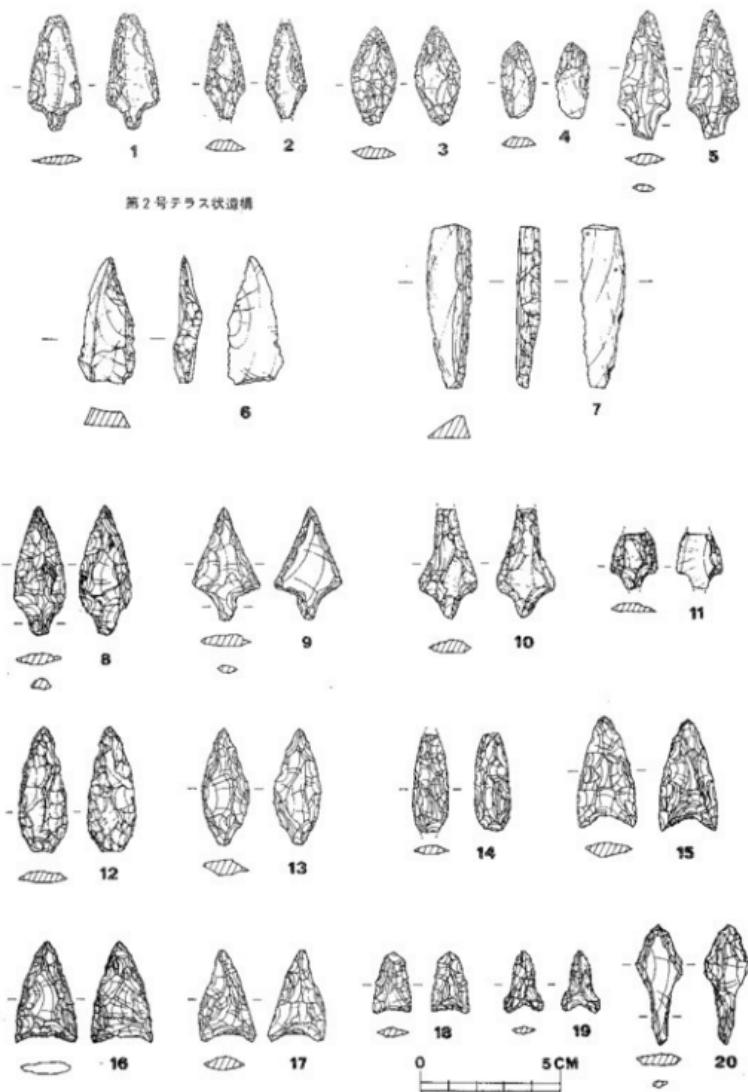
第68図 第11号竪穴式住居出土石器実測図(3)



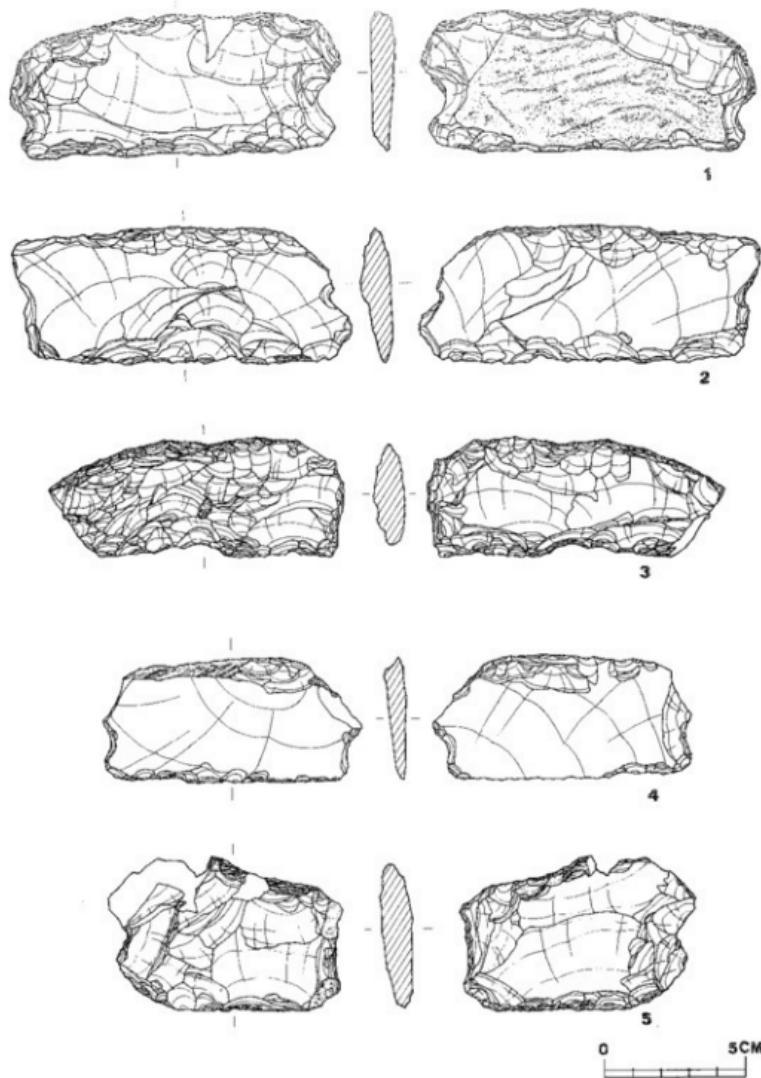
第69図 第3号テラス状遺構出土石器実測図(1)



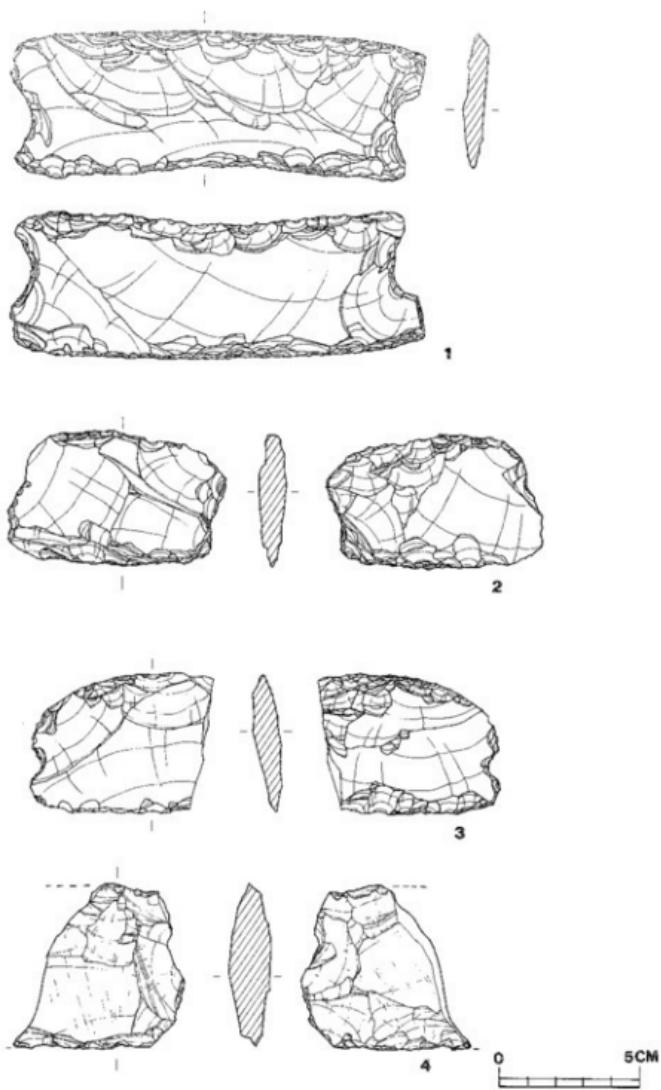
第70図 第3号テラス状遺構出土石器実測図(2)



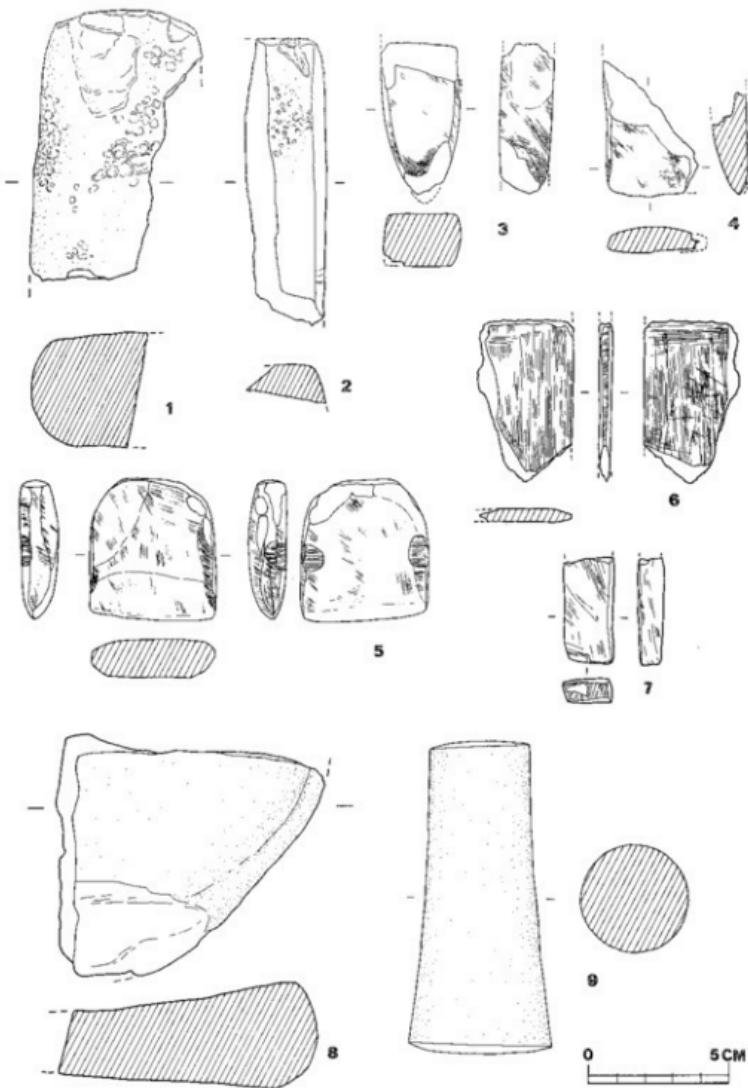
第71図 第2号テラス状造構出土石器実測図
造構外表採石器実測図(1)



第72図 遺構外表採石器実測図(2)



第73図 遺構外表採石器実測図(3)



第74図 遺構外表採石器実測図(4)

3. 鉄器（第75・76図、図版42・43）

傍生山地区及び茶臼山地区で出土した鉄器の総数は27点である。個々の地区ごとにみると、前者が19点、後者が8点である。この数量の差は、2遺跡がほぼ同時に近接して並存し、同質の内容を示すことから、単に遺構の多寡によるものであって、遺跡の特殊性を示すものではない。総数の器種別内訳は、工具21点、武器4点、その他2点となっており、工具類の多いのは、弥生時代中頃の集落遺跡に共通する現象といえる。

1. 傍生山地区出土の鉄器（第75図1～11・第76図、図版42・43）

(I) 工具

第75図1（図版42-4、以下番号のみ表示）は第2号堅穴式住居第2層（下層）出土。現長5.4cm・幅0.5～0.7cm・厚さ0.1～0.15cmの鉈で、先端を欠失する。先端はゆるやかに屈曲して上方に反っている。先端の0.4cmが上反しているが、側縁は厚みがあり、刃はみられない。欠失した部分が刃部となるのであろう。基部には木質の痕跡はみられない。小型の細工用鉈であろう。

第75図2（8）は第2号堅穴式住居第1層出土。現長2.6cmで、先端を欠失する。刃部は1.1cm分が残存し、ゆるやかに上向きに反っている。薄い作りである。刃部には上面に鑄^{レバ}があり、裏面に裏すきをもち、断面は逆V字形を呈する。彫刻刀の三角刀に似る。茎となる基部は1.5cm・直径0.6cmの円棒状で、先端が尖る。小型の細工用工具であろうが、刃部の形態から鉈の一類、あるいは突きのみの可能性がある。

第75図3（10）は第1号堅穴式住居出土。現長2.7cm・幅1cm・厚さは最大で0.6cmある。断面は三角形状になっていて、側縁に刃はみられない。一端は先端が尖り、長さ1.2cmの茎となっている。工具の可能性が強いが、鎌ということも考えられる。

第75図4（14）は第1号堅穴式住居出土。現長2.4cm・幅0.8～0.9cm・厚さ0.3cmの破片で、断面は隅丸方形をなす。全体に彎曲しているようにみえるが、一端がゆるく反り上がっている。現状では刃はみられないが、鉈の刃部端から基部にかけての部分とみることも可能である。

第75図5（11）は第3号堅穴式住居第1層出土。現長2.9cm・幅0.9cm・厚さ0.5cmの棒状品である。一端を欠失するが、他端は丸味をもって終っている。断面は一面が平坦で、他面が丸味をもつ、かまぼこ状となっている。なんらかの工具の茎部端とみられる。

第75図6（1）は第0号堅穴式住居崩土中出土。現長7.4cmで、刃部の先端を欠失する。幅2.2～2.4cm・厚さ0.1～0.2cmのほぼ長方形の基部から三角形に突出する刃部をもつ。刃部は、断面が片平の半凸レンズ状で、中央部の厚さは0.3cmある。わずかに上方に反っている。基部は、側縁に幅0.3～0.4cmの皮革か樹皮とみられる紐状品が継着している。また、裏面には木質の継着があり、端部近くに直径0.3cmの目釘穴が穿たれていることから、裏面に木の台を置き、目釘で留めた後、その上部をさらに皮革か樹皮で巻き固めていたとみられる。この柄の長さが基部端までであったのか、本体以上に長く延びるものであったのかは不明。鉈と同様の機能をもつ切削用工具とみら

れる。

第75図7 (20) は第6号墳穴式住居出土の竪下部より出土。現長7cm・厚さ0.15cmの刀子あるいは鎌の茎部とみられる破片で、身部に近い側は幅1.3cmで、両側より徐々に幅を減じ、先端は尖り気味に終束する。

第75図9 (18)・10 (17) は第1サブトレンチ第1層出土。9は現長2.3cm・幅0.6cm・厚さ0.4cm、10は現長1.8cm・幅0.6cm・厚さ0.5cmで、いずれも角柱状で、先端は丸味をもち、あまり尖ったり、薄くならずに終束する。小型工具あるいは鎌の茎部とみられる。

第75図11 (16) はB-3区第1層出土。やや大型の刀子と通有の刀子が2個銹着している。切先を残す。やや大型品は現長3.9cm・刃幅1.5cm・棟厚0.4cm。棟と刃が平行するタイプのものである。他の1個は現長2.2cm・棟厚0.4cmで、切先と茎部を欠失する。刃部が先細となるタイプで、現存部の刃幅は1.2~1.4cm。

第76図3は表土層中からの出土。全長13.8cmで刃部の一部を欠失する。刃幅は約8cm、重量は300g。全体に平板で薄い作りである。身の最大の厚さは1cmで、刃部近くは薄く、0.3cm前後の厚みしかない。身の上辺は、小さくくびれた袋部下端近くから少し肩を張り出し、有肩斧となっている。側縁は、この張り出した肩までは厚みがあるが、ここから下位は刃部と同様に非常に薄い仕上げとなっている。

袋部は、叩き延ばされて平均の厚さ0.3cmになった鉄板で作られ、両端の約2cmを折り曲げて、柄の装着部とする。双方の折り返しはくっつかず、間の幅2.5cm前後が開放されたままとなっている。身と袋部が一体作りなのか、別作りのものを鍛接したのかは肉眼観察では明らかにできない。袋部の内径は6.2×1.1cmで、薄い長楕円形である。内面に木柄の痕跡は観察できない。斧、手斧いずれの機能を有するのか不明であるが、袋部の状態、身及び刃部の薄い作りは、使用時の強度に問題が生じたことも考えられる。むしろ、この形態的特徴は、農具の打鍛の刃先として使用されたことを思わせる。しかし、いずれにしても使用した痕跡はあまり観察できない。

この斧は遺構から出土したものではなく、所属する時期を特定できないが、古墳時代の斧にはこの例のような平板で薄作りの大型品はあまり例がない。¹むしろ、神戸市・北神ニュータウン内遺跡出土例²、広島市・西願寺遺跡群出土例³など、弥生時代に平板な薄作りや折り返し部の末熟な作りを示すものが多くみられるので、この例も弥生時代に属するものとみておきたい。

第76図5 (7) は出土地点不明。現長2.2cm・最大幅1.3cm・厚さ0.35cmで、両側を欠失する。両側縁が外ぶくらみとなる外形で、断面はかなり厚みのある片平の半凸レンズ状となっている。銹のため、刃はよく観察できない。鎌の刃部あるいは鎌の身部とみられる。鎌とした場合、裏面は平坦で、裏すきはないようである。

第76図6 (6) は出土地点不明。現長6.7cm・幅1~1.3cm・厚さ0.35~0.4cmの幅広の棒状品で、両端を欠失する。幅の広い端は、断面が片平の半凸レンズ状で、両側縁は薄く、刃をもつようである。他端は隅丸方形の断面で、鉈の基部の破片であろう。

第76図7 は出土地点不明。現長3.4cmの刀子で、刃部切先と茎部端を欠失する。刃幅は最大で1.4

cm・棟厚0.3cm。両開作りで、茎は関部で幅1cm・厚さ0.3cmである。

(2) 武器

第75図3(13)は第3号竪穴式住居第1層出土。長さ3.4cm・厚さ0.2cm前後の鏡で、身の一部を欠失する。身は正三角形に近く、逆刺の部分は脇抉を作らず、丸味をもつ。茎は小さく、長さ・幅ともに1cmの逆三角形である。弥生時代の鉄鎌としてあまり類例のないタイプであり、石鎌の形態をそのまま鉄器化したものかもしれない。

第76図4は第1号土塙墓出土。全長約34cmの剣で、身の一部を欠失する。身の最大刃幅2.5cmで、切先に向かって次第に細身となり、切先近くでは刃幅2.1cmとなる。身の厚さ0.4cmで、断面は両凸レンズ状となり、鏡はみられない。茎は両開作りで、長さ6.8cm・幅は関部で2cm、端部で1.2cmとなる。厚さは0.2cmである。端部近くに直径0.2cmの目釘穴をもつ。身の全面に木鞘の木質が錆着している。茎には観察できない。剣の属する時期については、土塙墓の副葬品であるが、土塙墓の時期が特定できないだけに現状では不明とせざるをえない。

(3) 鉄素材

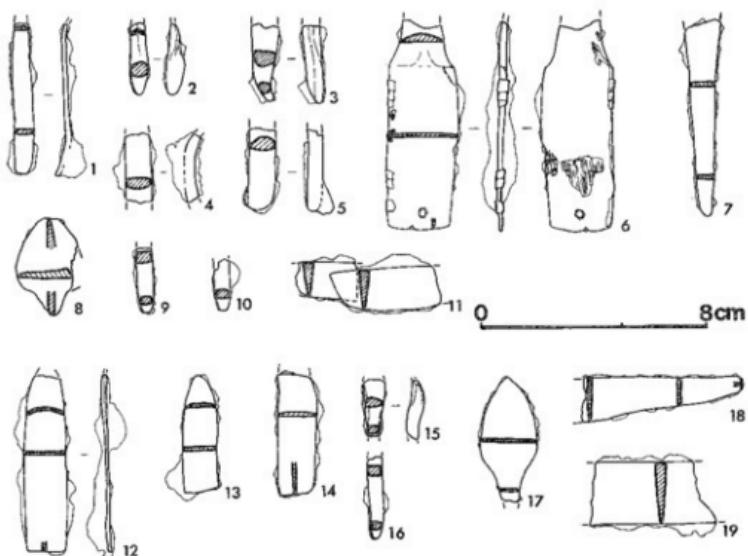
第76図1・2はともに第2号テラス状遺構出土。1は長さ15.2cmで、両端部が幅広となり、中央部の幅が最も狭くなっている。両端部はバチ形に開いており、端部の幅はそれぞれ約5cmで、一方の端面は直線的、他面は丸味をもっている。中央部は幅2.8cm、厚さは平均して0.2cmで、両端部はやや薄くなる。重量は55.5g。両側縁には厚みがあり、刃はつけられていない。また、この側縁は直線ではなく、いくつかの外ぶくらみの突出が認められる。この外面が円弧をなす突出⁴は打撃によって生じたものとみられる。両端部のバチ形に広がる形も打撃によって叩き延ばされた結果とみることができよう。これは、この部分の端面近くが他より極端に薄いことからも理解できる。

2は全長10.5cmで、一方の端部を欠失する。重量は22.2g。幅は中央部が最も狭く、2cm、両端はバチ形に広がり、遺存する側では約3.5cmとなる。端面は直線的である。一部欠失する側はそれほど広がらず、やや丸味をもつようで、幅は2.3cmである。厚さは平均して0.15cmであるが、バチ形に広がる端部では端面向かって薄くなり、端面ではほとんど厚みはない。両側縁には刃ではなく、厚みがある。1に比較すると、側縁は直線的といえる。

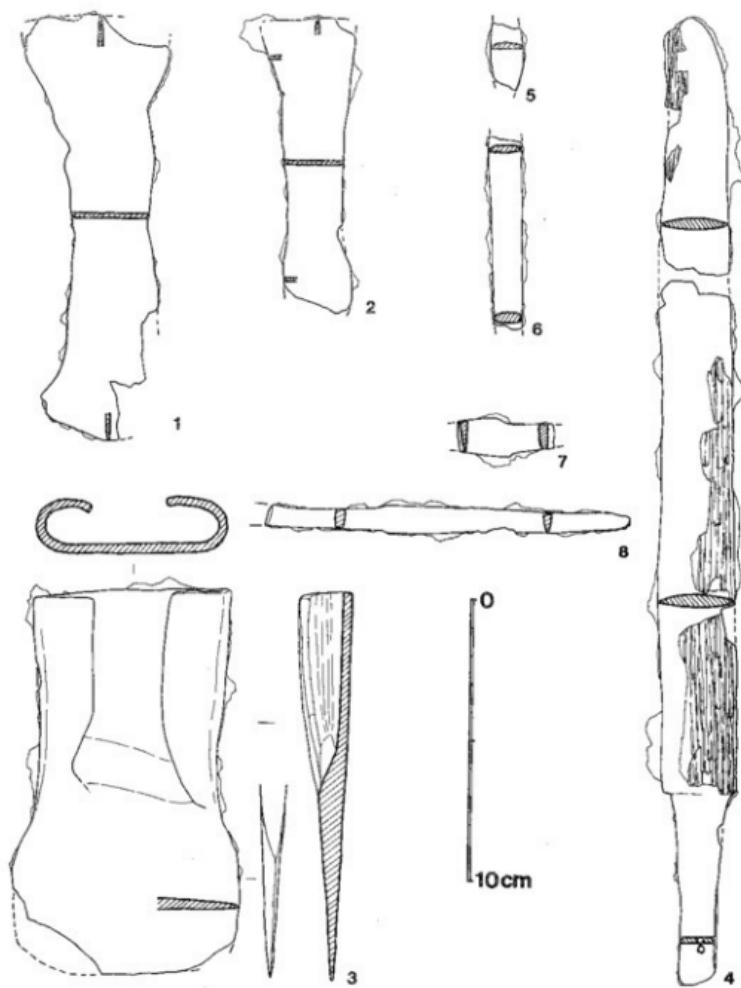
1・2は側縁に刃をもたず、一般にみられる農、工具類に類例を求めることができない。鎌、鋸などが形態的に類似するが、相連点の方がより一層顕著である。1・2の器種及び用途・機能を考える上で重要なのは、その形態上の諸特徴とその形態には相似形の大・小の2型があるということである。その形態的諸特徴は、古墳時代に鉄鎌あるいは枚鉄と呼称される鉄製品⁵に酷似するということに尽きる。また、この鉄鎌には大、中、小の定型化した相似形品があり、用途に応じて使いわけていたようだ。1・2の場合も、大きさの異なる、しかも定型的な相似形の2型が同時に同地点から出土している。これらの諸点からみると、この1・2の鉄製品を鉄鎌（枚鉄）と認定することが可能であろう。さらに、最も問題となることは、1・2が弥生時代中期後葉に比定できるテラス状遺構の遺構面から出土しているので、これによって、1・2がその時期に属する蓋然性が高いということである。

鉄錠（枚鉄）は5世紀以降、古墳の副葬品目に加えられる鉄製品で、鉄器生産の鉄素材と考えられているが、その本来の意味はもちろん、生産地、流通に至るまで、まだまだわからないことが多い、謎に包まれた鉄製品である。さらに、それ以前の鉄素材については一層わからっていないのが現状である。岡山県・新市谷遺跡出土例⁶が唯一、4世紀代にさかのぼる可能性をもつ鉄錠であるが、弥生時代に至っては、定型化した鉄錠というものの自体がほとんど知られていない。

弥生時代の鉄素材とされるもので著明なのは、長崎県・ハルノツジ遺跡出土品⁷がある。これは弥生時代後期に属し、長さ12cm・最大幅5cm・厚さ0.2cmの三角形に近い不定型品である。さらに、福岡県・赤井出遺跡出土品⁸は弥生時代中期後半～末頃に比定されており、長さ7.4cm・幅2.2cm・厚さ0.4cmの長方形を呈する。両端部がやや幅広に広がる形態となっている。この他、棒状品も鉄素材かとしてあげられている。しかし、いずれも鉄錠として定型化したものとはいえない。



第75図 出土鉄器実測図(1)



第76図 出土鉄器実測図(2)

一方、久米池南遺跡出土の1・2は、古墳時代にみられる鉄鉈とほぼ同様の形態であり、鉄鉈そのものといえる。出土位置はなんらかの工房と考えられる遺構であるが、ここで鍛冶を行ったことを証明する遺構・遺物は確認されていない。とはいものの、こうした定型化した鉄素材が弥生時代中期後葉に比定できる工房らしい遺構から出土したことは、これまでの古墳時代を一挙にさかのぼり、新たな基盤に立って、鉄素材の生産がどこでなされ、どのように供給されていったのかという、わが国の鉄生産の開始時期にも関わる未解決の諸問題を解き明かす、非常に重要な資料となる。今後の類例資料の増加に大いに期待したい。

2. 茶臼山地区出土の鉄器（第75図12～19、図版42）

(1) 工 具

第75図12（図版42-2、以下番号のみ表示）は第11号竪穴式住居出土。現長6.3cm・幅1.5cm・厚さ0.1cmの弥生時代に通有の鉈で、切先をわずかに欠失する。刃部は鏽をもたない丸味のある凸形になっていて、裏すきをもつ。現状で、先端から2cmまで刃部となっている。茎となる基部は平板で、木質の銹着は観察できない。

第75図13（3）は第3号テラス状遺構出土。長さ4.6cm・幅1.2cm・厚さ0.15cmの定形の鉈である。基部は平板で、木質は観察できない。刃部は長さ1.7cmで、上面は丸味をもつ凸面で、裏面は平坦に近い。裏すきはもつが、刃部幅全体が刃部幅全体が凹むものではなく、刃となる両側縁部の数mmがわずかに下方に屈曲する型式のものである。

第75図14（5）は第11号竪穴式住居出土。現長4.4cmの鉈の基部で、刃部を欠失する。幅1.4cm・厚さ0.1cmのほぼ平板な基部であるが、上面に少し丸味があり、銹のためによく観察できないものの、浅い裏すきが基部全体に施される型式の鉈となる可能性がある。

第75図15（9）・16は第3号テラス状遺構出土。現在2片となっていて、接合はできないが、同一個体であろう。15は刃部をもつもので、現長2.05cm。刃部は、幅0.45cm・厚さ0.3cmの角棒状の基部からバチ形に広がり、現状で長さ1.4cm・先端幅0.75cmとなり、刃先は欠失する。上方に少し反っており、裏面は丸味をもつ。鉈のように、裏すきをもって少し凹むとか平坦になった裏面ではない。16は茎の端部までの破片で、現長3cm。端部は角柱状のまま丸味をもって終束する。全長5～6cmの突きのみ状工具が想定できるが、鉄鉈の可能性もある。

第75図18（19）は第11号竪穴式住居出土。現長5.7cmの刀子で、刃部の一部と茎が残存する。刃部幅1.6cm・棟厚0.2cm。刃部と茎の境には明瞭な段をなす間はみられず、刃側から次第に幅を減じてゆく。茎に木質の銹着、目釘穴は観察できない。

第76図8は第4号小石室出土。現長12.9cmの刀子で、刃部は完全に残存するが、茎部の柄尻を欠失する。刃部は両側のもので、刃先になるにしたがい細くなり、中央部で幅0.9cm・棟厚0.2cmである。断面はクサビ形を呈す。茎部は中央部で幅0.7cm・厚さ0.3cmである。断面は長方形である。

② 武器

第75図17（12）は第3号テラス状遺構出土。現長4.4cmの鐵で、茎部端を失する。身部の最大幅2.05cm・厚さ0.1cmで、薄い作りである。身部は椿葉形を呈し、刃部は身部の先端から3分の2ほどを占め、最大幅をもつ部分のやや下方で、茎部に向かって幅を減じ始めるところまで刃をつけている。茎部は先端を欠き、全体の長さは不明。厚さは身部と同じで、板状を呈する。弥生時代に多くみられる型式のものである。

第75図19（15）は第10号竪穴式住居付近での表面採集。現長4.5cm・刃幅2.15cm・棟厚0.5cm。後世の削地跡に接しての表面採集遺物であり、所属時期などは不明。付近に小古墳が散在するので、すでに破壊された古墳の副葬遺物の一部である可能性がある。

註

- 1) 和泉黄金塚古墳・三池平古墳を代表的な例としてあげるが、これらの古墳では幅広の刃部をもち、比較的薄作りの身部をもつ大型斧が出土している。このような型式の斧は古墳時代に少なくないが、久米池南遺跡出土例と根本的に異なる点は、袋部の作りで、折り返しが接着し、その断面は丸味を帯び、太く大きいのである。末永雅雄・島田曉・森浩一『和泉黄金塚古墳』日本考古学協会 1954、内藤晃・大塚初重・田中稔・佐藤精作『三池平古墳』堺原村教育委員会 1961。
- 2) 山本三郎・深井明比古「北神ニュータウン №4、№45」、第16回埋蔵文化財研究会事務局編『埋蔵文化財研究会第16回研究集会資料』関連資料集Ⅰ 1984、この資料集は1 (508ページ)、2 (716ページ) の大部2冊があり、全国の弥生時代の鉄器のほとんどが収録されており、この分野に関して、最も精度の高いものである。
- 3) 金井亀喜編『西顧寺遺跡群』広島県教育委員会 1974。
- 4) この外彫した突出は鉄鋸に特有なもので、形態上の注目すべき特徴の一つといえる。宮内庁書陵部所蔵の奈良県・大和第6号古墳出土鉄鋸の多くに認められる。鉄鋸の形に整形する際に生じた叩打痕で、側縁だけでなく波打つような凹凸を全面に残す例もみられる。
- 5) 岡崎敬「鉄鋸」、第三次沖ノ島学術調査隊属「沖ノ島」宗像大社復興期成会 1979の考察編に収録、東潮「鉄鋸の基礎的研究」『考古学論叢』第12冊 奈良県立橿原考古学研究所 1987が最も詳しい。
- 6) 井上弘「下神代の遺跡」岡山県教育委員会編『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書』1977。
- 7) 岡崎敬「日本における初期鉄製品の問題—毫岐ハルノツジ・カラカミ遺跡発見資料を中心として—」『考古学雑誌』第42巻第1号 日本考古学会 1957。
- 8) 丸山康晴・佐々木謙彦ほか『赤井出遺跡』春日市教育委員会 1980。

第5章 調査のまとめ

1. 墳墓について

久米池南遺跡・茶臼山遺跡において注目される点は、弥生時代の遺構と古墳時代の箱式石棺との位置的関係である。

標記遺構のなかで箱式石棺群は弥生時代中期に属する遺構を切るか、周辺に必ず同時期の遺構が所在する。ということは箱式石棺が造られたとき、廃絶した弥生時代中期の遺構を意識していたか、もしくは遺構の周辺が箱式石棺を営み易い条件を備えていたか。両方の仮説が成立する。

後者の場合、遺構が埋没していく過程で生じた平坦地が利用されたと考えられる。関連する遺構がいずれも斜面に位置するため、埋没も比較的急ピッチで行なわれたであろうから、少なくとも箱式石棺は、弥生時代中期に営まれた集落が放棄された後、余り隔たない時期に造られたものと解釈できる。とすれば弥生時代後期を考えられ、6号竪穴式住居との関連からも支持したいところである。

しかし、これら箱式石棺群からは遺物がほとんど認められていないので、明確な年代感に欠けるが、以上から石棺群の下限を、弥生時代後期までと考えるより他になさそうである。

久米池南遺跡の山頂部周辺に、非常に小形の竪穴式石室構造をした埋葬施設（竪穴式石室状箱式石棺）が確認された。大部分は採土工事のため亡失したが、規模の点で箱式石棺と差はない。もちろん埴丘等を有した形跡も認められず、斜面部に散漫に所在する箱式石棺とは質的には全く差異がないとしていいであろう。

ただ箱式石棺とは構造の点だけが相違点ではない。両者はあたかも各々にテリトリーが有するかのように、分布地域が隣接するもの重ならない。

これらが同時期に造られたと仮定するならば、両者間に社会的地位の相違が存在したとするか、あるいは血縁的なまとまりとして把握するべきか各種の仮説をたてられる。

また、時期的差であるとするならば、竪穴式石室状箱式石棺が山頂部という好位置に造られている点からして、箱式石棺に先んじて構築されたとするのが当然であろう。従って、竪穴式石室状箱式石棺は、石棺群と同時期もしくはやや先行すると考えられる。

また、同構造の石棺は、かしが谷3号墳の主体部に発見された。同古墳は主墳である2号墳に引き継いで営まれたものである。かしが谷2号墳は古墳時代前期末から中期初頭と考えられ、従って、かしが谷3号墳もほぼ同様な年代感を有する。規模等の点で異なるが、今回問題にしている竪穴式石室状箱式石棺と構造的には同様である石清尾山船塚古墳の後円部に見られる竪穴式石室の年代感と差異がない。従って、久米池南遺跡の竪穴式石室状箱式石棺は古墳時代前期末から中期初頭という、やや単純な論法が成立する可能性がある。

次に、茶臼山8号墳である。西茶臼山古墳は、高松平野東部における巨大な前方後円墳高松市茶臼山古墳に先行するものではなく、後出するものであることはほぼ間違いない。従って、古墳時代前

期末以降と考えられる。茶臼山8号墳を西茶臼山古墳と同様な時期に構築されたと考える場合、前述の堅穴式石室状縮式石棺は古墳時代前期末から中期初頭とする説と符号していく。

以上の点から、久米池南遺跡に所在する箱式石棺群（形態の異なる両者を含めて）と茶臼山8号墳の年代感は、古墳時代前期末から中期初頭とする説が有力となる。

しかし、これに矛盾する点も少なからずある。先に記した石棺群と弥生時代の遺構との関係である。遺構放棄後、風化侵食の激しい花崗岩のパイラン土がそれを埋没させるのに、それほど時間を必要とするかという点である。遺構の埋土のなかにも、それらしい兆候は認められなかった。従って、この点を考慮すれば、前期初頭から中期初頭説は成立しなくなる。

つぎに、高松市茶臼山古墳の前方部付近で発見された石棺群である。これは様々な形態をとるが、年代感は高松市茶臼山古墳が成立した後と考えてよからう。

高松市茶臼山古墳が発掘された時点において、前方部で数多く検出された石棺群と同じ性格のものである。古墳時代前期以降と考えられる。

2基の横穴式石室も確認された。これらは斜面の中位より下方に位置する。いずれも小形化した横穴式石室で、棺台とおぼしき施設を床面に有する点も同様である。比較的大形の横穴式石室と比べて、形態は形骸化しさらに使用する石材も小さくなっている。横穴式石室が当初目的とした多数の埋葬を放棄しており、いずれも、唯一の人物の埋葬を対象とする施設となっている。おそらく古墳自体が衰退していく過程において出現した墳墓であろう。出土した遺物・須恵器や土師器も古墳時代終末と考えていいものである。

状況からして、北方に同様の石室が存在した可能性もあり、古墳時代終末に至って、茶臼山の地が再び墳墓地として利用された可能性が高い。

なお、2号横穴式石室からは、古墳が造られて数百年を経た頃の遺物が出土した。この遺物の時代まで、古墳として何等かの形態を保っておいたものと思われる。また古墳に直接関係しない時期の遺物が出土する例は、高松市内でも比較的多く、今まで、古宮古墳・南山浦古墳群・平石上2号墳・久本古墳等が知られている。これらはいずれも比較的大形の横穴式石室で、茶臼山古墳と根本的相違がある。従って、再利用の結果である前者と別の観点から把握する必要がある。

2. 絵画土器について

久米池南遺跡から2個体の絵画土器片が出土した。いずれも鋭い切っ先を持つ道具——鉄器（？）を使って、幼稚ながらも丁寧に描かれている。

両片とも第四号堅穴式住居周辺から出土しており、その出土地点はごく近傍である。表面採集によって当初に発見された方をA片、あと一方をB片とする。A片には左下に屋根が大きく描かれており、B片には昇降するための施設と考えられる。梯子状に描かれた施設（以下梯子とする。）が認められる。

両片の胎土はともに良好で、色調とともに極めて近似する。さらに内部調整も縦方向のハケ目のあと、ほぼ直交する横方向のハケ目が施されている。従ってA・Bの両片が同一個体のものである

確率は、その出土位置も考慮にいれるならば極めて高くなる。

A片は大形の壺の頸部から肩部にかけての破片で、頸部には断面が三角形を呈する突帯が二条確認できる。絵画はかなりの部分が失われているが、千木状の飾りを着けた家の屋根が大きく描かれている。切妻の建物を立体的に表現したような絵である。

第1に上下に平行的な線分が描かれる。上方をa下方をbとする。(以下説明文の簡略化と正確性を確保するため、各線分を記号化する。) 次にaとbとの間を埋め尽くす斜格子線が描かれている。右下がりの線分をc群、左下がりの線分をd群とする。c群の総数は33~34本、d群の総数は30本である。ここで特にd群中最も右に位置し、a、bとともに屋根形の外縁を形成する線分をeとする。aとはば直交する形で描かれた千木状の線をf群とする。f群は40~42本を数える。さらに、f群の最も右に位置する斜線を特別にgとする。eとgはあたかも一直線を為すようにみてとれる。次にaとeとの交点からc群に、ほぼ平行して1本の線hが描かれている。このhが棟持柱を表現したものか、切妻部分の縁にあたるのか、本絵画の最も注目される点の一つである。またbのはば中央から直交した2本の線が描かれている。柱であろう。左の線をi右の線jとする。

B片は肩部から胴部にかけての比較的小な破片で、下部に籠圧文が見られる。線刻画は梯子が中心に描かれ、籠圧文の上から線刻が行なわれていることが観察できる。従って、絵画は土器の最終調整が終った段階で描かれたと確認できる。

B片には入口を表現したと考えられる線kと、それに垂直な線l、さらにkの反対側でlと垂直な線が4本描かれている。これを左からそれぞれm、n、o、qとする。さらにoとqの間を埋めるように15本の短い線が描かれている。これをr群とする。m、nは柱、o、q、r群は梯子が表現されている。

ところでaは、明瞭に左から右への動きが観察できる。書き手が右利きであると考えられよう。この傾向は他の線分にも大なり小なり認められる。

次にA、B両片が同一土器に描かれただけでなく、同一の絵画と仮定して考察を加えてみる。

そのような仮定のもとでは、A片がB片の下部に位置することが自明である。その位置については、次の四例が考えられる。eとhの下方、bの下方でjの右側、bの下方でiの左側、さらにその左側が考えられる。しかし最後の可能性については検討の余地がないので除外しておく。従って3つの可能性について検討を加えることとする。

なお検討を加えるにあたって、次の記述を用いる。2つの線、xとyとの交点についてはP x yと表現する。推定される交点はPにかえPを用いる。ただしxの端の点を示す場合P x #、と表記する。この場合#記号が右に位置するときは右の端点を、左は左の端点を表現するものとする。

次に2点P x yとP z w間の距離については、〔P x y、P z w〕と表記する。

数字については特別にことわらない限り、単位はミリメートルとする。

◇ 可能性1 eとhの下方

$$〔P b e, P b h〕 \approx 28 \quad [P n l, P l \#] \approx 43$$

$$\therefore [P b e, P b h] < [P n l, P l \#]$$

従ってB片がeとhの下方に位置した場合、絵がP b eとP b hの範囲に納まらず、極めて不自然である。故に<可能性 i >は否定される。

◇ 可能性2 bの下方でjの右側

$$(P b j, P b e) \approx 40 \quad (P l n, P l \#) \approx 43$$

$$\therefore (P b j, P b e) < (P l n, P l \#)$$

従ってB片がbの下方でjの右側に位置する場合も、<可能性 1>の場合と同様である。しかし<可能性 1>と違って、その差は(P b i, P b j)に近似する。すなわち柱一本分である。

◇ 可能性3 bの下方でiの左側

$$(P \# b, P b i) \approx 18 \quad (P l k, P l \#) \approx 15$$

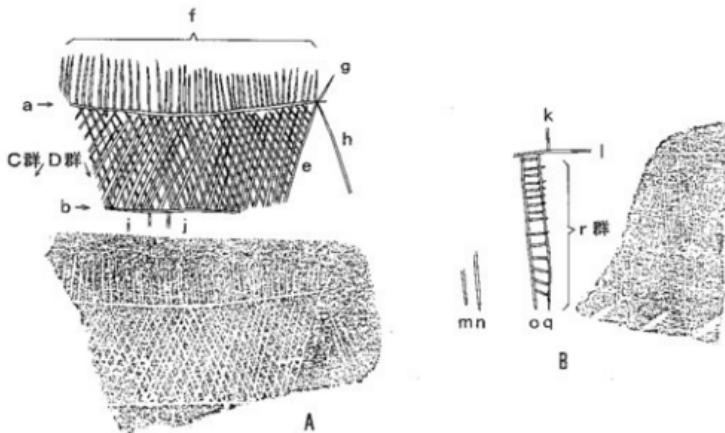
$$\therefore (P \# b, P b i) > (P l k, P l \#)$$

従ってP b kはP # bより左に位置すると考えられる。

$$(P l n, P l o) \approx 18 \quad (P l q, P l \#) \approx 18$$

$$\therefore (P l n, P l o) \approx (P l q, P l \#)$$

これによりB片の右側にも柱が存在することが想定できる。それがi、jで表現される柱であると仮説をたてても、否定的な要因はない。



k については、入口を表現していると考えられ、梯子を軸にした対称な線が描かれていた可能性が強い。

$$(P\#l, P\mid o) \approx 2$$

$$(P\mid q, P\mid k) = 3$$

$$\therefore (P\#l, P\mid o) < (P\mid q, P\mid k)$$

従って k に対応する線分は、 $P\#l$ より左に位置することが妥当となる。この事実は B 片が梯子を中軸とする対称な絵が描かれていることを示す。

以上から <可能性 3> が成立すると考えておきたい。

次に A 片を中心に幾何学的な要素も入れて検討してみよう。良く観察すると a は、上方に湾曲している。一方 b はほとんど湾曲が見られない。

ところで土器の表面は球面そのものでないが、それに近い。以下球面と想定して考察を進めていく。

球面上に線を描いた場合、平面上と比べいささか事情が異なることを、私達は経験上承知している。直線を描いたはずの線が曲線に見えることがある。これは球の中心を通る切断面（この切断によって生じる円を大円という。）に平行な断面があるとき、両者を真横から観察すれば、両方の断面は平行線に見えることに起因する錯覚である。一般に球面上の直線は、大円の一部をなす弧に限られる。

a と b との相違は、ここに原因すると考えられそうである。大円に近い——最大径により近い b が、 a に比べてより直線的なのは当然と考えられる。A 片を横方向から透視すれば、 a と b が平行気味に見える。従って土器という球面を持つ物体を平面的にとらえて、絵が描かれていると考えられる。

さらに c 群について観察すると右の方ほど線分の傾斜が緩くなる傾向が読みとれる。経験論ではあるが、絵画のポイントから離れる場合に、自然に起こる現象である。従って絵画の中心となる付近は、A 片の左側付近と想定できる。上記に帰れば、 a が土器の頸部分と最も距離があるのが、A 片の左側付近である。また f 群も A 片の左側付近で、大きく描かれている。以上の各知見から A 片の絵については、A 片の左側付近に視点を置いて描かれたと判断したい。

以上の判断は B 片が b の下方で i の左側に位置するとした先の考察と齟齬をきたすものではなく、むしろ積極的に支持するものである。梯子および入口を描いただろうと考えられる o 、 q 、 k は、絵の中心的な位置を占めていると判断していいであろう。

先に述べたように B 片は対称な絵である可能性が高い。対称は B 片だけでなく、A 片も対称形に描かれている絵画の一部と考えるのが自然である。また弥生時代の家を題材にした絵画は、左右対称形に描かれることが多い。従って B 片に描かれた梯子を軸にした対称形の絵が復元できる。

次に問題となるのは、 h の存在である。一般的な見方をすれば切妻の建物を立体的に表現したものであって、妻部分の縁を表現する線と考えられる。しかし全国各地から出土している弥生時代の絵画土器、また伝謹岐銅鐸に代表される青銅器に描かれた絵画のどれをとっても、奥行きあるいは遠近感という三次元を表現した手法が見られない点は事実である。久米池南遺跡の例だけが特異

である理由はないとすれば、むしろ屋根部分を斜格子で描く等、他例との共通項が多い。従って三次元を表現した手法ではないと考えておく。

とするならば、に対する評価は、棟持柱とするしかない。確かに柱が2本の線で描かれるのに対し、1本の線を棟持柱と考える場合、若干問題があるとの指摘がなされよう。しかし他遺跡出土の絵画土器にもそうした表現が見られることから、当該絵画が立体的に表現されているとするよりは、棟持柱と考えた方が、妥当性を有すると思われる。

復元された絵画は三間の平入構造の掘立柱建物で、中央部に梯子が付く。そして入口が表現されるが、その形状は不明である。神社建築でいえば神明造と呼ばれる形式に属する。

ところで、第1号掘立柱建物は三間×一間の構造のもので、さらに平入部中央付近外側に位置するピットを、梯子に関連したピットとすれば、復元絵画にはほとんど一致する。第1号掘立柱建物は遺跡の最も良好な地点を占めることから、集落にとって極めて重要な建物であったに違いない。集落の象徴的存在であった建物を描いた特別な土器を造り、それで以て祭礼をとり行うか、あるいは重要な物の保管に充てた等のことが考えられる。その意味等については今後の検討等に委ねたい。

いずれにしても本例は、久米池南遺跡の象徴的な建物を描いた可能性の高い絵画土器である。

3. まとめ

久米池南遺跡出土の遺物については第6号竪穴式住居例を除いて、多くが破片で得られた。最も多量に出土したのは第2号テラス状遺構で、埋土に混入した土器片はかなりの量である。他の遺構についても、埋土に混入されて出土している。竪穴式住居を例にとれば、床面直上の出土例もあるが極めて少数で、偶然の産物であると考えたほうが適切である。石器についても同様である。

土器は、器種を限らずその口縁部の殆どに凹線文がみられる。凹線文の盛行する時期のものである。一般に紫出山遺跡出土の土器と様相が酷似するが、微細な点で相異も認められそうである。その第1として、B型とする壺形土器が見当たらない点であり、D型とする壺形土器には脚が付く場合が多いが、本遺跡ではそのような例は見られない。久米池南遺跡から出土したそれらの土器片が示す年代感を、中期末としておきたい。

石器については、同時代の遺跡の出土品と、そう大きく変わらない。サヌカイトを利用した打製石器と、結晶片岩等を主体とする磨製石器である。前者は、打製石庖丁や打製石鎌を主とする。なかでも打製石鎌については、大型品が目立つ。ただし、紫出山遺跡のように凹基式が主流を占めるのではなく、凸基式が多数である点、大きく異なる。畿内に近い様相を持っていると考えられよう。

磨製石斧については、完形品が1点と極めて少なく、大部分が破碎されたものであった。工具として、十分に使い込まれたと考えておきたい。

なお、ナイフ形石器が数点確認できるとともに、弥生時代のそれより風化の度合が進んだサヌカイト片が何点か出土した。おそらく、小規模ながら旧石器時代の遺跡が存在したのであろう。

鉄鉢と推定される鉄器を始め、香川県の高地性集落として著名な紫出山遺跡や心経山遺跡同様多くの鉄器が出土した。しかも、鉄器の総重量では、両遺跡を凌ぐものと思われる。その点でも極め

て重要で、当時貴重品であるはずの鉄製品を多く持つ本遺跡の立場の強さが想定できる。

その他の、注目される遺物として、絵画土器片、炭化米、焼結土塊等があげられる。絵画土器については、先に記述したように第1号掘立柱建物を描いた可能性が指摘できる。祭礼に関係した重要な土器であろう。

第5号竪穴式住居のように焼失した例も確認できたが、ほとんど遺物は残っておらず、突発的な火災と考える必要はない。むしろ全体の遺物の出土状況から、集落の放棄が、意図的に行なわれたと考えられよう。

第6号竪穴式住居については事情が異なる。完形土器が多量に出土した点で大きく異なり、さらにその時期が四線文盛行の時期をかけ離れている。出土状況が採土工事に拘るもので、その出土時の配置等は不明である。ただし描绘文で装飾する土器もあり、一般的な集落における一般的な土器とは様相が異なると考えられよう。これは単独で存在する点とも、通じるものがあるかも知れない。

次に集落としての構造について考察してみたい。みかけ上、第1号掘立柱建物を囲んで、竪穴式住居が存在する。さらに外側にテラス状遺構と土壙墓が所在する。すなわち重構造を持つと考えられる。ただし、第11号竪穴式住居の存在や、第3号テラス状遺構の存在から、集落の重要な部分、すなわち生活における空間は、尾根筋に細長く延びているものと考えられよう。さらに重要な部分の核として、第1号掘立柱建物が所在するのかについては、慎重になるべきである。絵画土器が、第1号掘立柱建物を描いたと認められるのならば、それに集落の核としての資格を与えることも、あながち滑稽無駄とはいえないところである。ここでは、第1号掘立柱建物を守備するかのような集落と考えておきたい。

さらにテラス状遺構とともに集落の外縁を構成する土壙墓についても、重要なことが指摘できる。それは鉄剣が副葬された土壙墓である。墓が集落の一構成であり、しかも当時貴重な物である鉄剣を持つことは、墓の主が一般集落構成員と比べ、卓越していた状況証拠である。

重構造の集落、卓越した人物の存在、さらには鉄錆に代表される鉄器の量、畿内的な様相の石鏡等、本集落が当時の社会情勢の反映の、一つの姿であるとするならば、弥生中期の久米池南遺跡周辺が、他地域との関連の上で、社会的にも政治的にも卓越するとともに、極度の緊張状態にあったと推定できる。

埋葬施設は、弥生時代に属すると考えられるものと（第1グループ）、それ以降とに大きく分けられる。後者はさらに須恵器を伴出する時期（第2グループ）と、それ以前（第3グループ）に細分できる。

第1グループは、鉄剣を出土した第1号土壙墓を始め3基の土壙墓が、これに属する。しかも等高線に直交するという一般的なあり方と違った、極めて特異な形態である。

第3グループは茶臼山地区の斜面に造られた古墳で2基がこれに属する。明らかに横穴石室の構造を持ち、古墳時代終末に位置付けられる須恵器および土師器を出土している。比較的小型で形骸化の認められる横穴式石室で、遺物の示す年代感と大きく異なるものでない。

第2グループに属するものは、第1グループと第2グループとの間、時間にすれば五百年余りの差を持つ。さらに位置から大きく2つにグルーピングできる。傍生山地区と茶臼山地区である。

傍生山地区では、弥生時代の遺構に接する位置で検出されている例がある。従って弥生時代の遺構とかけ離れた年代感を与えることは不可能である。

茶臼山地区では、高松平野東部に君臨する前方後円墳・茶臼山古墳の前方部付近に見られる箱式石棺群が注目される。同古墳については、昭和44年度に発掘調査が実施され、そのおり前方部付近から、多くの埋葬施設が発見された。1基の弥生時代に属する上塙墓を除いて、いずれも前方後円墳に伴う小型の埋葬施設と考えられている。この茶臼山地区で検出された箱式石棺群の性格も同様であろう。

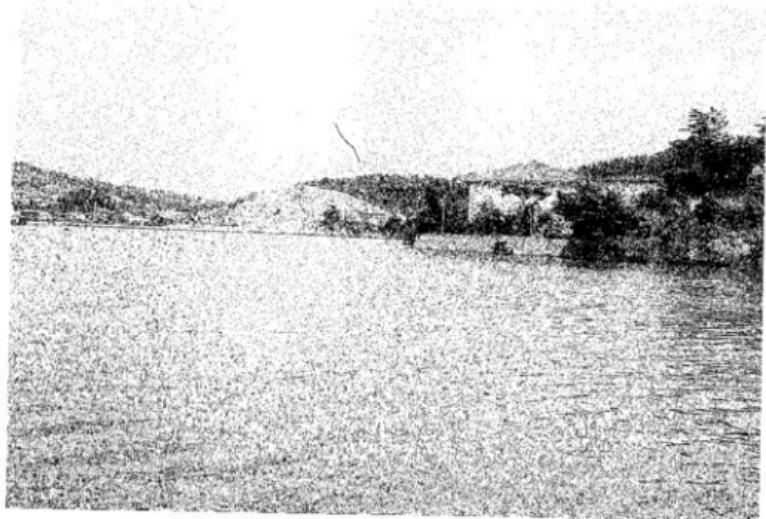
次に、横穴式石室の存在である。いずれも、古墳時代後期あるいは終末期に属するものである。付近の箱式石棺と系譜的なつながりがあるのか否かについては、発掘調査においても特別な情報を得られたわけではない。位置的なものは単なる偶然の可能性も否定できないので、ここでは関係ないものとしておきたい。

いずれにしても、高松平野最大級の横穴式石室を持ち銅鏡を出土したことで著名な久本古墳は、木造跡の北北東約1kmに位置する。久米池南遺跡の横穴式石室が構築されたときには、久本古墳に追葬が行なわれていたことは確実であり、その点が今後の課題として残ってこよう。

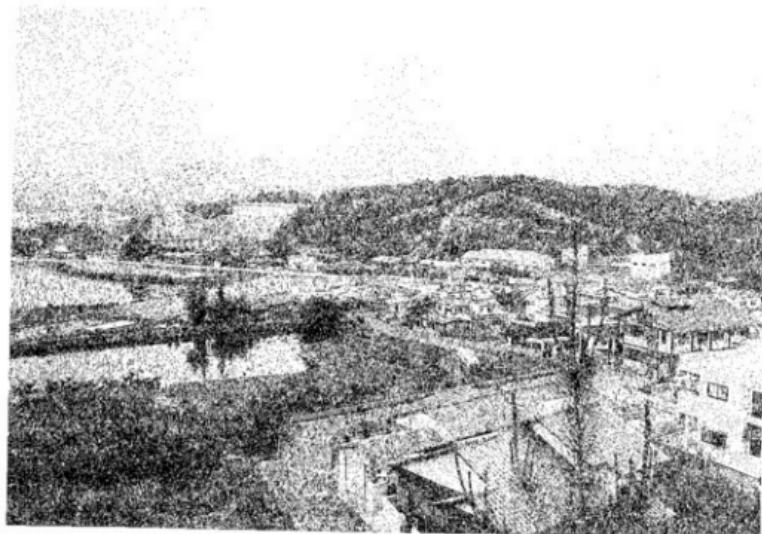
さらに、火葬墓が検出されたが、一般的に横穴式石室の終えんを以て、弥生時代中期に始まった久米池南遺跡周辺の利用はほとんど見られなくなり、従来の丘陵に回帰したと推定できる。

最後にあたり、発掘調査から報告書に至るまで、多人のご指導・ご支援をいただいた多くの方々に、心から謝意を表する次第である。

図 版

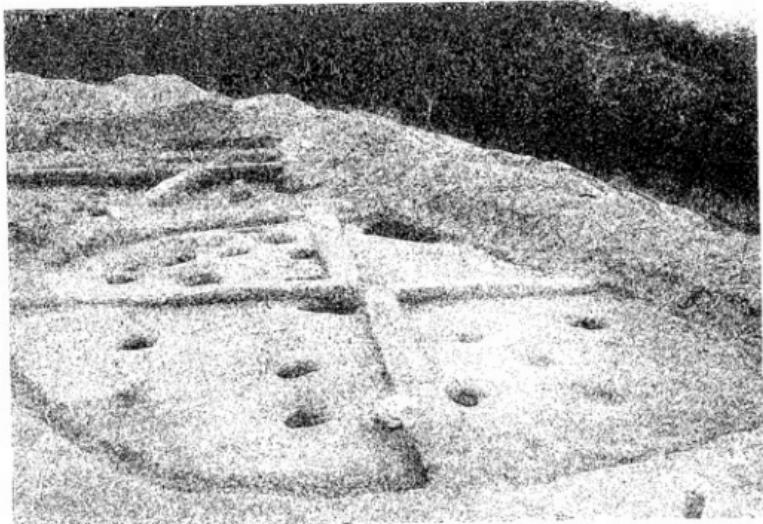


(1) 遺跡遠景（北西より）

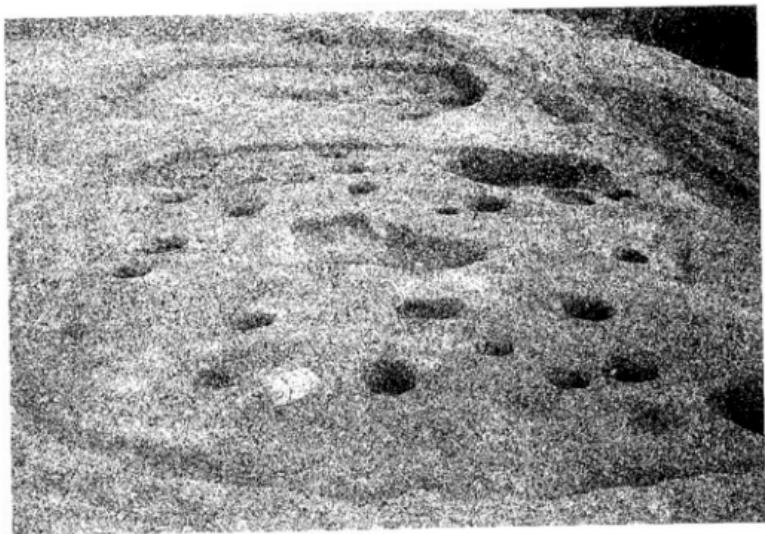


(2) 遺跡遠景（東より）

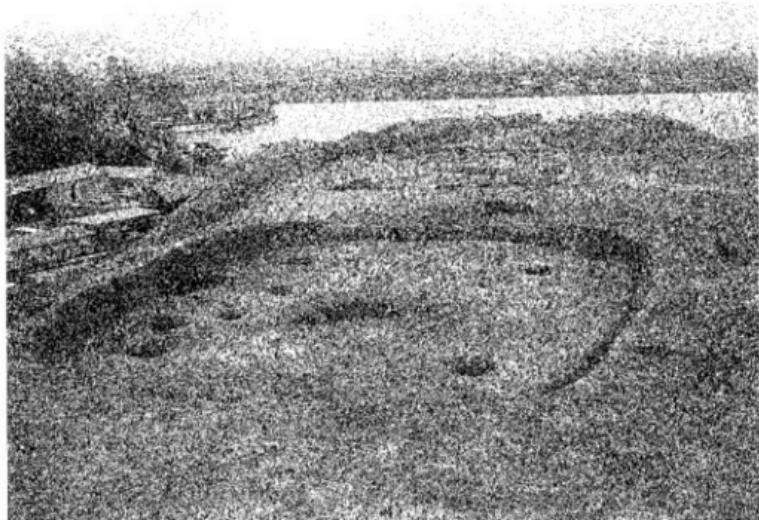
图版 2



(1) 第1号竖穴式住居



(2) 同上 完掘



(1) 第 2 号竖穴式住居

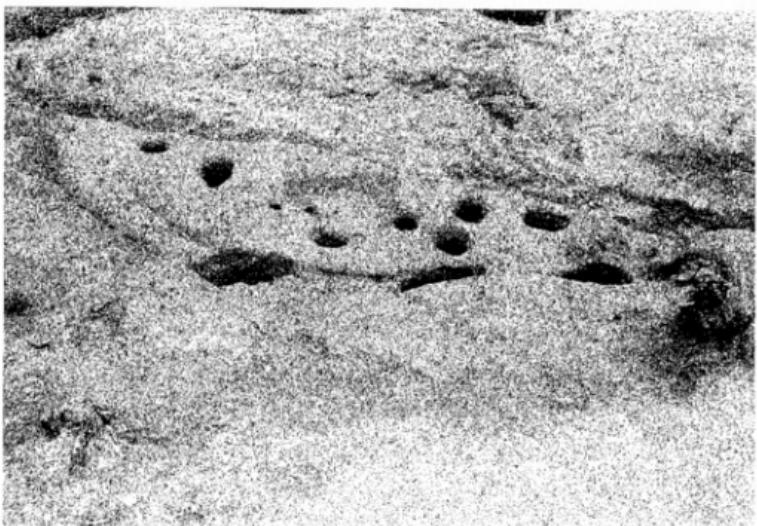


(2) 第 3 号竖穴式住居・第 2 号掘立柱建物

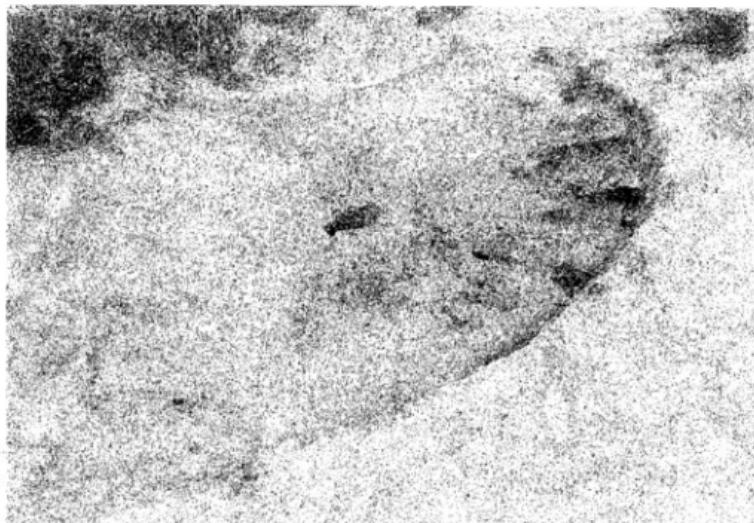
图版 4



(1) 第4号竖穴式住居土層



(2) 同上 完掘

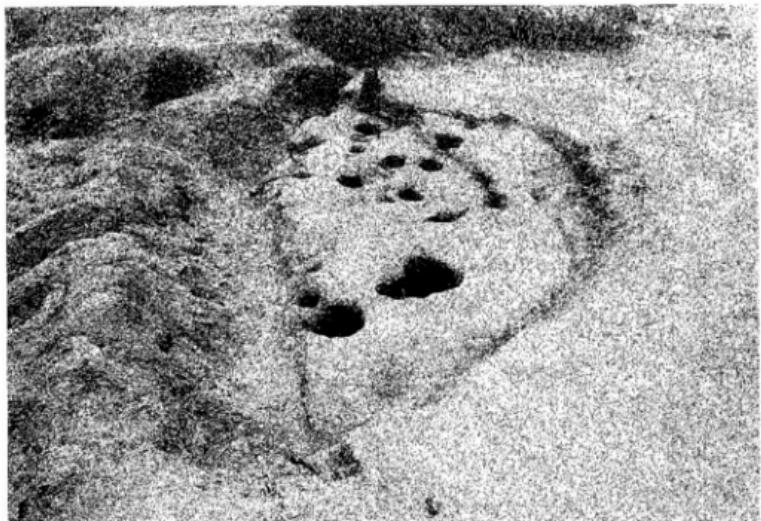


(1) 第 5 号竪穴式住居焼失家屋検出状況



(2) 同上 完撮

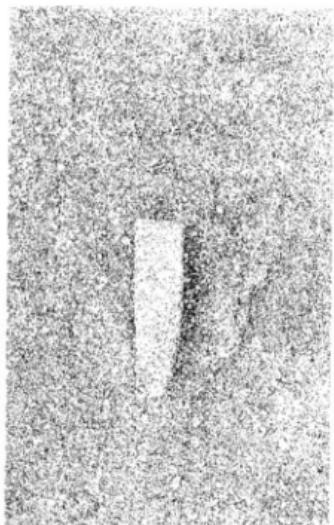
圖版 6



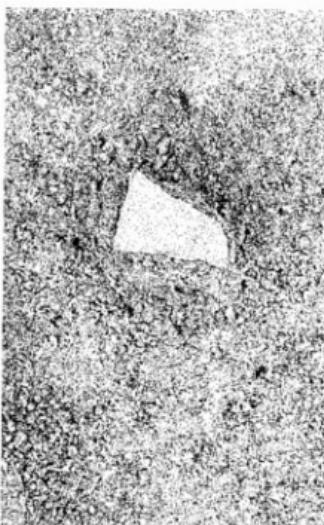
(1) 第 6 · 8 号整穴式住居



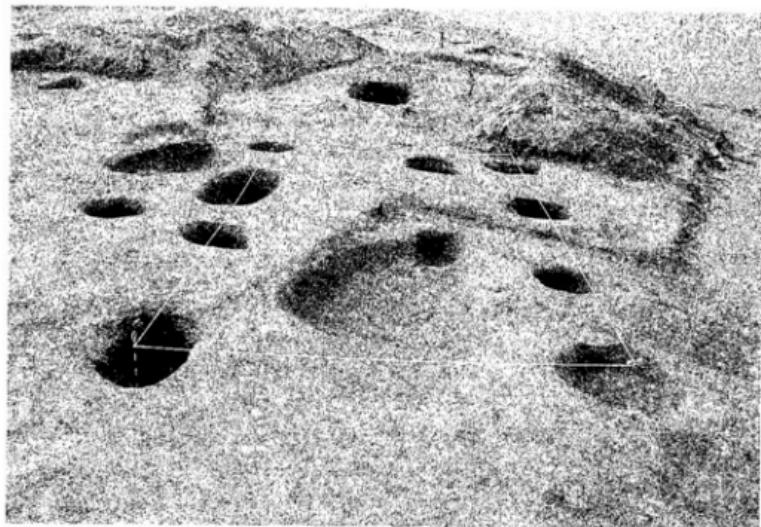
(2) 第 7 号整穴式住居



(1) 第 7 号整穴式住居石斧出土状況



(2) 繪画土器出土状況

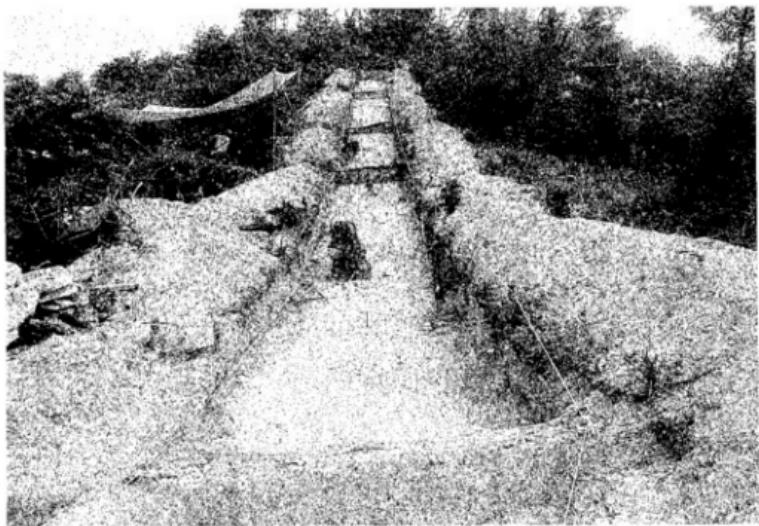


(3) 第 1 号掘立柱建物

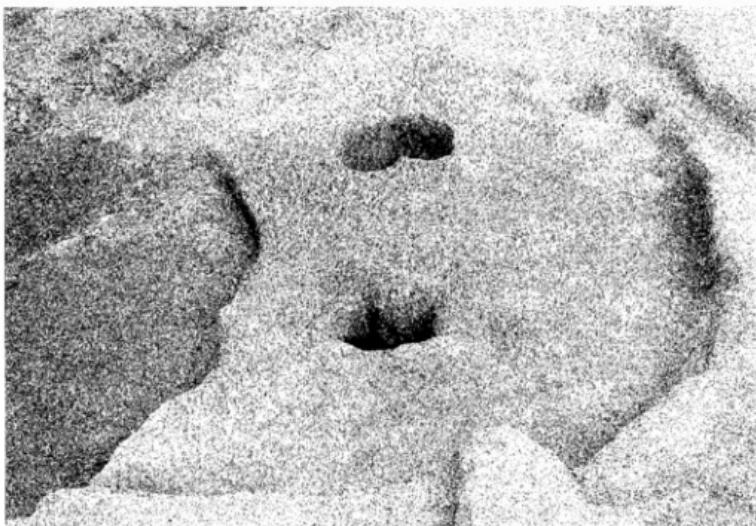
図版 8



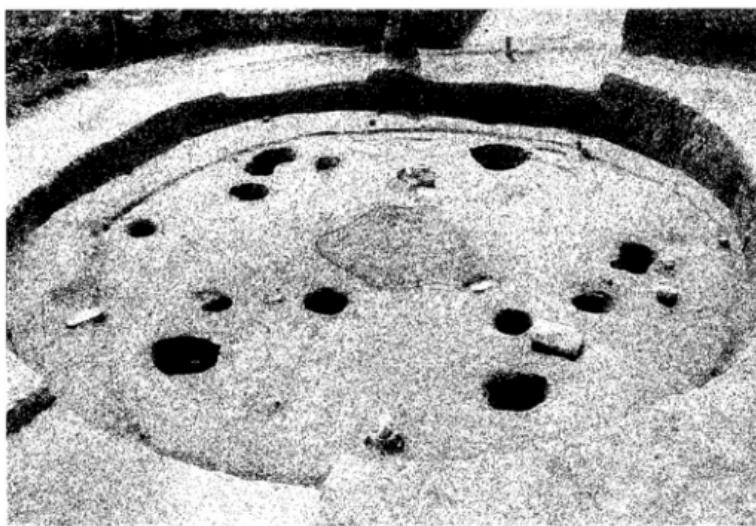
(1) 第9号竪穴式住居



(2) トレンチ完成



(1) 第10号竖穴式住居



(2) 第11号竖穴式住居

図版10



(1) ピット群



(2) 第1号テラス状造構



(3) 第2号テラス状造構土器出土状況



(1) 第2号テラス状遺構土層



(2) 第2号テラス状遺構

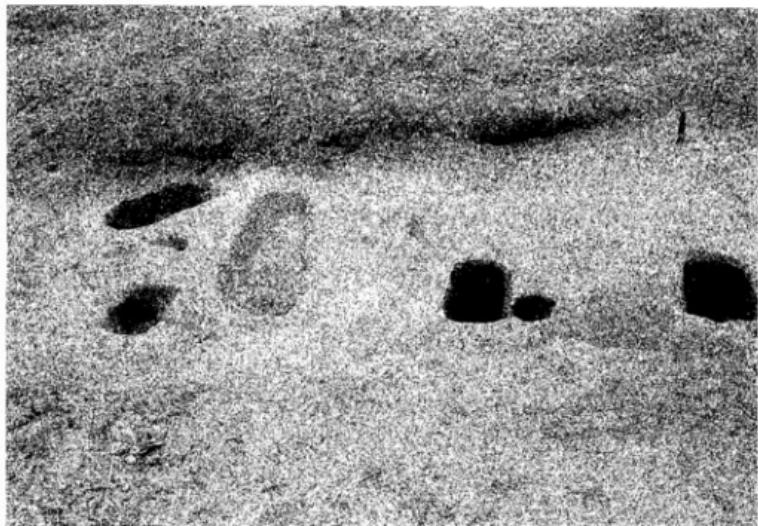
図版12



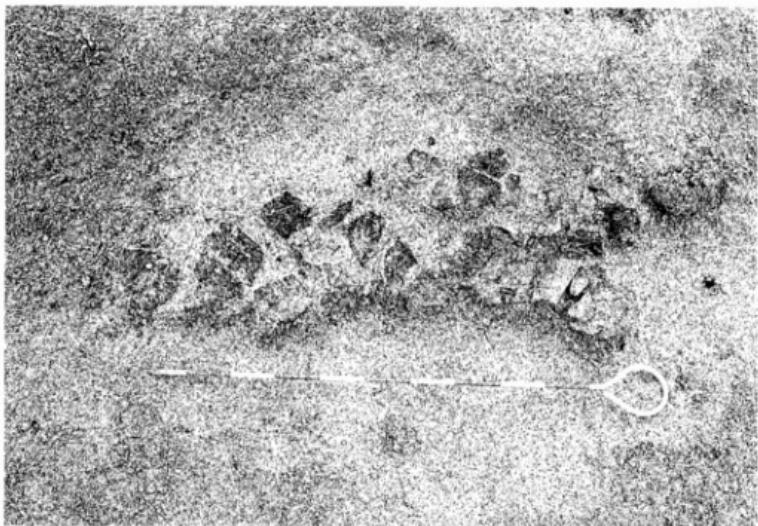
(1) 第3号テラス状遺構（南より）



(2) 第3号テラス状遺構（北より）



(1) 第3号テラス状遺構内ピット

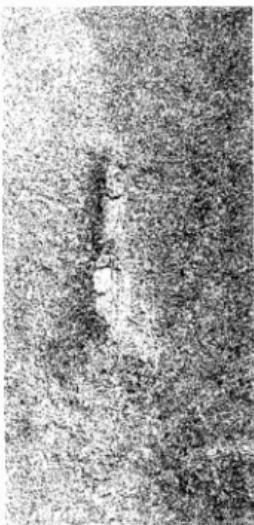


(2) 第3号テラス状遺構土器出土状況

図版14



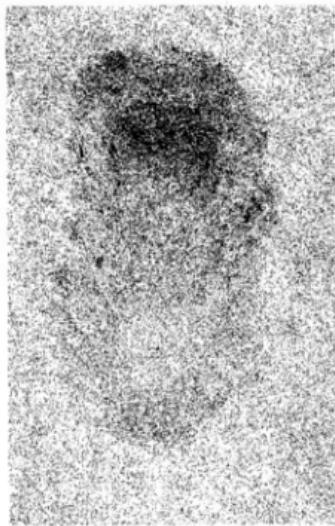
(1) 第1号土塚墓



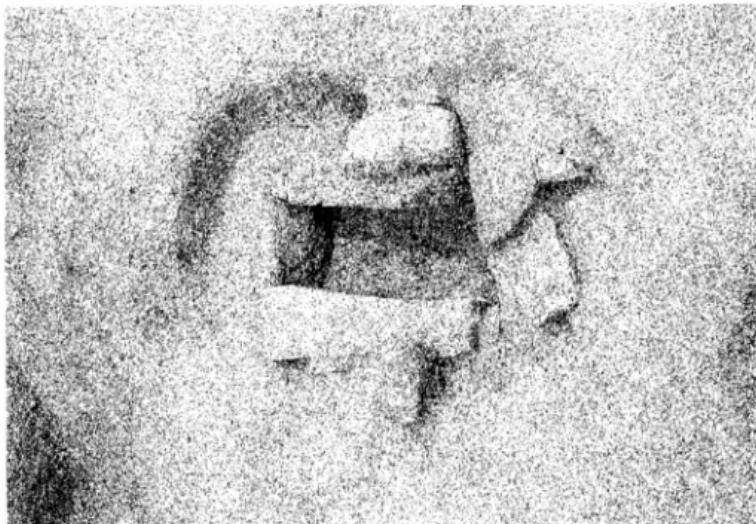
(2) 鉄剣出土状況



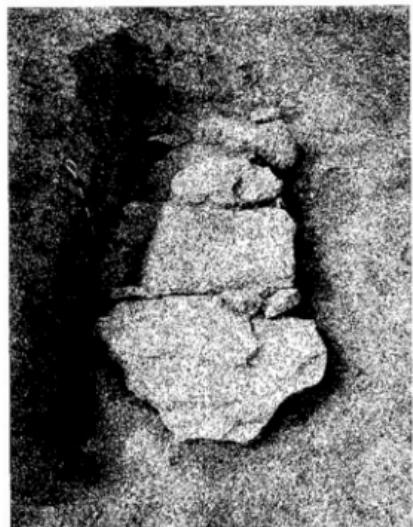
(3) 第2号土塚墓



(4) 第3号土塚墓



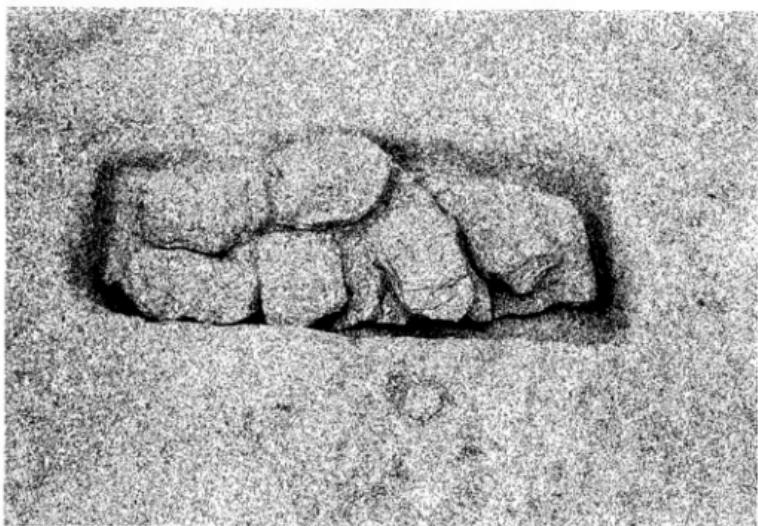
(1) 第2号箱式石棺



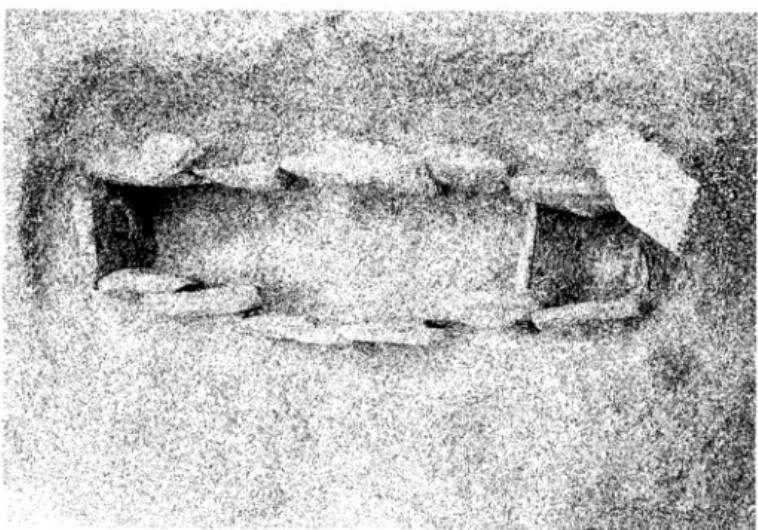
(2) 第4号箱式石棺蓋石檢出狀況



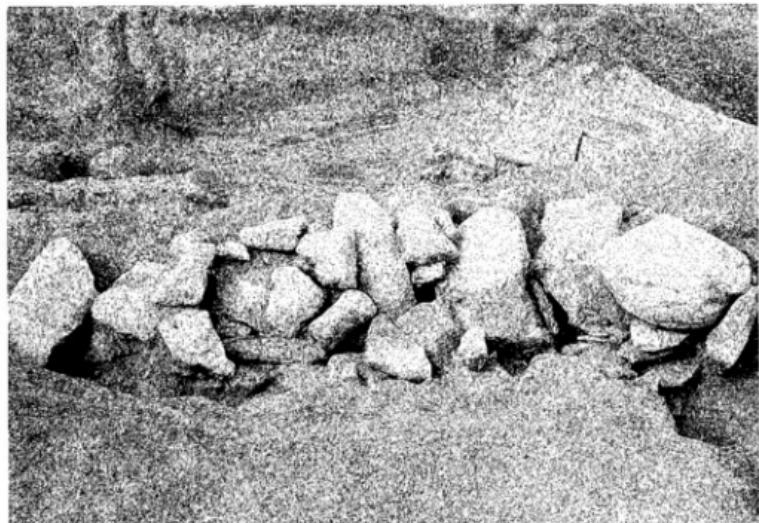
(3) 第4号箱式石棺



(1) 第1号石函土塋墓



(2) 第3号箱式石棺

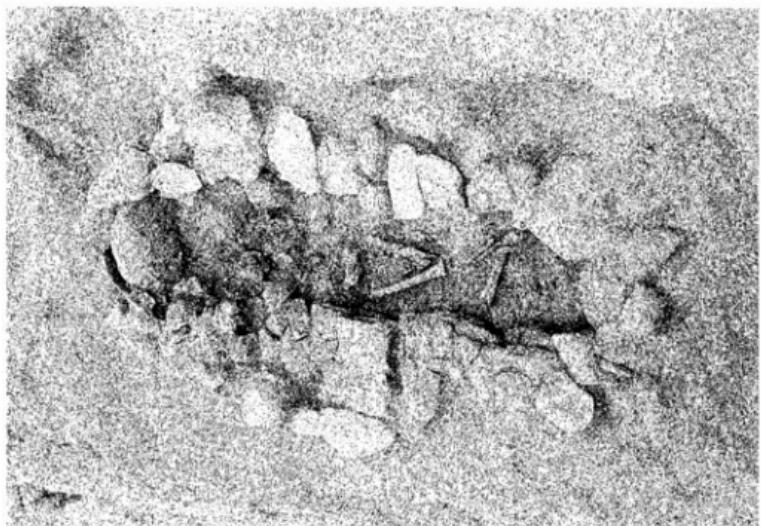


(1) 第1号竖穴式石室蓋石検出状況

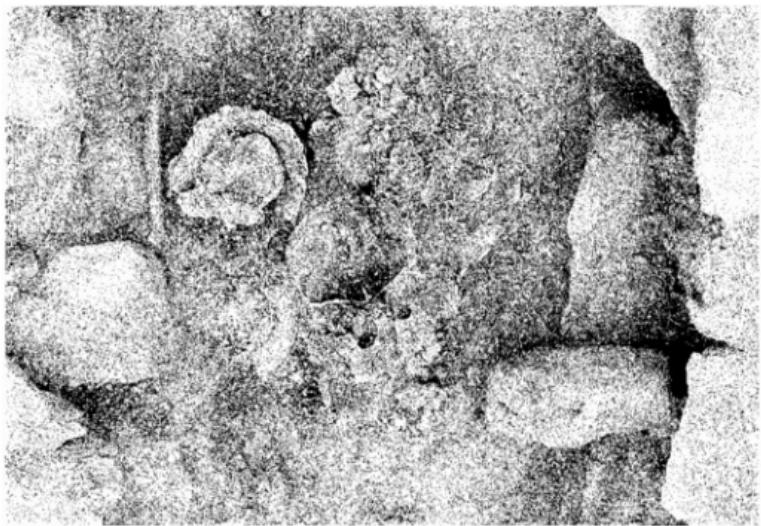


(2) 同上

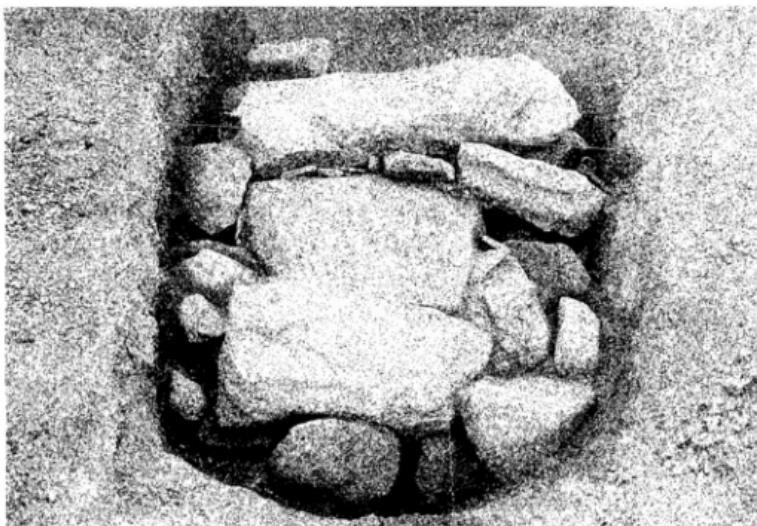
图版18



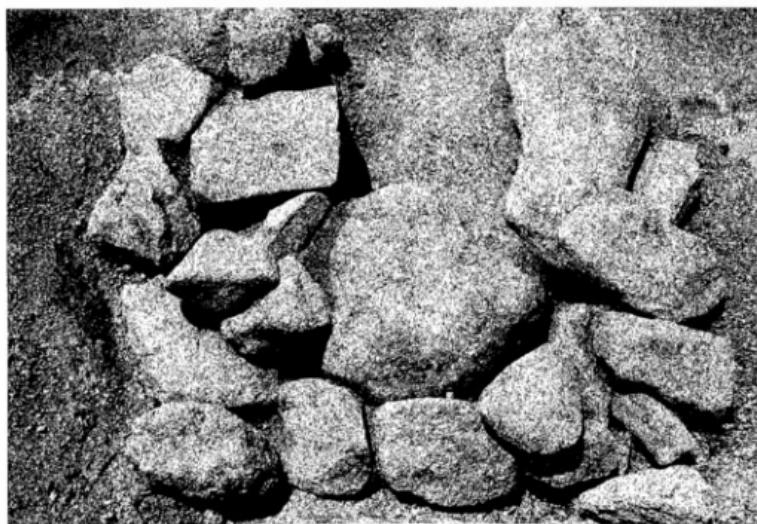
(1) 第1号竖穴式石室



(2) 同上 头骨部検出状況



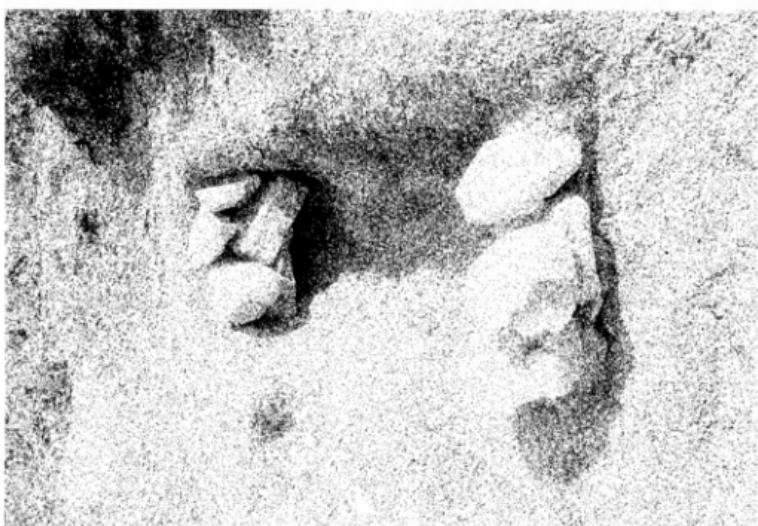
(1) 第2号堅穴式石室



(2) 第3号堅穴式石室



(1) 第1号無袖横穴式石室



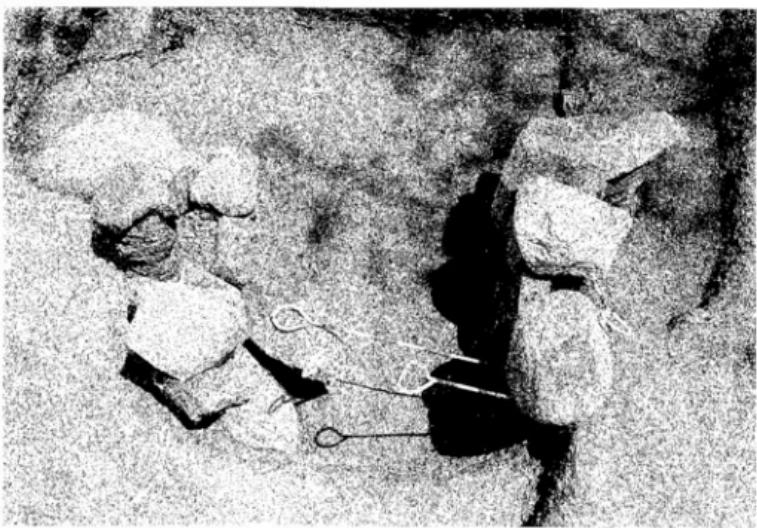
(2) 第1号小石室



(1) 第2号小石室



(2) 第3号小石室



(3) 第4号小石室

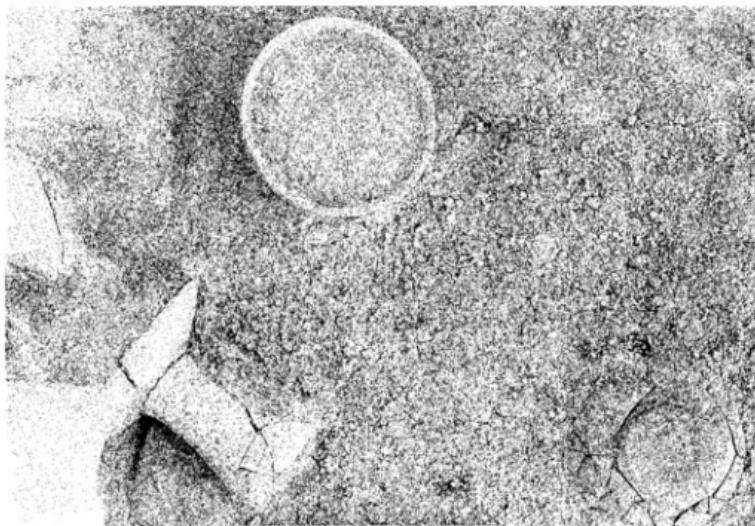
図版22



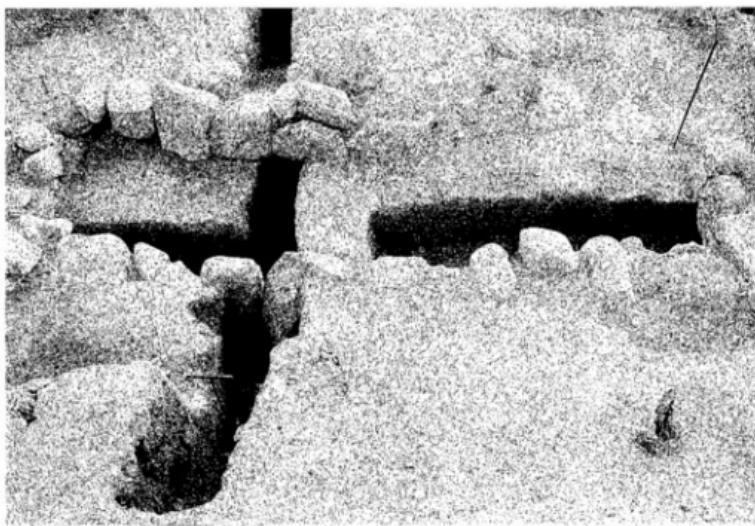
(1) 第4号小石室刀子出土状況



(2) 第2号無袖横穴式石室



(1) 第2号無袖横穴式石室内土器出土状況

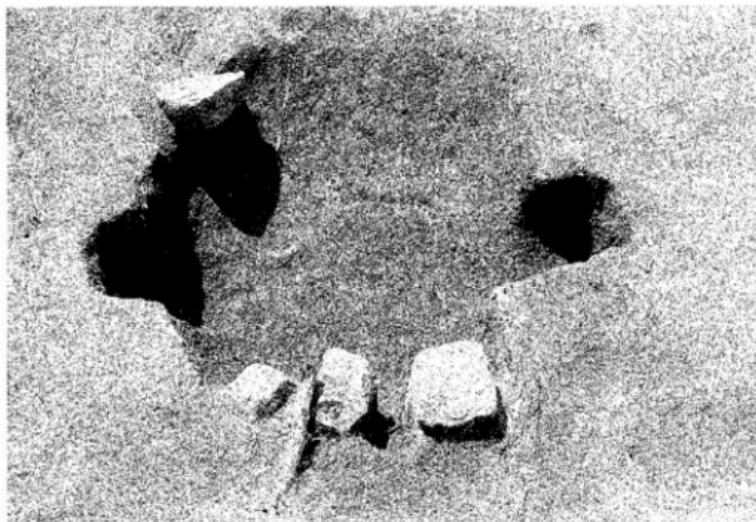


(2) 同上 完掘

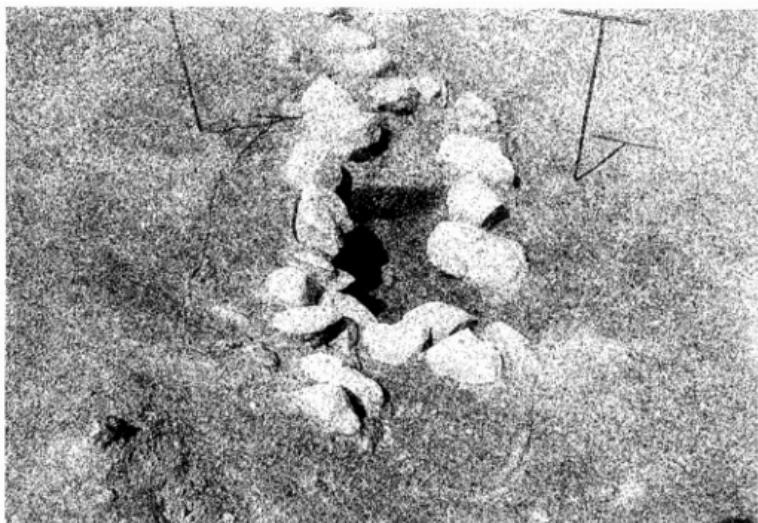
図版24



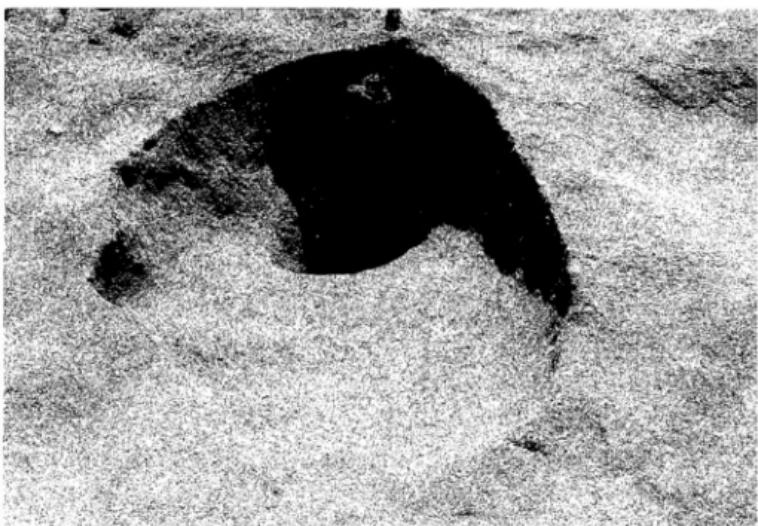
(1) 第6号小石室



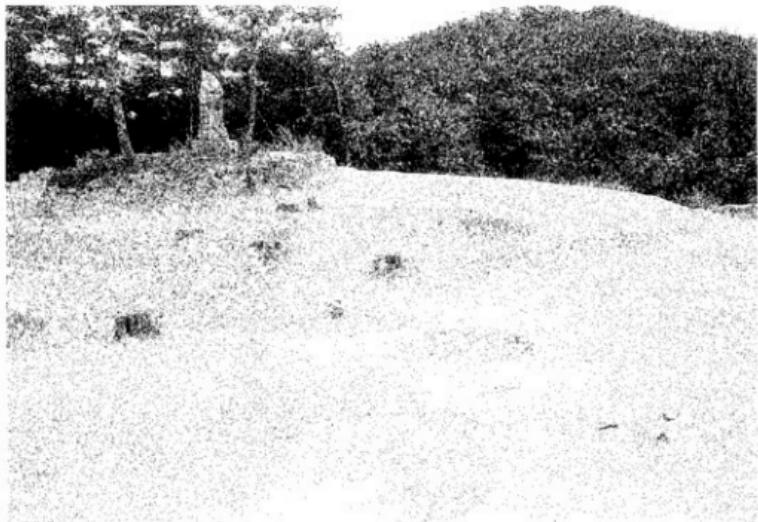
(2) 第5号小石室



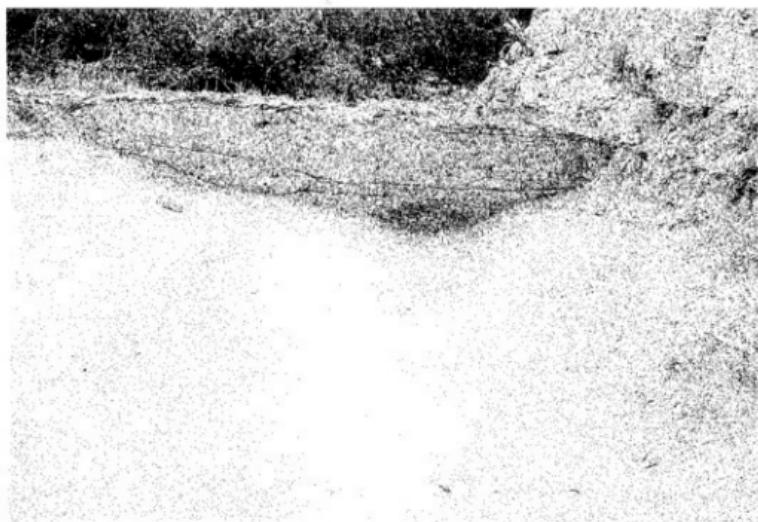
(1) 第2号石蓋土壙墓



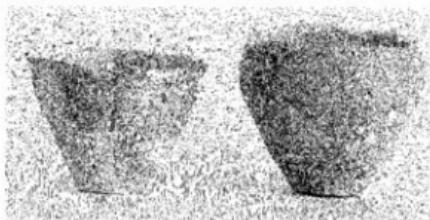
(2) 同上 完掘



(1) 茶臼山第8号墳



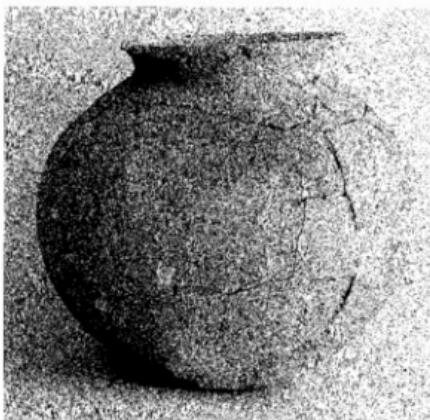
(2) 同上 周溝土唇



(1) 第2号竖穴式住居土器



(2) 第3号竖穴式住居土器



(3) 第6号竖穴式住居土器



(4) 第6号竖穴式住居土器

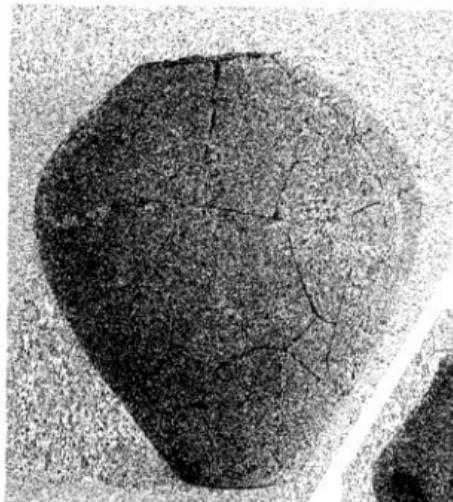
图版28



第6号竖穴式住居土器



(1) 第11号竪穴式住居土器



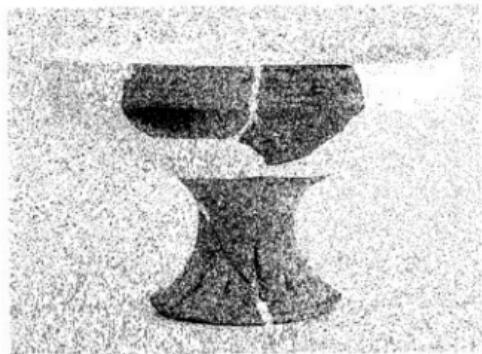
(2) 第2号テラス状造構土器



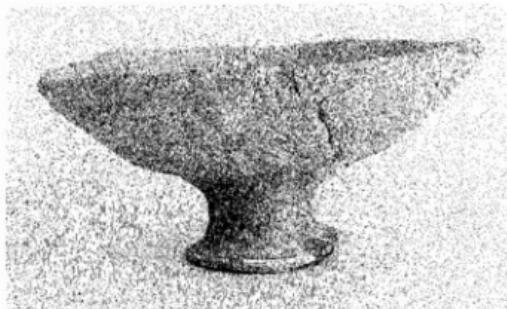
(3) 第2号テラス状造構土器



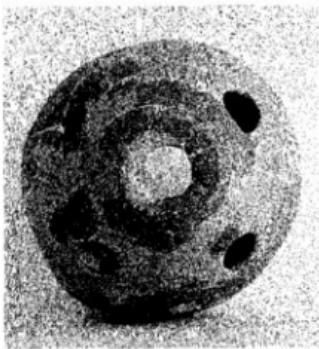
(4) 表探（第0号竪穴式住居）



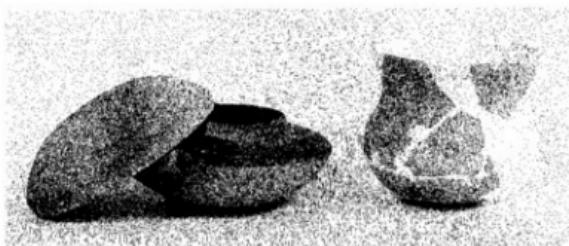
第2号テラス状遺構土器



(1) グリッド出土土器



(2) 第2号土坑土器

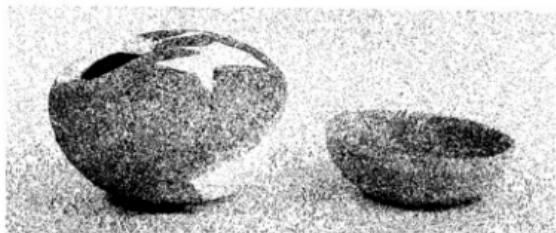


(3) 第1号無袖横穴式石室土器

(4) グリッド出土土器



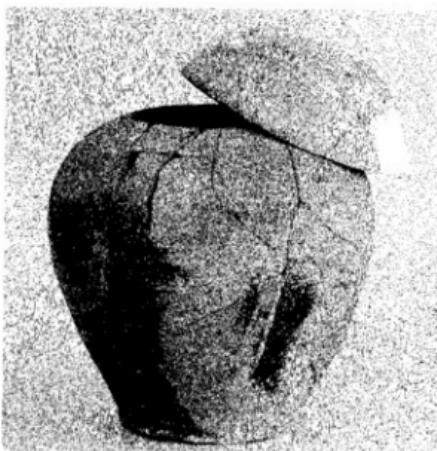
(1) 第2号無袖横穴式石室土器



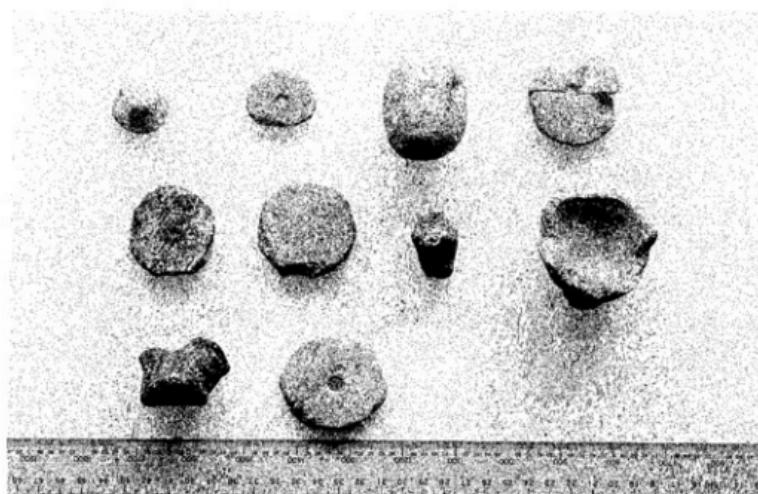
(2) トレンチ出土土器



(3) 茶臼山第8号墳土器



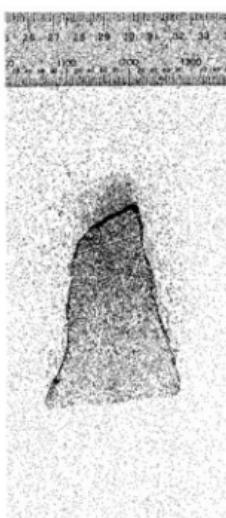
(4) トレンチ出土土器



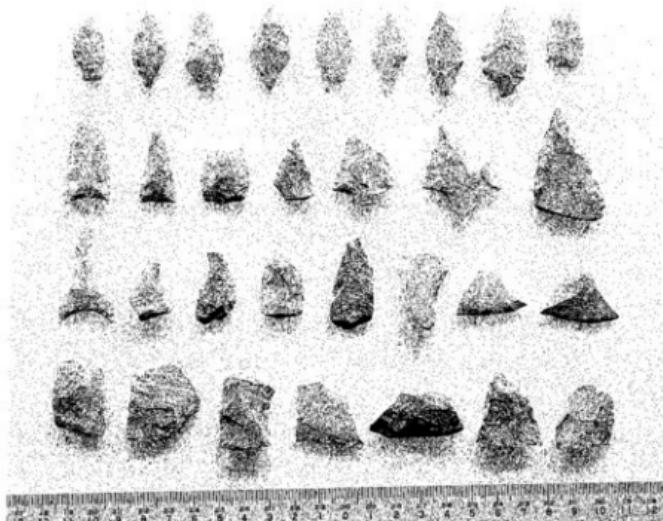
(1) 出土土製品



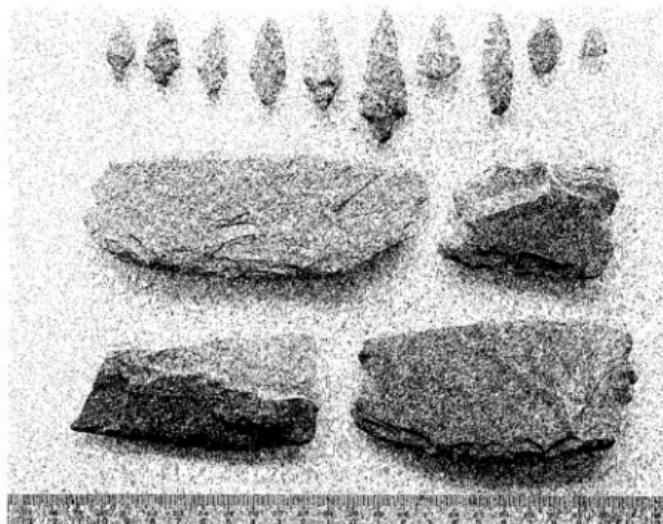
(2) 第4号竪穴式住居南側土坑土器



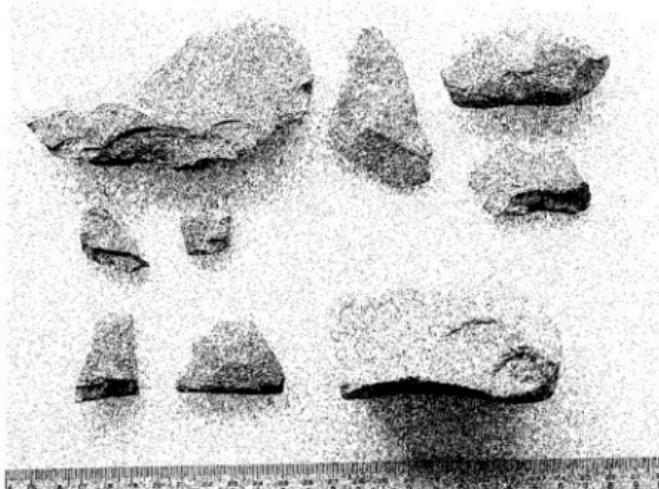
(3) 第4号竪穴式住居南側土坑土器



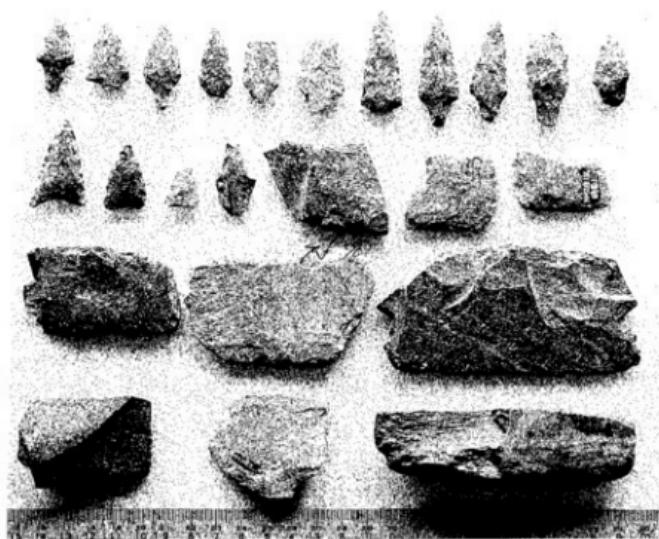
(1) 第11号竪穴式住居石器



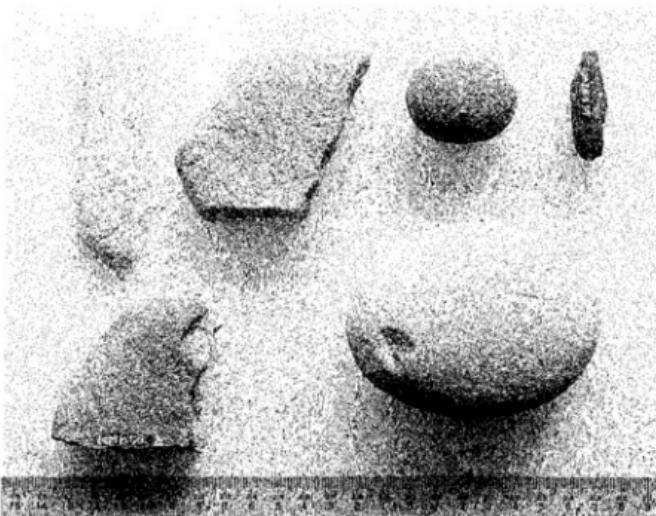
第1号竪穴式住居石器



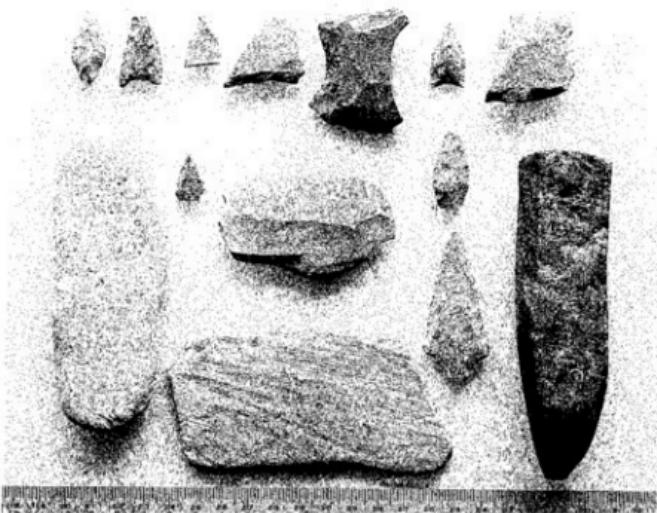
(1) 第1号竖穴式住居石器



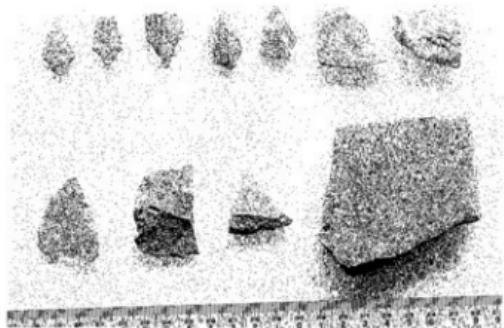
(2) 第2号竖穴式住居石器



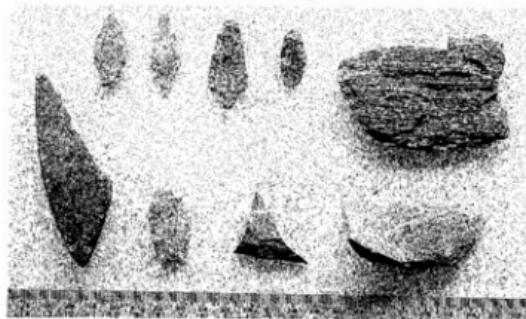
(1) 第2・5号堅穴式住居石器



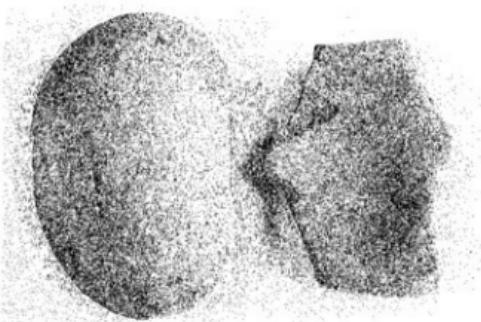
(2) 第5号堅穴式住居石器



(1) 第6号竖穴式住居石器



(2) 第10号竖穴式住居石器



(3) 第1号竖穴式住居石器

(4) 第3号竖穴式住居石器



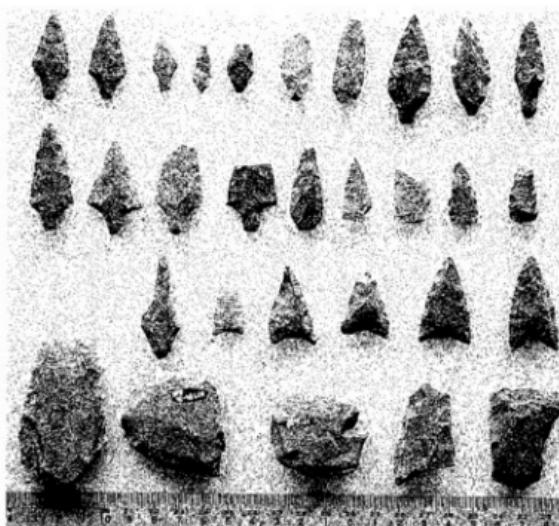
(1) 第11号竪穴式住居石器



(2) 第3号テラス状造構石器

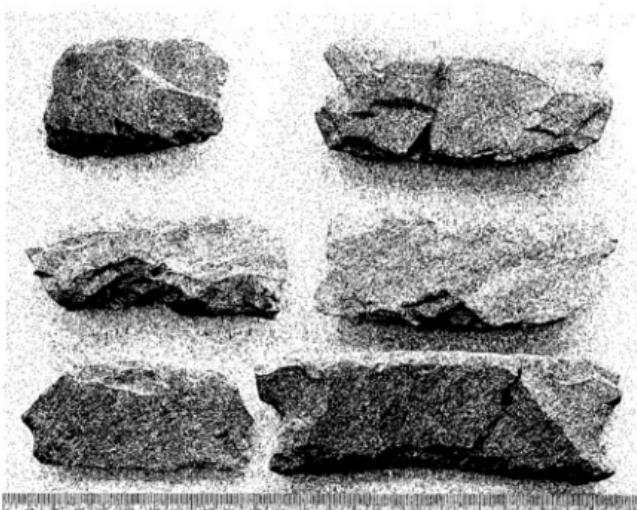


(1) 第3号テラス状造構石器

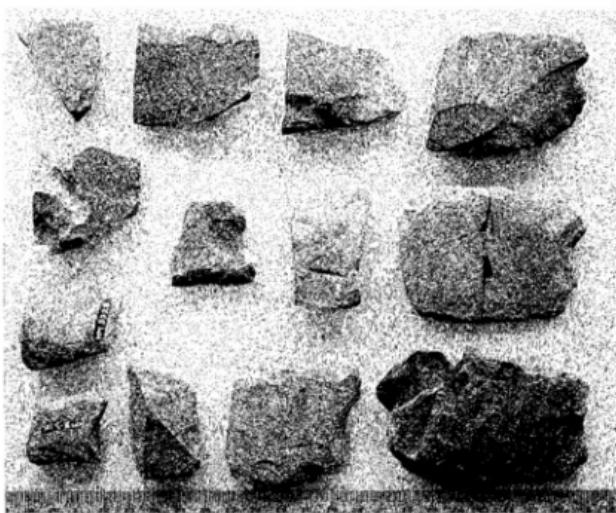


(2) 表探石器

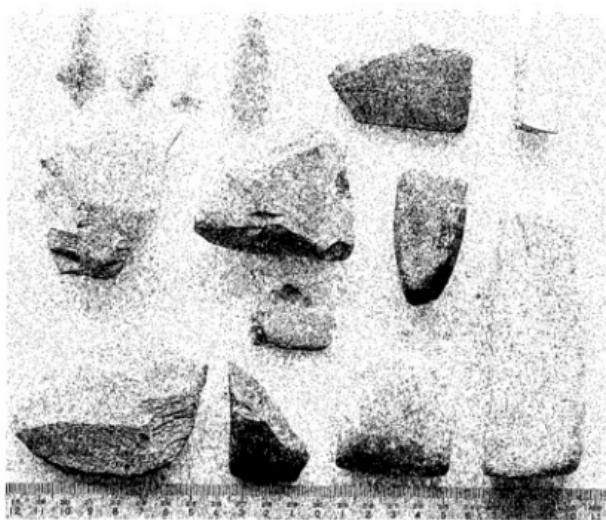
図版40



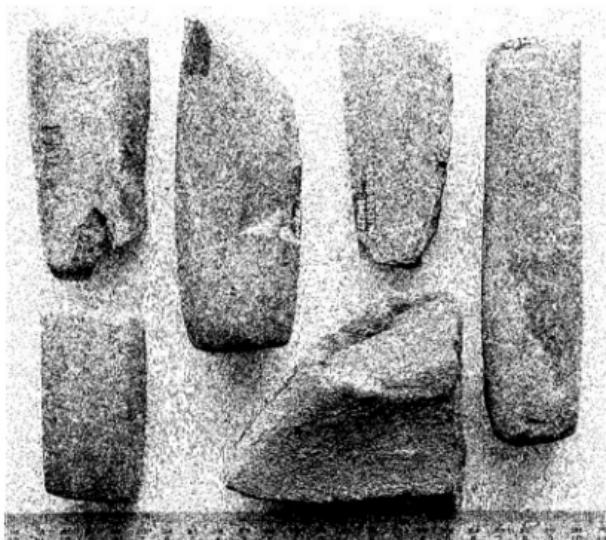
上(1) 第1号竪穴式住居石器 中(2) 第3号テラス状遺構石器 下(3) 表採石器



(4) 表採石器



(1) 表採石器



(2) 表採石器

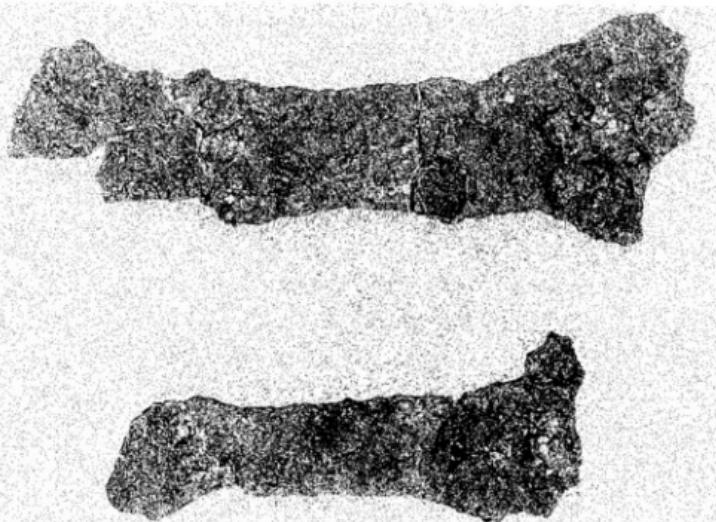
図版42



(1) 出土鉄器



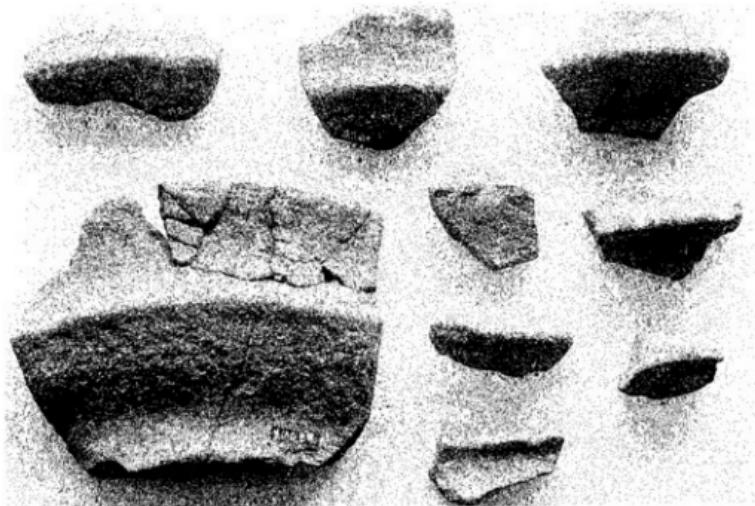
(2) 第1号土壤裏鐵剣



(1) 第2号テラス状造構鉄組



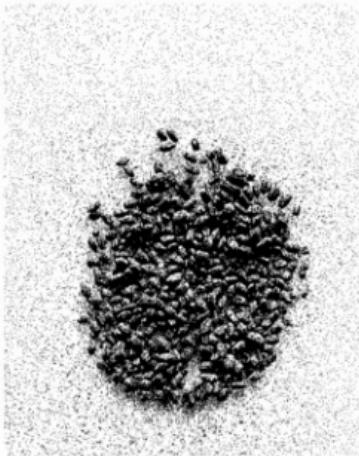
(2) 出土鉄斧



(1) 出土埴輪



(2) 表様石製品



(3) 第0号堅穴式住居址炭化米

久米池南遺跡発掘調査報告書

平成元年3月31日 発行

編集
発行 高松市教育委員会

印刷 高東印刷株式会社